



## 目次



- \* 「私たちの隣人とは」(ワークキャンプの意義)・・・・・・・・・・ 1
- \* 2003年度のフィリピンワークキャンプについて・・・・・・・・・・ 3
- \* ワークキャンプ参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- \* メンバー紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- \* フィリピンワークキャンプまでの主な活動内容・・・・・・・・・・ 11
- \* ワークキャンプ活動概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- \* 現地でのタイムスケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- \* Farewell Party・Community Night・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
- \* ワークキャンプ報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- \* フィリピンワークキャンプに参加して・・・・・・・・・・・・ 57
- \* 「東南アジア青年の船」の青年との交流会でのスピーチ・・・・ 60
- \* チャペルアワーの奨励・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
- \* 明治学院教会における報告会でのスピーチ・・・・・・・・・・・・ 77
- \* 今日の出来事新聞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- \* ソーランぶ新聞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- \* ワークキャンプの新聞記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- \* ハビタット感謝状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- \* ワークキャンプ写真集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 巻末付録

## 「私たちの隣人とは」（フィリピンワークキャンプの意義）

鍛冶 智也 宗教部長

「『さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」

ルカによる福音書 10：36 - 37

上記の聖書の箇所は、もっとも良く知られた箇所の一つで「汝、隣り人を愛せよ」などのように、日本語表現でも定着しているところです。このポイントは、「自分を殺して、他人を愛しなさい」とは言っておらず、自分を愛するように、隣人を愛しなさい」と言っており、まず自己愛を強調した上で、他者への愛を主張しているところにあります。もう一つのポイントは、「誰が本当の隣人だったのか」ということです。しばしば、「あなたの隣人は誰か？」という形で投げかけられます。旅人の近くを通った祭司は、当時、イエスの話を聞いていた人々の社会においては、宗教的な指導者です。尊敬されていた人たちを指しています。そしてレビびとは、法律の専門家たちを指していますので、世俗社会の権力者、指導者たちを指しています。サマリア人とは、当時の社会では差別されていた在留外国人で、今の日本で言えば不法滞在者とか、不法居住者とかがそうした人々になります。旅人が、助けを必要としている状況にもかかわらず、人々に模範を示すべき指導者たちは、全く助けをせず、差別を受け、虐げられている人が温かい援助を差し伸べた時、「人を本当に愛するということは、一体どうゆうことなのか」ということを考えさせます。

今年のフィリピンのワークキャンプでは、ゴミの埋め立て地でごみ拾いをしている人々、その近辺で劣悪な生活を強いられている人々に、住宅を建てる作業に関わりました。土を掘り、ワイヤーを曲げて、鉄筋コンクリートの筋肉を作り、コンクリートのブロックを作りました。また、建設作業とは別に、以前まで不法に居住していた地域に新しいコミュニティができつつある場所で、ゴミの再利用のプロジェクトに関わる活動もしました。

こうしたワークキャンプには、おそらく次のような意義があります。第1に、ワークキャンプは、「発見」の機会を与えてくれるものです。これまで知らなかったもの、あるいは無自覚でいたものを、認知し、確認する作業の機会を与えられます。これまで机上、机の上や教室の中では知っていたもの、テキストでは理解していたものの実態を垣間見、そして触れ、改めて発見する機会を「ワーク」を通じて得ることになります。これまで習得した抽象的な概念に、ワークキャンプは具体的な意味が与えられる場となっているのです。行く前には漠然と感じていたもの、あるいは偏見をもっていた事柄について、現実を発見するのです。多くの参加者たちは、フィリピンの社会の最底辺層で行き来している人々に対して、認識を新たにし、意義深い「発見」をしています。学生たちが、教室からでて、図書館から離れることの意義がここにあるのです。

第2の意義は、ワークキャンプは、当然に「経験」の機会が与えられるのです。土を掘り下げる作業では泥まみれになるし、毎回同じ作業の繰り返しで、筋肉は悲鳴をあげることになります。こうした、いわば当たり前だけれど、その経験からは実は遠ざかっている私たちに、「身体で覚えること」の辛さと心地よさを、改めて教えてくれるのであります。幼き頃の私たちは、拙い指先や全身で覚えたさまざまなことの集積を、知識として脳に記憶させてきています。考えてみれば、私たちの共有する知識とは、実は具体的な経験の集大成なのであり、あるいはその発展型にほかなりません。日常生活では、そして大学での学習生活では、既にある知識をもとに、追体験をし、疑似体験をすることが多いのですが、ワークキャンプにおいては、学習の本来の順序で、かつ原始的なあり方で、体験に意味が与えられ、経験へと成長する機会を得るのです。そこで、私たちのような教師は、教師とは、知識を与える担い手ではなく、経験を獲得するための道先案内人なのであることを、再確認させることにもなります。

第3の意義は、ワークキャンプでの経験は、「貢献」につながることで、実際のところ、数日で帰ってしまう私たちのようなボランティア・キャンパーが、キャンプの場で貢献できることは、実は微々たるものである場合が多いのです。いや、ワークキャンパーを指導し、世話を焼く手間と、キャンパーの仕事量を秤にかければ、もしかしたら非効率かもしれませぬ。仕事の内容を把握できた頃には、えてして帰る荷造りが始まっているのです。私たちはキャンプの間に、現地の人々、あるいは現地で働いている人々に出会います。そういった人々は、母国が抱える諸問題を説き、自らの責務を語り、将来のビジョンを描きます。夢をもち、希望を抱きます。ワークキャンプでの経験は、実は、その場での貢献と同時に、「その後」に役立てられて、意義を深めるものであります。そもそも大学での教育は、皆さんが日々受けている教育は、社会に良き貢献をする市民を育成することにあつたのではないのでしょうか。ボランティアの経験を、「私は、ボランティアを5回しました」というような、回数でかぞえられるものにしなないためにも、大学が社会の今と接点を保っていくためにも、この意義は強調されなければならないはずで

私たちは、フィリピンの人々、一緒に働いた人々の本当に隣人となつたのでしょうか？必要に応えることができたのでしょうか？しばしば、ボランティアの経験からボランティア自身が学びとることの意義、ボランティアをすると「得をする」ことが強調されますが、本来は人を助け、支えることがなければ、何をしに行ったのか分からないのも事実です。いわゆる、河川敷などのキャンプファイヤーの「キャンプ」とはここが異なるのです。たとえば、私たちは、フィリピンに、建設作業にいったのですが、それが、建設に関わることだけ留まらないのはすぐ明らかになります。私たちは、「建設作業」を体験しに来たのですが、作業のみをつまみ食いに来たのではないのです。自分たちの「ワーク」が人々に役立っていることが理解できて初めて、「ワーク」は経験へと深化するはずなのです。私たちは、自分たちの住んでいるコミュニティでは、ただ様々なものやサービスを消費しているだけにもかかわらず、遠いフィリピンの人々の「隣人」になり得たのかもしれない。そして、その隣人を本当に助けること、役に立つこととは一体どんなことなのでしょう？

## 2003年度のフィリピンワークキャンプについて

フィリピンにおいて、国際NGOであるハピタット・フォー・ヒューマニティと協力しながらワークキャンプを実施するのは、今年で2年目である。初年度の前回と今回とを比較して、今年度ワークキャンプの特徴点を以下に記す。

第1に、サービス・ラーニング（学生たちの報告では、リサーチ・プロジェクトとよばれている）のプログラムを取り入れたことである。これは、今回のワークキャンプ最大の特徴である。フィリピンで1週間程度の建設作業に携わるということは、建設作業というサービスの提供者となって、そこからさまざまなものを学びとることができるので、それ自身サービス・ラーニングのプログラムである。建設現場では、単にボランティアと建築の職人たちだけが、働くわけではなく、家が建てられた際にその家に住むことになる人々（ホームパートナーとよばれている）と一緒に建設作業を行うので、サービスの提供者であるボランティアは、サービスの受け手である人々と、常にインターアクションを図りながら、学習することができるようになってきている。しかしながら、建築学や土木工学を学んでいるわけではない明治学院大学の学生たちにとって、「建築」それ自体は、日常からかけ離れた作業であり、自分たちの大学での専門分野との接点はほとんどなく、大学での「学習」の延長線として理解しているわけではない。多くの学生にとっては、「フィリピンで特殊な経験をした」と感じるようになる。しかしながら、貧富の格差が激しい社会において、貧困層の人々に対して、質素だが安住できる住まいを建設し、提供することは、物理的に「家を建設する」以上の意味があることを、学生一人一人に実感させる必要があり、そのためには、もう少し現地社会に対する深い関わりと学生にとっての「身近さ」をもたせるプログラム上の配慮が必須であることが、前回の経験で痛感させられた。そのために、建設作業という「ワーク＝サービス」以外に、貧困を解消したり、コミュニティを開発援助したりする活動にボランティアとして参加して（＝サービス）、そこから学びとることができる（＝ラーニング）プログラム開発する必要性を感じた。

そこで、前回のワークキャンプから戻ってきた翌月の10月に、ハピタット・インターナショナルのスタッフが来日した時をとらえ、新しいワークキャンプの形態についての協議を始めた。その際、ハピタットの本部があるアメリカでは、ミシガン州などでサービス・ラーニングの要素を取り入れたパイロット・プログラムなどがあることがわかった。

私自身は、それ以前から、アメリカのキリスト教諸教会によるアジア地域への教育宣教団体であるユナイテッドボード（United Board for Christian Higher Education in Asia）と国際基督教大学が共催したサービス・ラーニングに関する国際会議（Service Learning in Asia: “Creating Networks and Curriculum in Higher Education” 2002年6月30日～7月3日、於 国際基督教大学）に参加し、アジアキリスト教主義大学同盟（ACUCA: Association of Christian Universities and Colleges in Asia）の主催の国際会議（テーマ:「期待される大学像の変

化に対応して - アジアの視点から -」 Institutional Responses to Changing Student Expectations: The Asian Perspectives) 2002年8月1日 - 3日, 於 韓国, 全州大学) においてサービス・ラーニングについて報告する機会に恵まれたため, いくつかの成功事例を研究することができた。

爾来, 半年以上ハビタットと協議を進める中で, 建設作業と関連するコミュニティ開発活動を行っているNGOをハビタットを通じていくつかあたってみることにした。それは, ゴミのリサイクル事業を推進しているNGO, 小規模事業に対して財政的な支援をするマイクロファイナンスを推進しているNGO, そして「ジャパゆきさん」の被害にあわないためにフィリピンで活動を行っているNGO, それぞれの活動に参加する計画を進めた。当初, 参加学生20名を, それぞれの関心領域に合わせて3つに分け, 比較的小さなグループにした上で, 各NGOの活動に参加し, NGOの職員や現地の人々にインタビューや調査を行って, 個人単位で行う行動を増やす予定であった。NGOの職員から, その活動実態についてレクチャーを受けるのではなく, 共に活動に参加することによって, 深く理解してもらうためである。現地でレクチャーを受けるだけだったら, わざわざ日本の教室から出てきた意味がないからである。また, 少人数とはいえ20人規模では, 個人は集団に埋没してしまい, 個々人の関心は発揮できづらく, 言葉においても私など「よく話せる人」に依存してしまう傾向にあるためである。しかしながら, 現地に着いてから, 後者の2団体は, 先方の都合で急遽, 受け入れてもらえなくなってしまった。

最終的に, ゴミのリサイクル・プロジェクトに参加する作業を行い, その小さな工場があるコミュニティでホームステイをすることとなった。リサイクル・プロジェクトは, ZKKというハビタットとは別のNGOが推進している事業であるが, 工場はハビタットが建設した家が大多数を占めるコミュニティの中に位置していた。アサンバとよばれるこのコミュニティは, 5年前までは極貧のスラムで, スクウォッターのバラックが雑然と立ち並んでいた一帯であった。ケソン市と開発業者の不当な介入により, 住民たちが立ち上がり, ハビタットなどのNGOと協力しながら自分たちの手でコミュニティを整備してきた地域である。

結果的に, 今回のワークキャンプは, 「ゴミ」もテーマの一つとなった。というのは, サービス・ラーニングが「ゴミ」を扱うもののみならず, 建設作業も「ゴミ」と密接に関わっていたからである。すなわち, 建設現場は, マニラ大都市圏の主要なゴミの最終処分場であるパヤタスのゴミ埋め立て地と, 最近新しく造成されたモンタルバンのゴミ埋め立て地の中間地点にあり, 近くにはゴミの中継所もあり, 「ゴミ関係」で生活している人々が多く住む一帯であったからである。それぞれの埋め立て地には, 建設作業の前後に見学を訪れることができたし, 事前研修会ではパヤタスのゴミ埋め立て地に住む人々のドキュメンタリー映画(四ノ宮浩監督『神の子たち』『忘れられた子供たち~スカベンジャー~』)を観ていて, 関心を深めていた。

また, ワークキャンプの全期間が, サービス・ラーニングのプログラムであるという位置づけであるため, 個々人の「学習」を深める工夫も試み

た。毎日の作業の後，夕方以降は疲労がたまっているが，毎日，その日に考えたことや感じたことを文字に残し，同時に仲間たちもそれを読むことができる日誌・ジャーナルを充実させた（この報告書の巻末に添付しているので，それを参照）。また，記録班が現地新聞を発行したり，ビデオでインタビューを収録したりして，記録を拡充した。そして，チームミーティングと称する会合を，2 - 3日毎に開催した。チームミーティングは，情報の伝達が目的ではなく，個々人が「経験」を通じて，考えたことを言語化して，他のメンバーと共有してもらい，それぞれの「考え」をさらに発展する機会を提供することが目的であった。キャンプ最終日の前日には，全員を3つグループに分け，かつ現地スタッフにも加わってもらって，3時間掛けて，英語の討議により相互に経験を共有してもらった。特に，「ワークキャンプから学んだこと」「フィリピンに来る前と滞在してからとで変化したこと」「日本に帰ってこの経験をどのように生かすか」について，それぞれ時間を掛けて考えてもらい，議論してもらった。個々人の経験は，単に「固有の体験」に留まらずに，言語化して共有し，思考へとつなげる努力をした。

以上のより，キャンプに参加した学生たちは，貧困の問題，ゴミの問題，住宅の問題，コミュニティの問題がどのように密接に関わっているかを，経験を通じて理解できたと考えている。ハビタットでは，建設作業を行うワークキャンプのことを Global Village とよんでいる。今回の私たちのプログラムは，Global Village Plus とよび，そのパイロット・プログラムとして，今後，他の団体・地域に紹介されることになる。

ワークキャンプの第2の特徴は，住宅建設の初期の作業に関わったことである。建設現場には，できあがった家はまだ一軒もなく，建設作業といえば，溝を掘ること，ブロックを作ること，鉄筋となる鉄の棒を曲げてつなぎ合わせることであり，床を張ったり，壁をつくったり，屋根をかけたたり，ましてや内装を施したりする作業は一切なかった。通常，ハビタットのワークキャンプでは，家を完成させて，住人となる人々に鍵を渡し，家を清める献堂式（House Dedication）を行うのであるが，それには当然至らなかった。前年のワークキャンプでは，ワーク最終日に3軒の家の式をしたのとは，好対照である。しかし，前回は，最終日に家を完成させるために，ボランティアの人数と滞在日数を計算して，逆算し，我々の到着時には建設の半分の作業はもう既に終わっており，屋根までついていた状態であった。

家がまだ建っていない状態であっても，将来できる家に住む予定の人々は，もう既にハビタットの手によって選定されていて，建設作業に携わっている。「通い」で毎朝集まってくるホームパートナーたちは，財産による区分けのない「平等」な人々である。貧しいながらも貧富の格差のない状態を，学生たちは肌で感じたはずである。一方，ホームステイをしたコミュニティは，家々が建設されてから5年の月日しか経っていないが，家によってはエアコンまである相対的に豊かな家もあり，その家には鉄格子がはられ，頑丈に施錠がされている。コミュニティが，豊かになっていくにしたがって，同時に貧富の格差も生じるようになるという，「豊かさのアイロニー（逆説）」も観察せざるを得なかった。

第3の特徴は、事前研修会の運営である。2回の合宿を含む、全11回の事前研修会の企画と運営の多くを、学生団体に宗教部からの委託業務として担ってもらった。昨年のワークキャンプの参加学生が中心となって、ハビタットの支部の機能をもつキャンパスチャプターが設立され、今年ハビタット・インターナショナルから正式に団体が認定された明治学院大学ハビタット・キャンパスチャプター（ハビタットM G U）が、実質的に事前研修会を運営した。あらかじめ宗教部が、ハビタットM G Uにどのような研修をしてもらいたいかの指示をし、実施内容を記した業務契約書を取り交わした。宗教部は、学生団体を財政的に援助し、学生団体は、宗教部の活動を支援した形となった。また、ハビタットM G Uのメンバーで、今回のワークキャンプの参加者に、学生リーダーとなってもらい、キャンプ中の学生ケアの一翼を担ってもらった。

この点は、今後ワークキャンプを大学の単位科目として提供し、ある程度の高い水準の講座として維持し続けるために重要なことであると考えた。プログラムの責任者である宗教部長は、2年の任期で交替するし、宗教部職員も人事異動がある。カリキュラムの立案・執行の責任は、もとより宗教部にあるが、キャンプ自身を安全に効果的に行うためには、事前の研修会の運営について、安定したノウハウをもったサポートグループを育成することも同時に必要だと考えたからである。フィリピンワークキャンプにおいては、ワークキャンプの実施に関して、ハビタットとパートナーシップを図り、事前研修会に関して学内のN G O / N P OであるハビタットM G Uとパートナーシップを図りながら、より充実したプログラムとなるような道筋はついたと考える。

以上のように、フィリピンワークキャンプは、あらかじめ企図したプログラムにより、参加学生たちが「学習」することを狙ってはいるが、もとより学生たちはいろいろな形で学ぶものでもある。

滞在中の日曜日、作業のない日であるため、午後は市内観光を行い、夕食は繁華街にあるシアター・レストランでとるように、ハビタットスタッフが手配してくださった。そこは、食事を取りながら民俗舞踊も鑑賞できる場所で、観光客も多く利用するレストランであった。日本人の好きなシーフードを中心に提供するレストランのためもあって、はたしてレストランは私たちも含めて、日本人観光客で埋めつくされていた。しかし私たち以外の客は、日本人の、それも若くはない男性客と、フィリピン人の若い女性のカップルの団体であった。私たちの周りは、どうやら現地でのにわか仕立てのカップル集団であることは、一目で明らかであった。

私たちは、毎日、社会の最貧困層に生きる人々と一緒に祈りのうちに建設作業をし、夢と希望とを共有しようと、時間を共にしていた。その合間の休日に、外では子供たちが物乞いをするレストランの内側では、豊かな食事を楽しみながらしている社会の明暗。そして私たち自身がその渦中にある不自然さ。そして、テーブルを共にしている客の間にも、立場の格差があり、不合理にみえることが行われている。感受性の高い学生たちは、こんな「予期しないできごと」からも、社会の多くの矛盾と現実を学んだようである。

## 2003年フィリピンワークキャンプ参加者名簿

学籍番号	氏名	学年	学科	係	ニックネーム	Birthday
03LA1023	河端 奈歩	1年	芸術	報告書・記録・しおり	かわちゃん	8月4日
03SW1189	丸谷 由理	1年	福祉	報告書・記録・しおり	まる・るーまー	11月5日
02KS1044	遠藤 真由美	2年	国際	勉強会	まゆみ	7月3日
02KS1141	篠崎 知子	2年	国際	報告書・記録・しおり	ともちん	7月17日
02LE1145	鈴木 まりえ	2年	英文	学生リーダー	まりりん	11月17日
02SG1201	吉村 悠	2年	社会	勉強会	ゆう・Y村	3月17日
01KS1072	大西 由佳理	3年	国際	文化交流	ゆかり	3月15日
01SW1082	河村 愛	3年	福祉	文化交流	めぐ	8月5日
01EB1105	岸 英明	3年	経営	文化交流	HIDE・デーヒー	4月5日
01SW1117	佐久間 知香	3年	福祉	勉強会	くま	10月6日
01SW1123	佐藤 なつこ	3年	福祉	保健	なっちゃん	8月28日
01EB1163	白川 和亨	3年	経営	文化交流	かず・ずーかー	6月19日
01EB1177	鈴木 奈々江	3年	経営	報告書・記録・しおり	なな	5月23日
01JP1090	滝川 祐	3年	政治	学生リーダー	たつきー	10月21日
01EB1204	伊達 佳奈	3年	経営	報告書・記録・しおり	かな・ダテカナ	4月27日
00LE2019	柏木 美穂	4年	英文	保健	かっしー	6月21日
00JU1110	唐澤 俊雄	4年	法律	文化交流	からちん	6月9日
00SG1117	多井 裕子	4年	社会	文化交流	ひろ	6月11日
99L-133	鳶津 絵名	5年	英文	保健	えな	8月14日
宗教部長	鍛冶 智也			チームリーダー	トム	8月19日
学院牧師	金井 創				金井くん・ぼくしー	9月4日

### \* 係の役割

**学生リーダー**：チームメンバーのまとめ役・ケア担当

**保健**：参加者の体調チェック、小さな傷・怪我の手当て、救急箱の管理

**報告書・記録・しおり**：ワークキャンプ中のビデオ・カメラ撮影、しおり・報告書作成

**文化交流**：現地でのパーティー（フェアウェルパーティーなど）で披露するパフォーマンスの内容決定・準備・練習の進行役

**勉強会**：研修会またはワークキャンプでの勉強会作り



# ★メンバー紹介★

ここでは愉快的(?)ワークキャンプメンバーを紹介したいと思います！！



ひろはとってももしっかりしていて、頼りになるお姉さん！笑顔がすごく素敵 現地の人に負けないうらさらに黒くなりました(笑)。



フィリピンいる間ずっと顔がはれていた Y 村。見かけは結構頑丈そうなのに実は繊細だったらしい...(笑)。タガログ語が一番上達したのはこの人です。

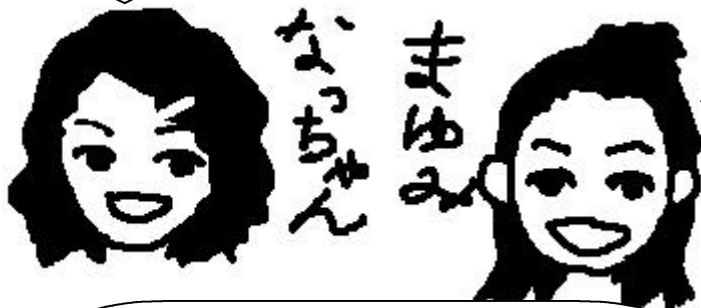


カメラ大好きなめぐ。金井先生のカメラを借りてうちらを撮ってくれました。カメラを忘れたときのめぐの落ち込みようときたら...(笑)。



なっちゃんは HIDE や鍛冶先生のくだらない(?)冗談にも敏感に反応して笑ってくれるとっても素直な子(笑)。いつも皆の体調を気にしてお母さんみたいでした。

ともちは今フィリピンで大流行のスパゲッティダンスに一番はまってしまった人かもしれません。最後の方のともちんの腰の振り方はプロでした。



現地の子供に大人気だったまゆみ。どれくらい人気かという子供達がいつも「まゆみ～、まゆみ～」って言うくらい！子供のスター・まゆみでした

かわちゃんの三大特徴。独り言・寝言・寝相。チームメンバーならその恐ろしさがわかるはず...(笑)。チーム内で一番いいキャラしてたのはかわちゃんかも!?



まりりん



まりりんはなんでもすぐ笑う学生リーダー。でも夜、みんなで語りモードになると逃げて寝てしまう…。まりりんの笑い声がおもしろくてつられて笑ってしまう人続出！！

HIDE



チーム最年少のまる。フィリピンでは正露丸を飲みまくって「ミス正露丸」と命名（涙）。毎日毎日ハイテンションで腹をこわしながらも元気でした。

かず



チーム内のムードメーカー、**HIDE**。現地の人と交流している時のオーラーはピカイチ。ムードメーカーなのにみんなから放置されがち…（笑）。



かず

フィリピンの人達にモテモテだったかず。しかも自称アイドル（笑）。現地の人にかずのどこが好きかと尋ねると、「cute」だからだってさ。

だてかな



だてかなの許せないことは「食べる時においでかいで食べる人」。これ、すごい皆、気にしてたよね（笑）。だてかなの影響力はほんとすごいかも！？

なな



かっしー



ななはよくアリに嘸まれてた（笑）。しかもななだけ！オレンジ色のアリに好かれていたんだよ～、きっと。オレンジアリに要注意！！

かっしー実はフィリピン人だった！？現地の人にすら「phillipino」って言われていたし（笑）。フィリピンの有名な女優に似ているらしい…。



からちん

からちんは天然おもしろキャラ。1日1回は皆、からちんの行動に大爆笑。ワークの一番の功労者でもあります！！



たつきーはこのキャンプで一番キャラが変化した人かもしれません！！毎日毎日皆にいじられて素敵なたつきーに生まれ変わりました おめでとう！！

くまはほんとに熊だった。くまは独特の雰囲気があります！くまのストレッチ教室はチームの女子陣に大人気。皆で体をくねくねさせてる光景は奇妙....



大人の雰囲気を醸しだしているえな。がしかし、フィリピンの朝テラスで「フィリピンおはよう！！」叫び始めたのは実はえなでした（笑）



トムはワークの間、ブロック作りはかなり熱中。その熱中ぶりといったらなんの...。雨にも気付かないほど。サングラスをかけているトムは、まるで「紅の豚」のようでした（笑）



皆に最後のほうは「牧師」と呼ばれていた金井くん（笑）。皆とよく語り合っていました。チームのある意味癒し系かもしれない！！？



ゆかりはなんでもしっかりやりこなすしっかり者。しかも、関西弁（？）がめっちゃかっこよい！！将来絶対キャリアウーマンになるよ、この人！

これで今回一緒にフィリピンに行った仲間達の紹介は終わりです。ここには書ききれなかったけど、本当に皆すごい人・キャラでした。ここで出会った仲間は一生ものです！！！！

# フィリピン・ワークキャンプまでの主な活動内容

## 7月 研修会 (7/2)

昨年度ワークキャンプ参加者体験談

## 研修会 (7/12)

ハビタットについて・予防注射や持ち物について(手作り餃子パーティー)

## 研修会 (7/24)

佐野真理さん(Habitat For Humanityの事務の方)のお話~Habitatについて~  
(ワークキャンプの概要、ハビタットの活動内容など)

係り決め・Tシャツコンペ

## 研修会 (7/28)

ビデオ「忘れられた子どもたち」上映

## 8月 研修会 (8/4)

ビデオ「忘れられた子どもたち」について意見交換・文化交流出し物の検討

## 研修会 (8/7)

「ボランティアにできること」をテーマに話し合い

## 研修会 (8/11) 於：戸塚女性フォーラム スタジオ

文化交流(ふるさと・クンバイヤに決定)・横断幕のデザイン構想

## 事前合宿 (8/19~21) 於：黎明館

係内でのリーダー決め・ソーラン節・歌の練習(文化交流)・横断幕の作成

神田外語大学の学生(今年度GV参加者)とのディスカッション・「スラム」について話し合い

## 研修会 (8/26)

ソーラン節の練習

## 事前合宿 (8/30~31) 於：黎明館

「チーム」をテーマにしたワークショップ・ビデオ「神の子たち」上映

勉強会係から「マイクロファイナンス」「フィリピンについて」

ソーラン節、歌の練習・横断幕、はちまきの作成

## 研修会 (9/4)

勉強会係から「フィリピンの社会保障について」

保険係から「健康管理 ×ゲーム」

ソーラン節の練習

## 2003年フィリピンワークキャンプ活動概要

### 訪問地

フィリピン共和国 マニラ市

### 期間

2003年9月8日(月)~9月21日(日)の2週間

### 現地での活動日程

- 9月 8日 09:30 成田空港発 (PR 431便)  
12:45 マニラ着  
フィリピン大学ホテル泊
- 9日 市役所 ゴミの埋め立て地(Montalban Landfill)見学  
フィリピン大学見学
- 10日 終日 建築現場で作業
- 11日 終日 建築現場で作業
- 12日 終日 建築現場で作業
- 13日 終日 建築現場で作業
- 14日 休日 市内観光
- 15日 午前中 建築現場で作業 午後 Farewell Party
- 16日 カリラヤ(Caliraya)に宿泊
- 17日 アサンバ(ASAMBA)でホームステイ
- 18日 ホームステイ2日目  
市役所訪問 パヤタスのゴミの埋め立て地見学。  
リサーチプロジェクト(Eco-waste Management)
- 19日 リサーチプロジェクト(Eco-waste Management)  
Community Night  
シャロームホテル泊
- 20日 シャロームホテル泊
- 21日 14:45 マニラ空港発 (PR 432便)  
19:55 成田空港着 解散

# 現地でのタイムスケジュール

## 9月8日(日)～出発の日～

- 07:30 成田空港第二ターミナル集合 **まゆみ**少し遅刻！  
09:30 成田空港発 (PR431便)  
12:45 ここからフィリピン時間  
マニラ空港到着 バスでホテル(フィリピン大学ホテル)へ移動  
昼食 in バス サンドウィッチと缶ジュース(ペプシやセブンアップが多い)  
14:30 ホテル到着 部屋割り  
16:30 ハビタットの職員からガイダンスを受ける  
18:30 レストラン MANG JIMMY 'S で夕食(徒歩20分)  
肉料理が多い!!量も多い!飲み物はコーラか水  
食事が終わって、ホテルに帰った後は先生の部屋でミーティング  
その後は自由解散(部屋に帰って休む人もいれば、共有スペースで語らう人も...)

## 9月9日(月)～市長表敬や見学をする日～

- 06:00 起床  
06:30 朝食 ご飯・肉とトマトの煮込み・目玉焼き・コーヒー・パパイア・ランブータン  
07:20 現地の市役所へ 市長さんが忙しく、また後で訪問することになった  
モンタルバンのゴミの埋め立て地でのリサイクル事業担当者のお話を聞く  
09:00 埋め立て地見学  
11:00 再び市役所へ  
市長さんと面会 市長さんの話・チームの説明・プレゼント贈呈  
12:00 昼食 ハンバーグ・ポテト・コーラ  
近くの河で皆遊ぶ。**なっちゃん**洗濯をしている地元の人と仲良くなる  
13:00 つり橋、ダム見学  
15:00 ホテルへ  
15:45 フィリピン大学見学  
学生3人が校内を案内、広場でフィリピンのフルーツやお菓子を食べる  
17:30 自由時間 ショッピングしたり、バスケットしたり、インターネットしたり...  
19:00 夕食 ご飯・春巻・魚スープ・ステーキ・マンゴー・コーラ・水  
20:30 チームミーティング  
その後自由時間&就寝

### 9月10日(水)～ワーク初日～

- 06:00 起床
- 06:30 ホテルで朝食 ごはん・甘辛い肉・ねぎの酢漬
- 07:10 サイトへ出発
- 08:00 サイトに到着 開会式  
作業の説明と一緒に作業をしていく現地の人(ホームパートナー)の紹介
- 09:00 ワーク開始
- 10:00 ブレイクタイム
- 12:00 昼食 肉・ごはん・マンゴー
- 13:00 ワーク再開
- 15:00 ブレイクタイム フィリピン風焼きそば・蒸しケーキ
- 16:00 ワーク終了
- 17:30 ホテルに到着 ショッピングモールに行ったり、バスケットをしたり
- 19:00 夕食 ごはん・肉 ホテルでの食事はわりと質素
- 21:00 ファッションショーの打ち合わせ ホテルの一室がコスプレ会場と化す  
女の子の何人かはエクササイズを楽しんでいた(講師くま)

### 9月11日(木)～ワーク2日目～

- 06:00 起床
- 06:30 ホテルで朝食 ご飯・卵・肉・コーヒー
- 07:15 出発
- 08:30 ワーク開始 昨日と同じく家の基礎工事、砂運び、ブロック作り  
からちん、六甲おろしを歌いながらトイレ部分の穴掘りに没頭
- 10:30 ブレイクタイム ジュース
- 11:00 再びワーク
- 12:00 昼食
- 13:00 ワーク再開
- 15:00 ブレイクタイム 揚げバナナ・ジュース
- 15:30 ワーク再開
- 16:30 ワーク終了
- 20:00 夕食 ご飯・肉料理・魚・イカ・パイパイ

この後自由解散。そろそろ疲れが見え始めたか、皆早めに就寝。

### 9月12日(金)～ワーク3日目・カズが復帰！！～

- 06:00 起床
- 06:40 朝食 パン・スクランブルエッグ・マーガリン・フルーツサラダ・牛乳

- 07:20 出発 朝食が出るのが遅いのでやや時間押し気味...
- 08:20 サイト到着
- 08:30 作業開始  
**まりりんとまる**、ノリーと一緒に昼食のお買い物に連れていってもら
- 10:00 ブレイクタイム 春雨のスープ **HIDE** お気に入り
- 12:00 昼食 魚・ご飯・グリーンマンゴー・豆スープ・きゅうり・トマト・卵  
 昼食後サイトの子供達と野球をして遊ぶ ビデオが大人気！！
- 15:00 スクールで一時作業中断。そのままブレイクタイム(蒸しパン等)へ
- 16:30 ワーク終了 サイトに行く途中にあるマーケットを見学するため
- 17:00 マーケット見学 3階建てで結構広いし、人が多い！！  
 皆でアイスクリームを食べる
- 19:00 夕食 カレー・ご飯・スープ・チキン・ランプータン
- 20:30 チームミーティング ワークの感想や物乞いについて皆で話し合った  
 その後、15日のFAREWELL PARTYで踊るソーラン節の練習。ホテルの正面でやって  
 いたので他のお客さんやベルボーイ達に丸見え！！

### 9月13日(土)～ワーク4日目～

- 06:20 ホテルのロビーに集合
- 06:30 朝食(この日からMANG JIMMY'Sで) そこから出発
- 08:30 サイト到着  
 作業開始 **からちんとゆう**、サンダルで来たのが先生に見えられ土木作業  
 をクビに...しかし！**からちん**の男涙に心を動かされた**カズ**が**か  
 らちん**に靴を貸す。**からちん**復帰！！！！
- 10:30 ブレイクタイム 茶色い角切りのものが入った甘い謎の飲み物とジャガイ  
 モ・人参・レーズンなどが皮で包んであるパイ
- 11:00 作業開始
- 12:00 昼食 焼き魚・ご飯等
- 13:00 作業開始 途中雨が降ってきたので作業を一時中断する。唯一、ブロック  
 作りだけが着々と進んでいく。**鍛冶先生**、職人の道を究めたかも！？
- 14:30 ブレイクタイム 八口八口 雨で作業が出来ないので、以後作業中止  
 雨がすごかったため、ジブニーが土にはまってしまい、男総出でジブニーを押し出す！！  
 女性陣その傍らで応援 見事脱出！！
- 16:30 ホテル到着
- 17:30 ショッピングセンターへ ケソン市街地で夜遊び！
- 18:30 一人150ペソ渡され班ごとに夕食 その後自由時間
- 21:00 集合。ホテルに帰る。



### 9月14日(日)～マニラ観光日～

- 07:45 ロビー集合 カズは諸事情によりお留守番  
08:15 朝食 ご飯・飲み物・肉・フルーツ  
09:10 ミサ出席(大学内にある教会で) マニラ市に移動  
10:00 マニラのショッピングセンターで自由に買い物 移動  
12:00 ショッピングセンターの店で昼食 フィリピン料理のビュッフェスタイル  
13:30 旧市街地見学(サン・オーガスチン教会、ホセ・リサール記念館)  
16:30 ショッピング  
18:00 夕食をとるレストランに到着  
時間があるのでマッサージ組とバスで休む組にわかれる  
20:00 夕食 シーフード・ごはん・麺・肉・スープ・マンゴーアイス・水  
ショーでまゆみ・なな・HIDE・からちん...そして鍛冶先生大活躍!!  
23:00 ホテル到着 大雨のため道路が冠水し遠回りして帰る...大幅に遅れる  
この日は皆すぐに就寝

### 9月15日(月)～ワーク最終日～

- 06:30 起床  
07:30 朝食 フィリピンのファーストフード店「Jollybee」のにんにくご飯・ソーセージ・目玉焼き  
09:00 出発 くまは体調不良のため入院  
10:00 ワーク開始 ほとんどのメンバーが失業状態...交流を満喫  
12:00 昼食 うどん・チキン・サラダ・クッキー  
15:00 Farewell Party  
18:30 終了 ホームパートナーたちとお別れ...  
19:30 ホテル到着 くまのお見舞いに行くメンバーもいれば、買い物に行くメンバーも...そして阪神優勝を祝ってビールを飲んでるメンバーも!!(からちん皆にビールをおごる! )  
21:30 チームミーティング  
その後からちんがおごってくれたフィリピンのビール、サンミゲルを飲む!!

### 9月16日(火)～リゾート地(カリラヤ)で休養日・くま復帰!!～

- 07:00 起床  
07:30 各自部屋で朝食 ホットケーキ・ソーセージ・ジュース  
09:30 くまと鍛冶先生を残してカリラヤ(リゾート地)へ出発  
14:00 到着 チェックイン後、ビックボールやバスケ、プール、卓球、ビリヤードなどで遊ぶ。一番はしゃいでいたのはチートとジェイアール。

ワークの疲れか、ダウンする人が続出

18:00 夕食 ビュッフェ形式。パン・ご飯・肉・魚・フルーツ・ケーキ  
夕食後、皆でビデオ鑑賞(こまのビデオ)。その後、卓球・ビリヤードなどで遊ぶ。  
ここでくまと鍛冶先生到着!!早期回復よくがんばった~  
深夜、金井先生 愛について語る。(その夜はみんな愛について語ってた!?)

### 9月17日~ホームステイ初日~

06:40 礼拝 金井先生が教えてくれた「友達になるために~」を皆で合唱  
07:00 朝食 ビュッフェ形式  
この後、自由時間。昨日夜遅くまで起きていたメンバーはひたすら寝る。荷物の整理もし始める。  
12:00 昼食 ビュッフェ形式  
ジェイアール達から「カヌーに行こう!」と提案される。  
カヌー組と卓球・ビリヤード組とプール組と休む組にわかれる。  
15:00 カリラヤ出発  
18:30 夕食 移動途中にあった店で、フィリピン料理を食べる  
その店のテレビには今アジアで大人気のグループF4の特集がやっていた  
21:30 アサンバのハビ村に到着 夜遅いのに村の人が大勢待っていてくれる  
22:00 ミーティングの後、それぞれのホームステイ先へ

### 9月18日(木)~ホームステイ最終日~

08:30 オフィスに集合 朝食 パン・ソーセージ・コーヒー  
10:05 出発 ケソン市役所へ  
11:30 市役所でしばらく待たされた後、市長と会う  
からちん暴走!!市長と肩を組む!!  
鍛冶先生、市長から「市の鍵」をもらう その時の写真が全国紙に載る  
11:50 出発。当初行けないことになっていたパヤタスのゴミ埋め立て地に、鍛冶先生が市長に直々に交渉して行けることになったので、急遽出発。  
12:30 パヤタスのゴミ埋め立て地見学  
13:30 ハビ村に到着 昼食  
14:00 昼食終了 自由時間  
15:00 オフィスに集合 リサーチプロジェクト作業開始  
17:00 ブレイクタイム スパゲティーとトースト 自由時間(ガキ大将のように  
囲まれている人もいれば、バスケする人あり...皆それぞれ村の人と楽しく  
交流してました~!!)  
20:00 夕食 自由時間 フィリピン流のカクテルを飲んだり、スパゲティーダン

スの練習をしたり、23:00頃に解散

### 9月19日(金)~COMMUNITY NIGHTの日~

- 07:00 朝食 パン・目玉焼き・ハム・ごはん・水  
09:00 朝の礼拝 金井先生「愛」について話す  
09:30 Eco waste management 開発者からの説明  
12:00 昼食 イカ焼き・うどん・ランプータン・ご飯・水  
私たちが前日にリクエストした料理がでてきた！！  
13:00 休憩 子供達と遊んだり、家に戻って休んだり...  
14:00 リサーチプロジェクト開始 昨日と同じ作業を皆で交代して行う  
16:00 ブレイクタイム ドーナッツ・マンゴージュース  
休憩(皆の顔がぐったりしていたので、鍛冶先生が気を使ってくれた)  
18:00 夕食 カズ時間を間違え遅刻  
19:30 community night 鍛冶先生カラオケをする！  
23:00 アサンバ出発  
23:30 シャロンホテル到着  
この後即就寝...ほとんどの人が寝る中、何人かは3時ころまで語り合う

### 9月20日(土)~最後のまとめの日 in English~

- 06:00 起床  
07:00 朝食 ホテル近くの中華料理店でそれぞれ、おかゆや麺を食べた  
マンゴージュースが大人気！！  
09:00 今回のワークキャンプについて評価・話し合い・発表  
4班にわかれて、発言は英語のみ！！日本語話してしまったら...罰金  
12:30 自由行動！...思い思いに最後のフィリピンを過ごす  
21:00 ホテルのテラスでお疲れ様パーティー開催！！飲んで語って...朝まで続く

### 9月21日(日)~キャンプ最終日~

- 08:30 起床  
09:00 昨日と同様のお店で朝食 おかゆ・ラーメン・点心 etc  
11:00 空港に出発 15分程でマニラ空港に到着。  
ジュード・チート・ジェイアール・マベールとお別れ  
14:45 マニラ発 フィリピン航空 PR432便  
皆すごい勢いで爆睡する...  
17:55 成田着 解散~ お疲れ様！！

# Farewell Party



9月15日 午後3時～

Farewell Party は、作業場で行なわれました。このために中の敷居を壊しました。バナイの子供たちには、フィリピンで大人気だった、“スパゲッティー・ダンス”を披露してもらい、大変盛り上がりました。バナイの人たちと一緒に「Bridges of Love」を手をつなぎ円になって歌ったときは、一体感を覚え、感激しました。そして最後にメンバー一人一人に感謝状が渡されました。パーティーが終わり、私たちはホテルに戻って、思い思いに時を過ごしました

## プログラム

- ・ 開会祈祷 歓迎のメッセージ
- ・ ハビタットのスタッフの挨拶
- ・ チームリーダー鍛冶先生のスピーチ
- ・ 明治学院大学チームのショウ1  
「ふるさと」寸劇 ファッションショー
- ・ バナイのプレジデントのあいさつ
- ・ バナイの子供たちによるダンス
- ・ 明治学院大学チームのショウ2  
ソーラン節 「クンバイヤ」
- ・ ハビタット・フィリピンの歌  
「Bridges of Love」を合唱
- ・ 感謝状 授与

## Community Night 9月19日7時30分

### プログラム

- 1 開会の祈祷
- 2 フィリピン国歌斉唱 ふるさと斉唱
- 3 チームリーダー鍛冶先生のメッセージ&歌
- 4 スパゲッティー・ダンス
- 5 ファッションショー ソーラン節 クンバイヤ
- 6 閉会の祈祷

# ワークキャンプ報告

## 1. リサーチ・プロジェクトの報告

### 2. ホームステイ(驚いたことは? 楽しかったことは? 家族の様子は?)

### 3. ワークキャンプ全体の報告

( スモーキーマウンテン見学で思ったことは? ワークの感想は?

その他いろいろ感じたこと・思ったこと)

という順番になっています。全部を1つにまとめて書いてくれた人もいます。

## 遠藤 真由美

1. 私たちはリサーチプロジェクトとして、ホームステイで訪れたアサンバでごみのリサイクルについて学んできた。ごみを上手にリサイクルするためにはごみの分別が重要な要素となる訳だが、ここアサンバでのごみの分別も、可燃ごみ・不燃ごみなど日本と変わらなかった。日本と大きく違いました勉強したのは、なるべくごみを燃やさない事である。日本の場合、紙くず・一部のプラスチック製品・生ごみ等は燃やしてその灰を埋め立てている。しかしアサンバの場合、日本では燃やしてしまう可燃ごみの量を少しでも減らすために、バナナの皮やココヤシの皮の再利用(フィリピンならではのアイデアだが)、紙くずの細かい仕分けがなされていて、そこからアクセサリーや調味料が生まれていた。

ごみ焼却の際の問題点であるダイオキシンはある温度以上で燃やすと発生しない。そのために日本のある地域では可燃ごみにペットボトルなどのプラスチックも含むのだが、アサンバでの可燃ごみの細かい仕分けはダイオキシン等の問題にはどのような影響があるのか、ということまでは知ることができなかった。だが、使わないものはどんどん燃やし灰を埋め立てている日本の生活を見直すという点においても、アサンバでのごみの再利用の仕方には興味が湧いた。私はごみを減らす事が、ごみ問題において一番重要な事だと思っている。そのためアサンバでのごみの再利用は見習うべきであり、ダイオキシン等の問題は多少手間がかかってもコストが高くついても技術でカバーすべきである。

2. まりりんと私がお世話になったクリスティーナさん宅はクリスティーナさんと旦那さん、そして彼らの子供が一人と聞いていたのだが、実際家にいたのはクリスティーナさん一家に加え私と同年くらいの女の子二人とクリスティーナさんの弟らしき人が一人。夜の10時である。しかも帰る気配もない。女の子のうち一人(ハイセルさん?)は下宿しているらしいが、夜に他の家の人のがのんびりとくつろいでいて、オープンな家庭とはこういう事を言うんだなぁと思った。クリスティーナさん宅がお店である事もあって、昼間は様々な人が家を訪れてきていた。

彼女の家にきてまず驚いた事は、CD コンポ・パソコン・テレビ（小さくない）が完備だった事。アサンバは私たちがワークしたバナイと同じくハビタットが建てた家ばかりで、住んでいる人たちは決して裕福ではないと思っていたが、実際は違ったのだ。しかし、トイレ・風呂は前から聞いていた通り、シャワーなし・お湯なし・トイレは水を汲んで流すというもので、清潔ではないように感じた。（私たちがお風呂に入るためにお湯を沸かして用意して頂いた。ありがたい！）パソコンなどはあるのに風呂にはシャワーがないという事は、それがフィリピンの一般の家庭では当たり前の事なんだと、改めて文化の違いを感じた。日本は風呂場を清潔に快適に保つ文化だと聞いた事がある。

わたしの拙い英語能力とまりりんのお陰でできた会話により、フィリピンの一般的な家庭について知る事ができた。最も印象に残っているのが、日本の漫画・アニメがたくさんフィリピンに存在した事。るろうに剣心(SAMURAI X というらしい)やスラムダンクなどが、特に浸透しているようだった。それに関連して、フィリピンの人たちは日本に関心を持っている人が多く「コンニチハ」など簡単な日本語を話していたり、また「これは日本語で何て言うの？」と聞かれえる事も多かった。とても嬉しく思う。もう一つ印象に残っているのが、フィリピンの学生は飛び級をするケースが多い事。少なくとも私が出会ったフィリピンの学生の大半は飛び級をしている。日本には飛び級のシステムはないので比較はできないが、フィリピン人は興味を持ってそれを深める力に長けている、勉強する力があると思った。非常に見習いたいと感じた！

3 . 非常に月並みな感想だが、フィリピンに行って私は成長することができた。一番大きな収穫は、今まで漠然と考えていた将来の夢を確固たるものにできた事である。高校の頃から私は貧しい人たちや動物・環境問題などの国際問題に取り組みたいと思い明治学院の国際学部に入學したのだが、授業を受けている時も何だか集中できずただ聞いているだけだった。しかし国際問題に興味がある以上、ずっと行きたかったワークキャンプには参加しようとフィリピンに行ったのである。それまで私の中のフィリピンは他の東南アジア諸国と同じように貧しく、日本人はお金持ちとしか映っておらず、よい交友関係を築くのは難しいと思っていた。言い方は悪いが狼のように思えたのである。しかしフィリピンの人々の私たちに対する反応は予想とはるかにはずれた。目が合えば自然と微笑んでくれるし、私たち自身の事に非常に関心を示してくれた。名前もすぐに覚えてくれて、すれ違うたびに名前を呼んで挨拶をした。初めは、日本人が珍しいからなのかななどと考えていたが会話や‘笑顔’などで交流を深めるにつれ、フィリピンの人たちが本当に心から仲間として受け入れてくれていることを知り、狼のように考えていた自分をとても情けなく浅はかに思った。ここで私は、「この人たちが私の助けを必要とするならば、私は最大限力になりたい」思ったのである。それは私が今まで漠然と考えていた将来の夢の最終目的だった。日本での毎日の生活に慣れ、ずっと忘れていた大切な自分の気持ちを再確認以上に私の心に焼きつけてくれた。

しかしここで大きな問題があることに気づいた。私は英語が話せない。社会問題などについてもよく知らない。力になるためには力になるだけの能力が必要なのだ。成長したもうひとつの点は、自分の力不足を痛感することができた事だった。

今回のワークキャンプで楽しみ(?)にしていた事の一つにゴミ山を見学する企画があった。ゴミ山に行ってそこで生計を立てている人を見てみたいという、半ば好奇心のようなものだったのだが、ここでは今まで考えられなかった事を考えるようになった。ごみを拾って生きているなんて不衛生だし人の道理に反しているようで、完全にマイナスのイメージしかなかった。それは日本人でなくても誰でも思う事だと思うのだが、ゴミ山の話を書くうちにゴミを拾って売るというそのシステム自体には何も問題はないのではないだろうかと感じるようになった。彼らはゴミを拾っている。それを言い換えればリサイクルに貢献しているのである。確かに不衛生で危険だがそのような仕事は日本にだって沢山存在しているし、不衛生さが問題となるのならその対策を考えればいいのだ。ゴミを拾う事にマイナスのイメージを持ち、彼らにゴミ拾いをやめさせるのは私たちのゴミ拾いへのイメージの押し付けではないかと思う。この考え方が正しいのかどうかは分からないが、以前はここまで考えることすらできなかった。

フィリピンは沢山の顔を持つ。きっと私はまだその一部分しか見ていない。フィリピンは同じ市で数十キロしか離れていないのに生活様式がまるで異なるくらい大きな貧富の差があったが、それを「フィリピンだから」と済ませたくはないと思う。同じ地球にいて私とあまり離れていない所に済んでいるのに、その友達との間には貧富の差がある。貧富の差なんて本当は関係ないのかも知れないが、差はないほうがいいと思う。それも私の考えの押し付けだろうか。本当にいろいろな事を考えた2週間だった。

## 大西 由佳理

1. どのようなことを学んだか。Eco waste management は、平たく言うとリサイクルのようなものだが、日本のリサイクルと明らかに違うのは一人一人のゴミに対する関心と考えの高さである。Eco waste management を通して人々の心の中に、ゴミは新しい資源になる、という考え方がだんだん根付いてきているように感じた。

Eco-waste management について自分が思うこと。Eco-waste management の説明をしてくださった方、それから実際に品物を作る様子を実演してくださった方はすべて女性だった。しかも実演してくださったのは大体60歳くらいのおばあさん。『女性』『高齢者』日本では戦力にならない、と一般に考えられがちな組み合わせが、フィリピンでは先端のリサイクルマネージメントに参加して収入を得ている。そして両者とも自分の仕事を大変楽しそうにまた真剣にされていたことが印象的だった。日本はまだまだそういう面では進んでいないなあと感じた。リサイクル、仕事に対する考え方、両方ともフィリピンから学ぶべき点は多い。

2. 家族構成はミラお母さん、ジュリアン6歳、ジョナリン11歳の2人の娘さんの3人。お父さんはサウジアラビアに単身赴任している。ミラお母さんのお姉さんとお母さん家族はオーストラリアに住んでいる。ホームステイ先のミラお母さんに迎えられ、おうちにおじゃまするとまず、SONYの大型テレビとその下のコンポが目に入った。部屋には木製のどっしりとした椅子が4個綺麗に並べたれていて、「どうぞ座ってね〜。」とミラママが一言。これはさすがに驚いた！フィリピンの低所得者、といっても、生活にあくせくしている様子は感じられなかったからだ。実際に建設作業をさせていただいたBANAIでは、そんな金の臭いのするものはなかったように思う。「低所得」という一括りの中にはこんなにも差があるものか、ビックリした。

それから、近所のおばちゃん、子ども達など、入れ替わり立ち代りいろんな人が家に遊びにくるわ。しかも、ミラママは結構家を留守にすることが多かったので、家は子どもの無法地帯！「遊んで攻撃」の激しさに驚いた。みんな元気で笑顔がとてもかわいらしい子ども達だった。

子ども達と遊んだこと。みんな人懐っこくて、元気いっぱい、一緒に遊んでいて本当に楽しかった。

お母さんがうちにいらっやらないことが多かったので、家族がそろっている姿をみるのは稀だった。しかし、いろんな人が家にいたので、ご近所さんを含めてみな家族、という印象を受けた。血が繋がっているだけが家族じゃないんだ！と感じた。近所のおばちゃんも、にいちゃんも、子ども達も含めて村全体がでかい家族。

3. 今回見学したゴミの収集所は2つ。モンタルバンのゴミ埋め立て地、そしてケソン市の旧スモ-キーマウンテンである。モンタルバンでは市に認められてゴミの分別をしている労働者と違法にゴミを集めている人が入り混じっていた。フィリピン(ケソン市)ではリサイクル運動を進める一方で、不法にゴミを集める人達も大勢いる。相反することが同時進行で起こっているということに不思議さを感じた。

今まで日本にいた時は「どんな仕事でも、仕事をするということは厳しく、苦しい、大変」ということを何の疑いもなく信じきっていた。が、サイトでのワークは私のその考えを一変させた。建設作業をするわけだからきつい仕事ではあるのだが、サイトの人達は本当に楽しそうに仕事をする。(それは家を建設することに対して大きな希望に溢れているからだ、と私は勝手に思っている。)そんなサイトの人達の顔を実際に見ながら作業ができたことは、私にとっても大きな喜びだった。私自身はどーしようもなく非力で労働力としては本当に少ししか役に立たなかったが、モンタルバンに来て、村の人と一緒に作業に携われた、それだけでも本当によい経験ができたと思う。一緒に仕事ができ本当に楽しかった！！ありがとうございました。

このワークキャンプを通して私が最も強く感じたことは、自分に与えられているものの



大きさを。私は勉強できる環境がある、家がある、生きていくに必要なお金がある、友達がいる、自分の周りにあるすべてのものが大きな恵みであることを強く実感した。ワークキャンプの farewell party でサイトの人が「勉強して、世界のために働く人になってね。」とってくれた。自分には物質的な豊かさだけでなく、たくさんの希望も与えられていることに気付いて心の底から涙が出た。自分の人生を精一杯生きなきゃいけない！と感じた。

それから、「戦争」も私の中では大きなテーマのひとつだった。言うまでもなく日本はフィリピンを占領していた時代がある。現地の方と話をしてもこの話が出てくるのが度々あった。私が「日本の兵士が過去にフィリピンで卑劣なことをしたのは確かです。」というと、「私達は未来に目を向けている。日本は好きよ。」とってくれる。私は「salamat (Thank you)」といいながらも心の中では何か煮え切らないものがあった。本当に日本人としての私と、フィリピン人として彼・彼女達が真のパートナーになれるのかなあ、と。しかし、そんな私の心のもやを晴らしてくれたのが farewell party でのハビタット代表の方のスピーチだった。「過去に日本人はフィリピンに戦うためにやってきた、しかし今は愛を分かち合うためにやってきている。」この言葉を聞いて私は本当に救われた思いだった。そして、過去にあったことを認めた上で、今私達がお互いに友達になることができるんだ！という感動で胸がいっぱいになった。

最後に書いておかななくてはいけないことがもう一つ。フィリピンには日本人観光客がたくさんいる。その中には、フィリピンの女性と遊ぶために来ている人もいる。今回も観光地のレストランに行った時、そのような光景を目にした私は、不覚にも涙がぼろぼろ出てきてその場から逃げ出してしまった。(もちろんそれは1つの商売で、それで食べている人もいるのだから、いい、悪いの問題ではないが)それが、日本人、フィリピン人がお互いに友達になるための障害になると思うと、悲しくて、悔しくてしょうがなかった。

本当に濃い2週間で、いろいろな側面から物事を考える機会を得て、いろんな経験が来、感謝と感動と発見でいっぱいだ。ワークキャンプでお世話になったハビタットスタッフの皆様、同行して下さった先生、そして一緒に建設作業をしてくれたサイトの人々、温かく迎えてくれたアサンバの人々、フィリピン大学を案内してくれたマーベルちゃん、ベルちゃん、一緒にいっぱい笑ったメンバーのみんな、みんなほんまにありがとう！！

## 柏木 美穂

1.ECOについては、2つのことをした。まずは、仕事を体験した。私は2日間とも紙を白い紙、色つきの紙、新聞紙に分けるという仕事をした。ずっと座っているし、とても単調な作業で結構つらかった。これを仕事として毎日やるというのは大変だなと思った。もう一つは、リサイクルについて習った。飲み終わったジュースの袋をバックにししたり、紙を棒状にして編んだり。いろいろアイディアがあるんだなと思った。ゴミは、普通に暮らしていてもたくさん出てくるものだから、ゴミ問題は難しいと思った。

2. 思っていたより全然豊かな生活をしていたこと。

1階はリビングになっていて、ソファ、テレビ、ダイニングなどがあり、日本とあまり変わらなかった。2階には2つ部屋があり、その片方を私たちに貸してくれた。娘たちの部屋らしく、カーテンや枕がフリフリでかわいかった。大きなベッドとコンポ、さらに電話までついていて、とても快適な部屋だった。ただコンポの電源が壊れていて消し方が解らなかったのは困った。お母さんに聞いたら、ボリュームを大きくして踊って部屋から出ていってしまった。これには驚いたというか、ちょっととまどった。結局、ボリュームを下げて眠りました。どうやら、本当はコンセントを抜いて消すみたいです。こんな普通の生活をしているのに、この家族に昔は家が無かったということが信じられないです。

ホストファミリーと話したこと。

1日目夜遅くについたため、起きているのはお母さんだけだった。どんな人なのだろうとドキドキしていたけど、陽気な人で一安心しました。少ししか話せなかったけど、嬉しそうに子供たちの話をしながら、写真を見せてくれました。次の日、シェラという12歳の女の子と話しました。英語がうまくて、私たちのつたない英語を一生懸命理解してくれました。12歳とは思えないほど、しっかりしていて、でも少し照れ屋さんでかわいかったです。帰る日、荷物の上にシェラからの手紙があってとても感激しました。短い間だったけど、とても仲良くなれた気がして嬉しかったです。

お父さん、お母さん、娘2人、息子1人の5人家族だった。

お父さんは、あんまり家にいなくて、起きている姿を見たのは1度だけでした。自己紹介しか出来なかったけど、ニコニコしていて、とても優しい人でした。お母さんは、とっても元気で明るくて働きもの。夜遅くに帰ってきて、朝早くに出かけていってしまうのに、いつでもパワフルでした。家にいる時も仕事の電話をしていて、ずっと忙しそうでした。子供たち3人は、どうやらテレビの仕事をしているようだった。シェラのアイドルチックな写真や、お姉さんのステキな写真を見せてもらって、おもしろかった。お姉さんはクラブシンガーもしているそうで、夜になると仕事に出かけてしまうので、ほとんど話すことはできませんでした。弟くんのラファエルは、シャイな子でシェラの近くで話を聞きながら、にっこりしているかわいらしい子だった。お父さんも、お母さんも、お姉さんもなかなか家にいない忙しい一家でした。

3. 1日に500台のトラックがゴミを捨てに来るといっただけあって、見学していた何分かの間にも、ゴミがたくさん運ばれてきていた。いつか捨てる場所が無くなってしまっているのではないかと思った。分別されていないゴミからお金を稼ぐ人、分別されていないことによって出てくる体に悪いもの、問題はいっぱいだなと思いました。

もっともっと重労働を覚悟して行ったのに、そうでもなかった。ただ大変なところに行かなかただけかもしれないけど……。鉄を切って曲げたり、砂運び、砂こし、プロッ

ク作りをしたりと地味な作業をしていた。それでも、やっぱり疲れしました。炎天下の中、日焼けをしないように長袖を着て帽子をかぶって、あんまり動いてないのに汗ダクダクでした。そんな中、いろいろ大事なことを学んだ気がします。

砂をこして、最後の小石を飛ばすのが下手くそでも、笑いながらコツを教えてくれたり、ずっと同じ作業をしていると「疲れてない？」と言葉をかけてくれたり、言葉があんまり通じないのに話しかけてくれたりと、とても寛大な心を持っている人たちがたくさんいました。そのまんまの無理をしていない自分を、受け入れてくれるのがとても嬉しかったです。その精神を見習いたいと思いました。

ワークキャンプに参加して本当によかった。フィリピンに興味があったことと、最後の夏休みいろんなところに行きたいという理由で参加する事を決めました。すごく楽しみにしていたけど、出発の日が近づくにつれて、かなり不安になっていました。人見知りな激しいことを、だんだん思い出してきていたから。でも、そんな不安も実際行ってみたら吹っ飛んでしまいました。みんな一人一人、いっぱいいいところを持っている、魅力的な人ばかりでした。知らない人と、いきなりずっと同じ生活をするという機会ってあまりないから、今までの友達とは違う感じがする。どこが違うのかは解らないけど、とっても大事な人たちに会えたと思います。みんなに会えて本当によかった。最後の夏休みいい経験が出来ました。ありがとう。

## 唐澤 俊雄

1. 今回のワークキャンプで資源リサイクルについてリサーチし実際に作業を体験したが、このプロジェクトの前までフィリピンのような発展途上国ではお金や環境技術が乏しい為、十分な対策が採られていないと思っていたが、実際に体験し担当者の話を聞くと海外のNGOから援助を受け、ZKKなどのボランティアグループが中心になって環境問題にしっかり取り組み、古新聞やビニールパックから立派なバックや装飾品に変えリサイクルしている事に感動した。この体験を通じてゴミからもリサイクルすれば立派な製品に生まれ変わり再利用できる事を学び、自分自身もこれからも資源リサイクルを心掛け今まで以上にゴミの分別をしっかり行うなど、資源を大切に作る意識がついた。

2. 私がホームステイさせてもらった家は<sup>2</sup>階建てであり、内装も立派で家電製品も充実し、サイト内では比較的裕福な家庭であった。しかし豊かな生活に慣れた日本人として驚いた事は水道の蛇口はあるのだが、水が1滴も出ず生活用水は全て桶に溜めてある水を使っていることだ。だからシャワーはなくお湯は出ず、トイレも自分で流し、体を洗いたい場合はトイレ横の小さなスペースで水浴びをしなければならない。日本では蛇口をひねると水が出てお湯も出るし、トイレも水洗であるのが当たり前である。しかし、ホームステイを体験したことによって、日本の豊かさや水道のありがたみを再認識し、フィリピンと日

本の生活のギャップを感じた。ホームステイ先は<sup>5</sup> 人家族だが、旦那さん以外は英語が話せず、必要な会話以外はほとんど話さなかったが、自分達のためにいろいろと親切にもてなしてくれ、何不自由なく<sup>2</sup> 日間過ごす事が出来た。私は海外でのホームステイは初めてであり、フィリピンの文化を体験できた事は本当に良い経験だった。

3 . 今回のフィリピンワークキャンプで、私は本当にいろいろな事を経験し学ぶ事ができ、とても貴重な時間を過ごせることができた。その中一番思い出深いのがワークである。キャンプ最初の1 週間はワークであったが、ワークをする前まで建設技術も無い、私達日本人を現地のフィリピン人が受け入れてくれるか心配だった。しかしその不安は1 日、2 日とワークをするたびに消えた。最初はお互い堅く会話も少なかったが、一緒に泥まみれになり穴を掘り、作業のつらさや達成感を共有する事で現地のフィリピン人も私たちの存在を認め、本当にフレンドリーに接してくれ、作業をしながらいろんなことを語り冗談を言い、いつしか私達のワーク現場は笑いが絶えない場所となり本当に楽しかった。自分としても炎天下の慣れない土地での穴掘りは正直つらく、体中が筋肉痛になったが現地の人達やキャンプ仲間達と一緒に働く内につらさはなくなり、作業にやりがいを感じた。ワーク最終日にハビダットの職員からワーク終了証を受け取った時、ワークのつらさが喜びに変わり、この達成感は感無量であった。

ワークを通じて最初は相手が排他的だと感じて一緒に働く立場で働き、自分達の誠意を表現したら、すぐに友情が芽生え、友情には国境が無いと感じると共にワークを行っている間、自分は本当にボランティアとして役に立っているのか考えた時期もあったが、私達が一生懸命働く事によってフィリピンの人達に勇気を与え、やる気を引き起こす力になっている事が分かり、現地のフィリピン人に大きく貢献できた事にワークのやりがいを感じた。

ワーク以外にもゴミの埋め立て地を2 箇所見学に行ったが、作業現場を少し見ただけだったので自前に見たビデオのように重たい感じは無く、ただゴミの量が凄いなと思う程度であった。またゴミを拾って生活している人(スカベンジャー)は、一般的な肉体労働の倍程度お金を稼げる。そのため日本人から見ればスカベンジャーの仕事はかわいそうと思うが、フィリピン人から見れば普通なのだと感じた。しかしスカベンジャーの子供達もまた親と同じ様になる為、学校に行かずゴミを拾い続ける。しっかりした教育を受けていないのでなれる職業に限られ結局スカベンジャーになる。日本と同じような資源も無い島国で、経済の発展には技術力の向上が必要な事から、人材育成のため教育を受ける事は重要である。スモークマウテンを見てもほとんどの子供達がゴミを拾い続けるため悪循環であると感じ改善すべきだと思う。その他にもホームステイやリサーチプロジェクトなどいろいろな事を体験し、日本がどれだけ豊かであるかを実感し、改めて資源や環境の大切さを考える事が出来た。このワークキャンプで学んだ事は非常に多く、自分にとって有意義な旅であった。また本当に楽しく、ここで出会えた仲間は最高であった。

## 河端 奈歩

1. ココナッツの殻を粉砕機にかけ、今度はそれらをふるいのようなもので分け、最後に残った繊維の柔らかい部分だけを手で選り分ける...その単調作業が黙々と進んでいく。はっきり言ってワークよりきついような気がしたのは私だけであろうか。ワークではお喋りをしたりしながら、楽しく仕事をしていた。ここでは粉砕機の音で話すことも出来ず、「作業」そのものを重点的にするしかないのだ。何か、いかにも「仕事」という感じで、いかにもな「労働者」の気分を痛感。リサイクル精神は素晴らしい！しかも、ストローで作ったアクセサリーとかバナナの皮から作るお酢とか...よくそんなの思いついたわね！とアイデアにビックリ。しかも手作業のものばかり！日本じゃ、ほとんど機械だよなあ...。裏ではこんな大変な作業をしているのね...と労働者気分一杯であった。

2. 水道の蛇口からは水が出ず、溜めてある水を使う。お風呂がトイレと一緒にというのは特に驚かされた。トイレを流すのと同じ桶に溜めてある水を使って体を流す。一瞬、えっ？と思ってしまったが、いざやってみると結構平気なものである。たった二日間のホームステイであったが、正に「朱に交われば赤くなる」...人間、環境が変われば、それに適応することが出来るものであることを再認識。普通の旅行では出来ないような貴重な体験をさせていただいた。残念なことに、家の人との交流が少なかった。というのも、着いたその日は「遅いので今日はもう寝なさい」的なことを言われてしまい、自己紹介など少しばかりの会話しか出来なかった。他の日も、私はほとんど家にいなかったので...。子供達とはどうやら外で知らないうちに遊んでいたようだが、情けないことに、その子達といつ遊んだかは記憶にないのだ。とりあえず「ナホ！」と呼んでくれたので、「おお！私の名前知ってたのね！」とか思ったくらいで...（あ、でも最初の自己紹介で名前いったから覚えていたのかしら？）。お恥ずかしい限りである。もう少し家族と話したりすれば良かったなあ...と、後悔。筆不精の私であるが、必ずや手紙を書いて話せなかった分を取り返してみせすとも！！

3. フィリピンは「我こそは精神満載の国」であった...（車に限ってかな？）。ジブニーに乗って移動していると車は「俺が先に行く！」と主張しあうようにクラクションを鳴らし合う。日本では「オイ！速く行けよお~！！」という文句クラクションであるが、ここでは「俺が！」「いや私が！」という我こそはクラクションなのだ。決して陰険なイメージではなく危険回避の役割もしている明るいイメージのクラクション。皆が皆、ブーブーと鳴らし合うのが日常茶飯事。文化の違いというのか、いやはや面白いものである。...というのが、ジブニー（フィリピンの乗り物）に乗っているときに感じたこと。ワークとは直接関係あるわけじゃないのだが、この文化の違いの面白さを知ってもらいたいなあ、なんぞと試してみたいので書いてみたのである。

このワークキャンプを通して私が得たものは、ものすごく大きい。本当に色々な体験を

させていただいた。上記に書いたような文化の違いも体験できた。ゴミの埋め立て地を見学することでゴミを拾って生活する人々の現状を目の当たりにし、ワークやホームステイではフィリピンの人達との直接の触れ合いを楽しんだ。

ゴミの埋め立て地は、フィリピンへ行く前に日本で観たビデオのイメージからもっと暗い感じなのかと思っていた。しかし実際に見学してみると、人々は活気に満ち溢れ、ただの「ゴミ拾い」ではなく「仕事」としてゴミを拾っていた。だが、子供達も一緒になって拾っているのを見ると、「子供も働かなくては生活していけない」という低所得階級者達の生活を垣間見た気がしたのも事実である。まあ、こんな偉そうなことを書いているが、現地を2回見たところで、人々の生活の本当の辛さも知れる筈がない。そんなもので分かったといたら虫が良すぎる。ただ一つ、はっきり分かったこと。それは彼らが決して笑顔を忘れないことである。日本という国は知らない人に笑顔を向けることはない。経済的に豊かでも心の豊かさはフィリピンの方が断然素晴らしいと思う、ホント。「笑顔」という素晴らしい財産をフィリピンは持っているんだな。例え経済的に豊かになったとしても、この素晴らしい財産をフィリピンが失わないことを切に願う。

ワークでは本当に様々な人と作業をした。彼らは仕事も楽しんでやっている。いや、楽しくしていると言ったほうが正しいのだろうか。(いや、やっぱり「楽しんでる」の方が良いか?) 黙々と作業をしている日本とは違い、歌を歌ったり人との交流を楽しみながら仕事をするのだ。いやぁ...なんか素敵ですなぁ。日本ではこういうこと無いですもんねえ。彼らは「自分達の家を作っているんだぞ!」という希望に満ち満ちているんだな、うん。そこが違うのかもしれない。

フィリピンへ行くことで色々なことが私の中で変わった。「目が開けた」という感じである。「目が開けた」とかいうと大袈裟かもしれない。というか本当に大袈裟だと思うけれど、今まで自分が抱いていた色々なことが一気に変わったのである。具体的にどう言ったら良いのか分からん(というか上手く言えない)ので「何がどう変わった」ってのは省略! ということで、お許し下され。

実は、最初はこのワークキャンプに参加することに、かなりの不安があった。特に「知らない人ばかりの中で果たして自分うまくやっていけるのだからーか?」というのが自分の中ではかなり大きな心配で、行くことをやめようと思ったこともあった。だが行ってみるとそんな心配はつきり言って無駄でござった! 2週間なんてあっという間に過ぎてしまい、帰ることが本当に寂しかった。それだけ、本当に楽しかったのだろうか。今までの夏休みで一番濃い2週間だったのではないだろうか。これもメンバーがいたからこそいえることだと思う。メンバーの皆と出会えたこと、これが一番大きなことかもしれない。

「ワークキャンプに参加して良かったー!! みんな! ありがとう!!」フィリピンの方々にもメンバーの皆さんにも、ホント...感謝感激雨あられの気持ちで一杯でございます。

## 河村 愛

1 . ECO の作業について思ったことは、「もっと効率のいいやり方はないのかな」とひたすら疑問を抱いたことです。例えば、シュレッダーにかけたヤシの実の繊維を運ぶときも、バケツみたいなのでちまちま運ぶのですが、もっと一気に運ぶ方法がきっとあると思います。あとは、機械の排気ガスがひどいので、いつもそこで働いている人たちの健康が損なわれるのではないかと感じました。リサイクルについては、果物の皮で酢を作ったり、日本でもう売られているジュースの空きパックでバックを作ったり、ビニール袋で縄を編んだり、と発想が豊かだなと感じました。中でもボールペンの芯や綿棒の芯やストローを使って、アクセサリーを作るという発想に本当に感動しました。しかも、それに色をつけたり、長さを変えて切ったりすることによって、様々な種類のビーズの代わりになって、いろいろなデザインのアクセサリーが作れるのです。

デイケア（保育園）へも行ったのですが、そこは日本の保育園に比べてとても自由な感じがしました。通っている子どもたちは、遊んでいる子や、勉強をやっている子、何にもしていない子などがいて、またデイケアをのぞいている人たちもいました。そして時間になったらみんな思い思いに家に帰っていくのです。日本みたいに全員で「さようなら」といった挨拶はしないのです。日本ほど「集団」を重んじている国もあんまりないですよ…。

2 . 私がホームステイした家は、2階建ての家で、絵やお人形などの装飾品もたくさんあり、テレビはもちろんカラオケやパソコンといった電化製品も充実した、低所得の家庭とは思えないほど綺麗なお家でした。そしてその家は、お父さんとお母さん、子どもが3人にいところが1人の家族で、昼は子どもたちの友達が遊びに来たり、夜は近所の人たちがお父さんと一緒に飲んでいたりしていたので、社交的かつ友好的な家庭だと感じました。私たちに対しても、お菓子とお茶をだしてくれたり、カラオケで歌を聴かせてくれたりしました。さらに、一番上の子に今フィリピンで流行っているダンス（老若男女問わずみんな知っているダンス）を教えてもらったのですが、そのとき、その家にホームステイしていない他のチームメンバーも家に招いてくれて、一緒に教わりました。本当に私が行った家の家族の人々にはとても親切にしてもらいました。なので、私はホームステイをした2日間、心温まるステキな人たちに囲まれて、とても楽しく過ごしました。

3 . ゴミの埋め立て地に見学に行って、直接見て、最初に思ったことは、自分が想像していたよりは劣悪な状態ではないということでした。何故かというと、ワークキャンプに行く前に、ゴミの山やスカベンジャーについてのビデオを観たのですが、たぶん私はそのビデオの内容をそのまま想像していたので、このような感想を抱いたのだと思います。

ワークについては、仕事自体は穴掘りや砂運びやブロック作りや鉄曲げなど、力仕事かつ単純作業だったので、とても大変なものだったと思います。しかし、仕事をやりながら、現地の人と話したり、子どもたちと遊んだり、ただ黙々と作業するのではなく、しみ

がらやっていたので、そんなに疲れることもなく、気持ちよく仕事ができたとおもいます。

この旅全体を通して、私はなによりも『英語の大切さ』を実感しました。英語が話せないと現地の人とコミュニケーション手段がなくなってしまうと、自分の気持ちも伝えられないし、相手の気持ちもわかりません。だから楽しさも喜びも半減してしまいます。それはとても残念なことだと思えます。ところで、私は以前耳の聞えない人の講演会に行ったことがあるのですが、その人は「まず、伝えたいという気持ちが大切。それから言葉というものがついてくる。だから手話ができないから話せないのではなくて、話したいからどうにかして伝えようとする。それが、話し言葉だったり手話だったりする。」とおっしゃっていました。それと今回のことは全く同じことが言えると思えます。しかし、私は「うまくコミュニケーションとれなかったらどうしよう」と怖がって、あまり積極的に現地の人と話そうとしなかったと思えます。それでは何も生まれません。まず、自分の気持ちを伝えようとする事、相手の気持ちを知りたいと思う事、そして話したいという気持ちと話そうとする努力が大切だと思えます。差し当たっての私の目標は、英語の勉強をもっとして、今度どこか外国に行くときは積極的にいろいろな人といろいろな話をする事です。

## 岸 英明

1. 正直なところ、作業も淡々とこなしていて今自分が何をしているかとか全くと言っていいほど考えていませんでしたわ...悪しからず。

2. 自分の想像があまりにもすごくひどい家を想像していたから家に関しては普通の家じゃん！なんて思った。一番驚いたことといえば、お風呂という概念がないんだなあってことです。トイレがありそこに排水溝があり、その横に大きい桶に水が入っている。これがこの家のいわゆるお風呂なのです。お湯なんて出なければシャワーもない、水だつてろくに出不しい...これにはさすがにビックリしましたわ~〔汗〕。当たり前なことが当たり前じゃない事への驚きでした。ファミリーに関してはあまり話をしてないのでわかりませんが、勝手な偏見で、フィリピン人はみんな英語が話せると思っていたため、ファミリーがほとんど話せなくて驚きでした。自分も話せないのにえらそうかぁ!?

前述のとおりファミリーとはほとんど会話らしい会話をしていないため、ホームステイについては...その代わりにほかの家で楽しむことができました！まずはホームステイ先の隣の家。なんだか知ってる曲が聴こえてきたので隣の家を覗いていたら手招きをされて、全く知らない人の家にお邪魔してしまったのです。どーやら子供の誕生日会をやっていて子供がカラオケを熱唱してはもう一人の子供がダンス！オレも便乗してダンス！そんな事をしていたらそのママさんが飲み物とケーキまで出してくれてビックリ!!そのまま歌って踊って数十分...最高に楽しかったな。まず日本では有り得ない事だと思う。家を覗いている奴を家に上げたりしないねまず！あともう1件お邪魔した家があるのです。その家は売店をやっている家で、そこに買い物に行ったら仕事現場で知り合ったおじさんの家で、“まゝ上



がれよ”との一言に始まり、上がるや否や酒が出てくるではあ～りませんか！出された物は飲まないわけにはいかないので、まずは飲む 気持ち良くなる 話し込む また酒が出る。これの繰り返しのおかげで<sup>9</sup> 時ぐらいに来たにもかかわらず、気がつけば<sup>12</sup> 時をまわり捜索までされる始末に...しかし、本当に楽しかった。お互いの国のくだらない言葉を教えたりだの、日本の曲『乾杯』はフィリピンのおじさまの間で人気であり、(カバーなのかパクリかは謎です。)一緒に歌ったこと、何故フィリピンに来たのか等。とにかく熱い語らいをした。子供も好きだけど、おじ様方も最高でした！

上記同様に家に居なかったので、よくわかりませんがママさんは気を使ってフルーツを出してくれました。息子は寡黙な男でした。

3 . 僕はサンダルを履いていたせいで、すぐ側で見ることはできなかったけど、本当にゴミの山に人が群がっている光景に圧倒された。しかも、大人だけでなく幼い子供までもだ。しかし驚きもあった。それは、側を通る子供たちがこちらに笑顔くれたことだ。もはや僕の偏見であったが、このような現場で生計を立てている人達が、部外者である僕たちに笑顔をくれるだなんて思いにもよらなかったことだ。むしろ軽蔑の目を向けられる覚悟だった僕には一番の驚きだった。更にもう一つ意外な驚きといえば、ゴミ集めにおいてのサラリーは、稼ぐ人は土木作業の日給の<sup>2</sup>~<sup>3</sup> 倍も稼ぐらしい。これには驚いた。がしかし衛生面においての悪さに加え、彼らはサンダルで作業をするため足元は大変危険であるリスクもある。普通の仕事より稼げるという現状がある以上、たとえ仕事に就けてもあえてゴミの山ではたらくひとはいるだろうし、この仕事がある以上、そこで働く人はいなくなるだろうと思った。

大変な面もあった...がそれ以上に楽しかった！現地の人達のおかげで仕事が楽しくできた。だから苦ではなかった。

フィリピンの人達(特に貧しい人達は余計にそうであろうが)は、生活に音楽とダンスが密着していると思う。お金をかけない楽しみ方をたくさん知っている。日本人の僕らはおそらくそういった遊びをあまり知らない。物質に頼ってばかりだ。そういう意味では日本は豊かであると思う。そんな豊かな国である日本に大人から子供まで純粋な笑顔を持っている人が何人いるだろうか？だからといってぼくは日本が嫌いだといっているわけではない。日本は大好きだ。それ故にフィリピンの持つ心の豊かさはお手本にしたい！子供のうちからゲームばかりしていて、ろくに人とコミュニケーションがとれなかったり、自分を表現できなかったり、質問することや人に聞くことは恥ずかしい。なんていう人は大学生になってもまわりにはわんさかいる。こういうことは、ぼくはとて<sup>POOR</sup>なことだと思う。今の日本人に欠けていることだと思う。これからも技術は進歩するであろう、だけどそれとともに僕は“日本人はSHYだ”というイメージも払拭していきたいと思う。フィリピンはたしかに物質的には豊かでない部分もあり、貧富の差も激しいが、人間としては、遥かにフィリピンの方が人間臭いと感じるのだ。

## 佐久間 知香

この夏、二週間のフィリピンでの体験は私にとって何もかもが初で衝撃的なものだった。アジア滞在・タガログ語・建設作業・手動水洗トイレ・ハロハロ・・・それから、もちろん入院も点滴も初めてで、今思えば全てが本当によい経験だった。今回、私が何故このワークキャンプに参加しようと思ったかという、ただ単にボランティア活動をしたいと思いい、老人や障害者の様々な分野の施設を探していたとき『本日フィリピンワークキャンプ説明会最終日』という看板に出会ったからである。「ボランティア」をするという頭だけで参加したので、出発前はこんなにも多くの感情を抱き、考え学ぶ旅になるとは思ってもみなかったが、期待をはるかに超えた体験と仲間ができた。

その中で一つ取り上げるとしたら、ありがちな意見になると思うがあらためて日本の豊かさを痛感したことである。(発展途上国の最低レベルと現在の日本を比較するからより一層その思いが増すのかもしれないが。)衛生面では空気や水は汚れ食事にはハエがたかる状況、交通は旧型車が排気ガスを大量に出しながら機能していない信号機のある道なき道を走り、道端では何人もの物乞いがついてくるのは日常茶飯事・・・日本では想像できない環境だ。その中で現地の人々はごく当たり前のように生活をしていて、子供たちも一見元気いっぱい遊び育っていた。「この環境下で、この子達に明るい未来はあるのだろうか」「明るい未来って？」そんな疑問が浮かび、私が強く決心したこと・・・“自分の可能性と周りの環境を最大限に生かして人生をまっとうしよう”とゆうことだ。ここにきて自己中心的な考えだが、現在大学三年生で就職活動を控え将来の道におもいをはせている自分と、フィリピンで出会った子供たちを考えると(偏見になってしまうかもしれないが)環境に恵まれている私にはこの子供たちより多くの選択肢があるように思えた。衣食住をはじめとし、教育・情報などの恩恵を受けられるこの環境と文化は日本の誇るべきところである。生きているという素朴な、しかし最高の幸せをかみしめながらしっかりと歩んでいこうと思う。

今は、このキャンプに関わった皆に感謝の気持ちでいっぱいだ。入院して悔しい思いをしている時に一緒に泣いてくれた、お化け病院で付き添ってくれた、お守りをくれた、こんな私でも頼ってくれた、心から喜んだりショックを受けたりした仲間と企画や進行に関わってくださった皆様、本当にありがとうございました。

## 佐藤 なつこ

1. ホームステイ先の ASAMBA での 2 日間、Eco-waste Management という、リサイクル活動に参加させていただいた。しかしこれが本当に辛かった。大量の紙を、ホチキスの針などを取り除きながら‘ひたすら’色別に分ける作業、ゴキブリや名も知らぬ虫がたくさん付いたココナツを‘ひたすら’シュレッダーにかける作業、機械から出てくるココナツのカスを‘ひたすら’片付ける作業など、シュレッダーの騒音のため話すことも歌うこともできない無言の単純作業に私たちはすぐ音をあげてしまった。しかし、それらの作業

を毎日安い賃金で続けている人たちが目の前にいた。彼らにとっては大切な仕事。自分の態度を反省した。と同時に、他の ZKK の活動（バナナの皮で酢を作ったり、ボールペンの芯でアクセサリーを作るなど、私には考えもつかないアイデアの数々）からも、物を大切にすゝる気持ちの違いを強く感じた。私たちは、物を捨てる生活に慣れすぎてしまっているのでは、と考えさせられた。

2. 私はチカと、「フィリピンの母」と言われるリンダさんの家にホームステイさせていただいた。ホームステイをしていて一番驚いたことは、説明されない家族構成がわからないことだ。誰がこの家に住んでいる家族なのかすらわからない。“自分の家で友達が一人でお茶を飲んでいる”なんて、私の感覚では考えられないことだが、ここでは当たり前なようだった。だからか、私たちがホームステイをしていることに対して、「お客さんが来た」「よそ者が来た」という雰囲気はなく、家の中で一番きれいな部屋を貸していただいたはずごく日常的だった。30歳の Rolando は、私のつたない英語にも根気よく付き合ってくれて、将来の夢や大学のこと、恋愛話などいろいろと話せたのがうれしかった。

また、私が泊まらせていただいた家にはシャワーがあったが、パソコンやテレビ、カラオケなどがあるのにシャワーはない、という家がけっこう多いようで、優先順位の違いに驚いた。しかし、シャワーがないのが日常だと、あえて付けようと思わないのは自然なことかもしれない。それから、子ども達の活動時間の長さには恐れ入った。朝早くから夜遅くまで子ども達の笑い声が絶えなかった。そして、子ども達の多さにも驚いた。子ども達には子ども達の社会があるようで、リーダー格の子が小さい子の面倒を見たり、悪さをすると注意したり、いろいろなことを上の子から下の子へ教えている姿が印象的だった。また、大人達も自分の子と同じように他の子にも怒るなど、子どもがコミュニティーの中で育っている感じが、なんだかなつかしく思えた。こういう光景、今の日本ではあまり見ないなあと。それにしても子どもたちの、あの元気の源は何だろう。

3. 実際にゴミの埋め立て地に行く前に「忘れられた子どもたち」「神の子たち」を見て、私の中に“ゴミの山ってこんな感じ”というイメージができていた。そして、自分があるところに行くことに戸惑いがあった。そこで働いているスカベンジャーたちは、見学している私たちを見てどう思うのだろう、とか、映像で見ただけで一晩眠れないほどの衝撃を受けたのに、そこに臭いとその場の空気が加わる目の前のゴミの山を受け止めることができるだろうか、とか…。しかし意を決してそこへ行き、意表を突かれた。スカベンジャーたちは笑顔だったのだ。その笑顔がしばらく頭から離れず、いろいろなことを考えた。自分の中にあった思い込みや同情、ある種の差別心、そして教育の重要性、1日1日を生きるということなど、考えても考えてもなかなか答えは出なかった。しかし、ゴミの埋め立て地に行き、感じたことが、今後の私に少なからず影響を与えていこうと思う。

ワーク中、私は「家ってこうやって造られるんだ」「人ってこうやって生きているんだ」

と、ひとつひとつの行動から感じていた。電気や機械、水道がなくても、ひたすら穴を掘り、砂利を運び、ブロックを作り、鉄を曲げて枠を作り...、それらを使って、たしかに家は建つ。しかし、人々の思いやりや強い思い、たくましい生命力、生活の知恵、そして愛がなければこの家は建たないと感じた。使うのにかなりの決意が必要なトイレ、カラカラに乾く喉、1日働いた翌朝の空腹感（朝食をちゃんと食べたくなる）、水がちょろちょろ出るだけのシャワー、毎日続く激しい腹痛、ごはんにたかる大量のハエ、排気ガスによるガラガラ声、共に働くことで生まれる仲間意識、家・コミュニティの存在、ツライ仕事を楽しむ方法、早朝の放置と独り言...、日本にいる時とは違う、でも自然な体のリズムや反応を感じ、私にとって本当に必要なものは何かを考え、自分自身と常に向き合っていた。そして、徐々に自分と付き合いやすくなってきた。大学3年生の夏、与えられたものの中で過ごす日々がもうすぐ終わり、卒業後は、自ら何かを生み出すことによって生きていくということ、リアルに感じられずにいた私にとって、とても貴重な日々だったと心から思う。

これまでの生活の中で、この2週間ほど思い切り笑い、オンチなのに大声で歌い、人前でわんわん泣き、心穏やかに祈ったことはなかったように思う。毎日いろいろなことを感じ考えすぎて、泣いたり笑ったり收拾がつかなくなるという経験もした。常に何かを考え、その思いをシェアできる仲間と共にフィリピンで2週間生きてきた。そんな2週間は短すぎた。もっともっと、みんなと一緒に、笑顔あふれるフィリピンにいたかった。（でもそれは、21日には紙付きの水洗トイレやあったかいシャワー、住み慣れた家のある日本に帰るという前提があって初めて言えることだけれど。）私にとって初めての経験。その中で、今まで知らなかった世界、まだ知らない世界がたくさんあることを再認識した。また、ひとりひとりみんな違い、違うからこそ求め合い、助け合い、与え合う、人間っていいもんだ！ということを実感する日々だった。それはフィリピンの人々とだけではなく、チーム内でも、私にとっては大したことないことや、気にも留めないことで強いストレスを感じている仲間がいたり、逆にみんなが楽しんでいることを私は楽しむことができず辛かったり、そんな価値観や感覚の違いをお互いに理解し、分かち合い、解決しようと話し合ったことが何度もあった。いろいろな世界があること、いろいろな人がいること、何でも「知る」ということから始まることや変わることはとても多い。だから、私はこの2週間のことをたくさんの人に話そうと思う。そして周りの人々や自分を大切に、心豊かに、1日1日を生きていきたい。今日も、ていねいに。

## 篠崎 知子

1. このプログラムでは、私は紙を色別に分別する仕事とココナッツの繊維の仕分けをやりました。ここでは、黙々と作業をしていたという印象が強いです。また実質の作業時間はあまりなかったのですが、とても疲れたという記憶があります。またこのプログラムの

考案者のレクチャーを受けたときに、様々なリサイクル方法を紹介してくれましたが、この活動がもっとフィリピンに普及してほしいと思いました。

2. まずホームステイ先のコミュニティ全体を通してですが、私たちがホームステイ先に着いてすぐに受けたコミュニティの人々の歓迎振りに驚かされました。私たちがその村に着いたのがかなり夜遅くになってしまい、村の人たちはほとんど寝てしまっているのだろうな、こんなに遅くなって申し訳ないなと思っていたので、ついた瞬間に多くの人が私たちを笑顔で出迎えてくれた時はうれしさと同時に驚きを感じました。そこでワーク中にも感じたフィリピンの人たちの暖かさを再確認することができました。そして、子供たちの多さにも驚きました。フィリピンでは子供たちの多さにも驚きましたが、ここは学校なのかなと一瞬錯覚してしまうくらいの子供たちがコミュニティにいた光景が私には印象的でした。

また生活習慣の違いは少なからず驚きました。例えば、現地の人はとても朝が早く朝の5時ごろから活動し始めるのにも驚きましたし、トイレやお風呂事情にもどんなものか話には聞いていたものの、実際に目のあたりにすると多少の戸惑いは感じました。また、ステイ先では家の中には靴を脱いで入っていたので、日本と同じような習慣もあるのだと驚きと同時にどことなく親しみを感じる場面もありました。

私にはステイ先の子供たちと遊んだことがとても楽しい出来事でした。先にも述べたようにコミュニティにはたくさんの子供たちがいて、私たちに満面の笑顔を振り撒き、人懐っこく接してくれていたのが、本当に楽しいホームステイをすることができました。子供たちの中には英語が話せない子がいたり、私もうまく子供たちの話を理解できなかったりと子供たちと言葉のコミュニケーションはうまくいきませんでした。いっしょに歌を歌ったり、踊ったり、ゲームをしたりと言葉以外のあらゆる方法で子供たちとコミュニケーションをとることができました。私はコミュニケーションをとる上で言葉は必要だけれども必ずしもすべてではないのだということこの子供たちとの関わり合いで学ぶことができました。

私がホームステイをさせていただいた家族は、お母さん、おばあちゃん、15歳と7歳になる男の子の4人家族の家庭でした。お父さんは若くして亡くなってしまったようで、その話を初日の家に着いて早々にお母さんが涙ながらに話してくださり本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまいました。お母さんは私たちが滞在中、明学チームの食事の世話をしてくれていました。また仕事勤めもして朝早くから出かけてしまうというとても忙しい方で、あまり話をする機会がなかったのが残念でした。

私がホームステイ中に一番印象的だった出来事は、私たちがステイ先のコミュニティに到着し、それぞれステイ先の家族に付き添われたり荷物を持ってもらったりしてステイ先に分かれるときでした。私の荷物を家族ではない村の男の人が普通に家まで運んでくれて、しかも私のステイ先家族の人と家族のように仲の良さそうな感じで話したりしていました。

私はこのときこれこそコミュニティなのだと感じました。またその家には、近所の人やべつの所に住んでいる親戚の人が自由に出入りをしていて、家に戻るたびに知らない人がいるというあまり体験できない経験もしました。その家にはお父さんがいない分不自由になることが多いと思うけれど、それをコミュニティの深さで助け合っているのだと感じました。本当に人と人との係わり合いが深かったです。日本に住んでいる私にとっては本当に印象的でした。日本は経済が豊かになるにつれて人と人との関わりが薄れてしまったけれど、フィリピンの人たちにはこれから発展していく上でその人と人との関わり合いを忘れないでほしいと強く願います。

3. 私は事前の研修会にあまり出られず、研修会の上に上映したスモークマウンテンのビデオを見られなかったので、ゴミの埋め立て地の基礎知識や先入観がないまま見学に行きました。そして実際に行ってみると、ついた瞬間ゴミ特有の臭いが立ちこもり、健康に及ぼす影響などを考えると確かに良くない環境であったことは見て明らかだったのですが、そこにいる人々があたりまえのように普通に作業していてひとつのビジネスがここで成立しているなという印象を受けました。批判を受けてしまうかもしれませんが、私はどこか社会科見学に来ているような感覚を持ってしまいました。

ワークでは行く前からわかっていたことなのですが、改めて自分が作業の役に立たないことを実感しました。そして物を作り出すという大変さを心から思い知りました。またワークの作業が後半にはスコールの影響で作業を中断せざるを得なくなって作業時間が減ってしまったり、「家」という形を見ないまま基礎の作業だけで終わってしまったりしたので、どことなく中途半端な気持ちのまま去ることになってしまいもう少しワークをやりたかったというのが正直な感想です。

私はこの旅で、フィリピンの人々の暖かさに出会うことができました。フィリピンの人たちは本当に私たちを暖かく「笑顔」で受け入れてくれて私は本当に救われた思いをしました。そして私はフィリピンの人たちが見せてくれた「笑顔」を一生忘れません。笑顔はすごく大切なものだと感じることができました。

## 薦津 絵名

1. リサイクルについて改めて考えさせられた。日本の高度なリサイクルの技術とはかけ離れているものの、ゴミを分別する意義やリサイクルの大切さを積極的に伝えようとする姿勢は、私たち日本人も見習う必要があると思った。ゴミの分別がもはや面倒なものでなく、無意識になされるようになった今だからこそ、もう一度リサイクルについて考えなければならないだろう。またスカベンジャーの問題にしても、フィリピン社会が欧米化されるとともに、ゴミ処理施設などの下地もないまま、消費文化を受け入れざるを得なかった結果なのではないかと思うと、非常に複雑な気持ちがした。

2. アサンバに着いて驚いたことは、夜も遅いのに幼い子からお年寄りまで、多くの人が出迎えてくれたことである。ホームステイ先が、それまでワークをしていたバナイ地域ではないことに不安を抱いていたが、子供たちの笑顔や大人たちのホスピタリティーによってすぐにそれも解消された。またその村が、バナイの未来の姿であるのかと思うと、すごくうれしかった。私が二日間お世話になった家は、お母さんの Ate Mila と、娘の Jonalyn、と Julie-Anne の三人家族だった。話を聞くと父親はサウジアラビアに出稼ぎに行っているらしかった。その家で過ごすことができたのは本当に短い時間だったが、近所の人や親戚、また娘の友人までが頻繁に出入りするような、とても居心地の良い家だった。予想通りトイレは手桶でシャワーもなかったけれど、狭いトイレで水浴びするのも意外に爽快で、むしろそんな状況でも楽しめる自分の強さに驚いた。

3. 価値観の破壊。私にとってこの二週間のワークキャンプは、驚きと発見の連続で、これまで培ってきた自分の自信をも揺るがすような体験だった。特にゴミの山で働くスカベンジャーの様子は、予想とは全く異なるものだった。日本でスモークマウンテンのビデオを見た後、貧しい彼らに対して豊かな私たちは何ができるのか、と思った。ビデオから受けるイメージだけで、彼らに同情していたのである。しかし実際に訪れてみると、それがかなりの偏見からくる感情だと気づいた。ゴミの山の規模や悪臭、そしてスカベンジャーとして働く人の数は想像以上だったが、そこには仲間と笑顔で作業を続ける姿があった。劣悪な労働環境だとしても、「貧しい」と一言で言い切れないくらい、彼らは明るかった。「貧しい」=「暗い」、「豊か」=「明るい」という単純な発想は、ワーク二日目にして打ち崩されてしまったのである。

ハビタットのスタッフやホームパートナー、そして Mavel を始めとするフィリピン大学の学生との会話の中で、よく話題にされ印象に残っているのが、日本とフィリピンの経済格差について、日本がフィリピンを占領していたことについて、宗教について、神と愛について。ある人に言われた。“You look young. You seem not to have had any trouble at all.” 確かに私は食べ物にもお金にも苦労したことはない。何気ない一言だったかもしれないが、どこかに乗り越えられない壁のようなものを感じたのも事実である。また日本が犯した過ちや、宗教を持たないことに対しては、若者ほど寛容に受け止めているように感じた。そんな若者の無関心さは、もしかしたら世界共通なのかもしれない。

バナイでのワークは、毎日本当に楽しかった。初めのうちは、あまりに自分が無力で役立たずであることにフラストレーションを感じていたが、ボランティアの意味を再確認する良いきっかけとなった。「足手まといになるだけなのに、どうしてボランティアを受け入れるのか。」そんな私の疑問に、答えを与えてくれた人がいた。「あなた方ボランティアがいるおかげで、ホームパートナーも目標を持って働き、生活することができる。たとえ少しの助けであったとしても、彼らに夢や希望を与えることができる。あなた方の愛を、彼

らは必要としている。」普段は「愛」なんて意味を、真剣に考えたことはなかったが、二週間の間、特にワークの間、確かに「愛」の存在を感じることができた。バナイで出会ったホームパートナー達の笑顔は、特別きらきら輝いていた気がする。それが彼らの未来にある夢や希望のおかげであるのなら、そこに少しでも関わったことを、心から誇りに思う。ワーク最終日にホームパートナーの一人が言った言葉が、今でも忘れられない。「五年後に戻っておいで。村が完成して発展して、みんなが成長した姿を見て欲しいから。」 私は、またいつか、フィリピンに帰りたと思う。

## 白川 和亨

日本に帰ってきてもう2週間も経ってしまった。今でもワークキャンプでの出来事全てが、昨日の事のように鮮明に思い出される。思えば本当にあっという間の14日間だった。多分つらい事もたくさんあったのだろうけど、不思議なもので、今報告書を前にすると楽しかったことしか浮かんでこない。まあ唯一の苦い思い出といえば体調面の不良で、自分の中でかなり自信があっただけに精神的にもつらかった。あえてこの話題はこれくらいにしておきたいのだが、鍛冶先生をはじめ、メンバー皆が早く復帰出来るようにと励ましてくれたことがうれしかった。

1. フィリピンに来て10日目に訪れたアサンバでEco - waste managementを経験した。私は食べ終わったヤシの実を機械にかけてその後大きなドラム状の籠のようなもので繊維を分離していくという作業を手伝わせてもらった。なかなかの肉体労働で、特にヤシの実を機械に放り込むのは、ごみや虫どもとの格闘がかなり辛かった。時間は大して長くなかったのだが、暑さも手伝ってか多少疲れてしまった。逆に新聞紙や電話帳を破って袋に分けるという単純な作業で、破ってはいけない紙を破ってしまうというミスをしてしまいびっくりした。これらのプロジェクトはかなり先駆けのものらしく、ジョジョをはじめエンジニア達の意識の高さに感心した。その日の夜はジョジョと語り合っ、彼が妹思いのナイスガイだということが判明した。ちなみにジョジョはホームステイ先のルディととても仲良しで、ルディがサイトの皆にパパンと呼ばれて親しまれているということを教えてくれた。ジョジョ、これからも自分の夢に向かって頑張る。

2. アサンバでのホームステイだが、私はY村君と一緒にルディの家にお世話になった。一部のメンバーから羨まれるほど本当にきれいで素敵な家で、前日から金井君に脅されまくって心底不安だったのだがほっとした。ルディーは奥さんが香港へ働きに行っているため一人暮らしだった。子供もいなかったなので、絶対に息子と呼ばせてみせると誓った。初日は到着が遅くなってしまったということもあり、あまりコミュニケーションがとれなくて残念だったが、最後の夜は三人で川の字になって寝るという感動的な出来事でしめくく



ることができた。家が音楽教室だったということもあって、アサンバの自称F4と名乗る若者たちと一緒にギターを弾いたりダンスを教えたりして国境を越えることに成功した。アサンバの人たちは皆本当に素直で明るくて、多少疲れていた自分は彼らの純粋さに癒されまくった。中にはキヨミ姉妹やクリ坊主などといった多少デンジャーな暴れん坊達もいたが、持ち上げてやるときゃっきゃ喜んでいたのでやはりかわいかった。ホームステイは2日間ととても短かったが最高に充実した時間を過ごすことが出来た。ルディの家にとまる事が出来て本当によかった。ただ結局最後まで開かずの部屋をのぞくことができなかったことだけが心残りだった...

3. バナイでのワークで私たちメンバーが担当した仕事は、大まかに言うと1. 建築(主に穴掘り)、2. コンクリートブロック作り、3. 鉄曲げ(?)、4. セメント運びの4つだった。1の建築については、たった5日間という短い期間にも関わらず、現地のスタッフとあつい師弟関係を築きあげた男がいるので彼にまかせます。2のブロック作り。これはめちゃくちゃ楽しかった。作業自体が楽しかったというのもあるけれど、その現場の雰囲気大好きだった。セメントを型に入れて、上から棒や鉄板で叩きブロックの形にしていくというものだったのだが、その時々皆で掛け声を掛け合って、常に明るくて楽しい空気だった。まったく何を言っているのか分からなかったけど、とにかく真似をしていたら突然周りのおばちゃん達が笑ったり照れたりし出したので、きっと変な言葉を連発していたのだろう。時間はもちろん、熱帯地方ならではの、べっとりとまとわりつくような蒸し暑さや激しいスコールなんかもまったく気にならないほどとにかく楽しかった。彼らにかかったら辛い状況や労働もあつという間に楽しいものになってしまう。これはおそらく現在の日本人にはなかなか出来る芸当ではないし、これこそ人間の持つ素晴らしい才能の鍛冶先生もかなりはまっていたようで、珍しく無口になって作業に熱中していた。個人的にはこの現場で、フィリピンを代表するプレイボーイのニコ、世話好きで優しいレジナルド、永遠の常夏ボーイのピナップル坊やという親友が出来た。皆本当に良いやつで、今でも思い出したら泣きそうになってしまう。そしてふと横を見たら高橋名人が黙々とブロックを作っていた。あと毎回毎回現地スタッフの方々が食事や休憩場所、トイレなどあらゆるところに細かく気を配って下さっていたことに感動した。今回のワークキャンプは本当に素晴らしい経験だった。金井君という型破りな牧師と出会えた事、フィリピンの人々の優しさに触れられたこと、明らかに季節はずれなりゾートに行って謎のこまビデオを見せられたこと、スラムというものを生で体感できたこと、ゴミの埋め立て地を見学してフィリピンのゴミ問題の現状を知り、それについていろいろ考えられた事、チート、JR、ジュード、マベールといった個性爆発の皆と一緒に行動できたこと、そして何よりこのメンバーで14日間ワークキャンプに行けた事。今回のキャンプで感じたことは全て自分の財産でありこれからの人生にも活かしていきたいと思う。

## 鈴木 奈々江

フィリピン = おもしろそう。この単純な思い込みが私のこのワークキャンプ参加のきっかけとなった。途中こんな勢いだけでボランティア、しかも、治安のよくないフィリピンに言ってもよいものなのか。そして自分がまったく知らない人たちと2週間も生活をともにすることが出来るのか、不安だった。しかし、日本とはまったく違う環境の中で新しい自分を見つけられそうという好奇心が勝って行くことを決心した。

ワークキャンプでは日本には考えないようなことを考え、感じないようなことを感じ、いつもより自分のアンテナの感度がよかったように思う。日本に戻り落ち着いてきた今、自分が「変わった」と思えることが幾つかある。まずひとつに、フィリピンで実感した自分のコミュニケーション能力のなさを打開するため、自分から心を開き、さらに他人の表情や行動、その言葉一言一言に、その人の意思を汲み取り考えようとするようになったことである。ワークキャンプ中は、自分のことに精一杯でお世話してくれた人たちの事なんてまったくと言っていいほど考えていなかった。自分がこころを開いてないからなのに、どうして分かってくれないの、といつも他人のせいにしていたように思える。

二つ目に変わったことは、当たり前のことを当たり前にしようと思うようになった事だろう。当たり前のことというのは忘れがちになってしまうものだ。フィリピンの子供たちのあの一点の曇りのない笑顔。笑顔に感動したのはいつぶりだったろうか。大人たちにしても、まったく日々の貧しさを感じないくらい陽気で、底向けに明るく楽しい人たちだった。歌ってみたり、踊ってみたりいかに楽しく作業をするかという方法がわかっている、なるほどな、と感心させられた。子供たちといえば、彼らの元気さは尋常じゃなかった。少なくとも日本の子供たちと比べて数十倍も上だった。暴力的なパワーをこちらに発散させてくるような感じなのだ。これは、建設現場にいた子供たちよりも、ホームステイに行った村の、“家のある”子供たちの方がより凄かった。精神的なものと、栄養状態などが関係していると思うのだが、それを考えたとき妙に清々しいというか、嬉しい気分になった。というのも、私たちが手伝って作った家によって、建設現場にいる子供たちも、村に住む子供たちのようにさらに元気に遊び回れるようになるんだ！と感じられたからだと思う。彼らの役に立っていると肌で感じたのはそれが初めてだった。

このワークキャンプで得られたものは、この文章には納まりきれないくらい多く、イメージや、フィリピンに関しての思い込みもことごとく打ち砕かれた。私のこれかれからの課題は、どれだけの人にこの体験を伝え、フィリピンの現状を知ってもらおうか。そして、いかにしてこのモチベーションを保ち続けて次に繋げていくかである。出来る限り、この経験をこれからの生活に生かして行こうと思う。

## 鈴木 まりえ

1. リサーチプロジェクトではゴミをリサイクルする過程を実際に作業しながら学びました。そこではココナッツの実の殻から売り物を作るために、殻を機械で砕いて繊維にしたり、大量にある紙や新聞を5・6人で黙々とちぎったりしました。ホームステイをさせて頂いたアサンバにあった小さな作業場ではありましたが、リサイクルの過程が手に取るように分かりました。もう1つ印象的だったことは、新聞を細く丸めて小物入れやバッグを作る様子を実演して見せてくれたり、ボールペンやシャープペンシルの中に入っている細い透明な棒を使ってネックレスやピアスを作ったりしていることを紹介してくれたことです。そのようなリサイクル活動を推し進めている女性が「少し頭をひねればゴミもいろいろなものに変えられるのよ」といった言葉はとても心に響きました。話しの中でバナナの皮からスパゲッティやハンバーグも作れるというのは本当に驚きました。

2. 私が泊らせて頂いた家庭は、軍人のお父さんにお母さん、そして12歳の息子の3人家族でした。そこにお母さんの姪であるヘーセルという19歳の女の子と、どういう間柄なのか聞くことはできなかったけれどもおじさん2人が同居していました。家にはパソコンがあり、おじさんは毎朝電子手帳を使っていました。これは予想外なことだったので驚きました。他のメンバーの話を聞いてみると比較的裕福な家であったと思います。お風呂はシャワーがなかったけれども髪の毛を洗うためにわざわざお湯を沸かし、ぬるま湯にしてくれました。日本ではいつもパワー全開の温かいお湯が出るシャワーを使って髪の毛を洗っている私はひとすくいひとすくいバケツのぬるま湯を頭にかける度に用意をしてくれた家の人の気持ちが身にしみました。ただ髪の毛は短い方が良かったなと思いました。

1番よく話をしたのは短大生のヘーセルでした。彼女の実家は学校に通うには遠すぎるので、この家に同居しているとのことでした。とても勉強熱心でしっかりしていたのが印象的でしたが、やはり同い年だったので、盛り上がる話や悩みなど共通するものが多くありとても楽しかったし、刺激的でした。私達チームがホームステイしたアサンバは、コミュニティがものすごくしっかりしていました。今年は昨年とは違い、家を建てるお手伝いをした場所、バナイは村を作り始めたばかりで、私達チームが初めてボランティアに来たというような場所でした。アサンバを訪れて、バナイもこの場所のように多くの人が共存して子供たちの笑顔に溢れているような村にいつかなっていたら素敵だな、と思いました。

3. 私がこの宗教部主催のフィリピンワークキャンプに参加するのは今年で2回目です。実を言うと今年の夏は1人で国内を旅しようと考えており、ワークキャンプへの参加は頭の中にはありませんでした。それなのに今年、学生リーダーとしてフィリピンをまた訪れることになるうとは、私が1番予想していなかったことでした。チームリーダーの鍛冶先生から「学生リーダーとしてワークキャンプに参加してみないか」と誘って頂きましたが、自分にそんなに大役が務まるのか、という不安がありました。しかし昨年のワークキャン

ブを思い出して「行きたい」という気持ちがどんどん膨らみ、不安を打ち負かして結局行くことを決意しました。

学生リーダーとしてフィリピンワークキャンプに参加した2週間、私は自分が置かれている学生リーダーという立場を忘れて何度となく失敗し、チームリーダーから怒られることも多々あり皆に迷惑をかけ、自信をなくすこともありました。日本に帰ってきた今も私は学生リーダーとしての役割を果たすことができたのかと考えてしまいます。しかし私は昨年とは違う立場の学生リーダーとして参加し、行く前からは想像にも及ばなかったことを感じる事ができたのです。それは立場が変わることで違う「喜び」を感じる事ができたということです。フィリピンへ旅発つ前、私は自分が置かれている立場が変われば、おのずと昨年とは違う視点から物事を見るようになるだろうということは予想がついていましたが、「喜び」までもが変わるとは全く予想していませんでした。

昨年のワークキャンプは、私にとって初めてのことであったので見るもの聞くもの全てが新鮮であり刺激的でした。昨年の今頃書いた報告書の1番はじめには「大学1年生でこんなに素晴らしい経験ができて私はなんて幸せなの！！」と書いてあります。フィリピンから帰国して興奮冷めやらぬまま書いた様子が手にとるように表れていると、自分でも恥ずかしながら思います。

約90%の人がキリスト教徒であるフィリピンへ初めて行って、「宗教」というものに直に触れました。日本に居ては気にもとめていなかった「宗教」に対する価値観が自分の中から生まれ、またその事が少しずつ広がっていくことが昨年のワークキャンプで実感できたと同時にそういう新鮮な気持ちを失いたくない自分に会えたことが喜びでした。もちろん今年も昨年と同じように日本に居ては気づかないようなことに会うことができました。家を建てるに行くというプログラムの他にもゴミを拾って生活している人々を実際に見る機会がありました。彼らと直接話したわけでもなく、ある程度距離をおいて見たにすぎませんでしたが私から見た彼らは笑顔で楽しそうに仕事をしていました。私達が見たゴミ山は市によって管理されており、フィリピン全土に衝撃を与えたゴミ山が崩れ多数の死者を出してしまった2000年に起きた大惨事を2度と繰り返さないような仕組みになっていたように感じました。多分あの事故以来、市の体制も整ってきたのでしょう。大惨事が起きた場所でも、おそらく私が今回見たように人々は笑顔で楽しそうに仕事をしていたのではないかと思います。そのような表情を見ていると何か問題が存在していても人はその問題に無関心になっていくのでは、と感じました。このような場面を実際自分の目で見られたことはゴミ問題に取り組む姿勢、アンテナの張り方は確実に違うだろうし、日本に居ては意識しづらいフィリピンでのゴミ問題に少しでも出会えた事は私にとって大きな収穫でした。

では学生リーダーという立場を通して昨年は感じなかった今年の違う「喜び」とは何だったのかを述べたいと思います。昨年は家を完成させるという建設作業を通して、チームメンバーが楽しみ、無我夢中になっている姿を見てももちろん感ずるものはたくさんあった

し、共有するものもたくさんあったけれどもそれが自分の「喜び」とは結びつきませんでした。メンバーが子供の前で自分を出すことができたといって溢れる笑顔で無邪気に遊んでいる姿を見て嬉しく思い、コミュニケーションがとれないと悩んでいたメンバーがそれでもなんとか頑張っていて意思疎通を図ろうと努力している姿には脱帽。なにかにとりつかれたかのように黙々と土を掘り1つのことを必死になって取り組んでいる姿からはたくましさを感じ、常に問題意識を持って積極的にいろんなことを質問している姿はたのもしく思いました。そして明るくチームを盛り上げ、雰囲気を作ってくれたことはすごく心強かったし、建設作業最後の日に催される Farewell Party のために現地の人に喜んでもらえるよう、何度も何度も案を練って練習している姿には心の底からこみ上げてくるものがありました。ワークキャンプを通して何かに没頭し、何かが変わっていているチームメンバーを見たことが私にとっての「喜び」となったのです。私は初めて学生リーダーとして参加したこのワークキャンプからリーダーの辛さよりも喜びの方を感じました。それはもちろんチームメンバーと金井牧師の協力、そしてチームリーダーである鍛冶先生にずいぶん頼ることができたという甘えがあったからだと思います。しかし立場が変わることで「喜び」までもが変わり、立場が変わることで「喜び」が2倍になる。そのことを学生リーダーの役割を通して知ることができたのは私にとってこの上のない幸せだと、今感じています。

## 多井 裕子

1. 私たちが ASAMBA で作業を手伝わせてもらったのが、Eco-waste Management Center だった。ここではリサイクルできるものを集めてきてそれを分別したり、ココナッツの繊維を取り出して再利用したりしていた。私はシュレッダーにかけたココナッツの皮を繊維だけ取り出す作業と、乾いた繊維の目が細かいものだけを選びすぐる作業をした。繊維を取り出す方は悪臭というほどではないけれど独特の臭いがする中でのベルトコンベア作業で、私にはきつかった。会話をする余裕はなく、みんなただ黙々とやっている感じだった。

アサンバに Eco-waste Management の講義をしに来てくれた Dr. Milliora は、私たちがびっくりするようなものをリサイクルしていた。めんぼうの芯やストローでネックレスやピアスを作ったり、バナナの皮などから酢を作ったりと私ならば思いつきもしないものから新しいものを生み出していた。私は単純に「フィリピンの人はよく考えつくなあ」と感心していた。けれど、フィリピンのハビタットスタッフの Jude にそれを言うと、「これが彼らの仕事だから。そうしないと生活していけないから。」という答えが返ってきた。別にすごいことをしているわけではないのだ。軽い気持ちで言った私にとっても真剣な顔でそう答えた Jude の伝えたかっただろうことが、後になってじわじわと分かってきた。無意識のうちに、“日本の常識”を外国でも通じると思って話を聞いていた自分に気がついた。けれど、ここで聞いたゴミ問題の話の中で「どんなにいい技術があっても、根本の問題は人や政治だ」というのは、フィリピンだけでなく日本にも言えることだと思った。

2. 私がホームステイをさせてもらったのは、Roldan さんの家だった。家族は、両親と女の子2人、男の子2人の子供といとこの女の子1人の7人だった。ホームステイの家に連れて行ってもらい真っ先に感じたのは「えっ、ここ？」という感想だった。家は二階建てで、かなりの広さがあった。更にこの家には、テレビはもちろんのこと VCD やカラオケの器械、エアコン、洗濯機などが並んでいた。私が一体どんな家庭を想像していたのかと聞かれてもはっきりとしたイメージはなかったが、こんなに家財道具や装飾品が並んだ家を想像していなかったのは事実だ。それでも、トイレと風呂場(?)は同じスペースにあった。シャワーはなく、蛇口から貯めた水を桶ですくいながら体を洗うスタイルで、お湯は出なかった。日本人の感覚からすれば、装飾品やカラオケの器械を入れる前にトイレや風呂場を充実させるだろうと思ったので、新たな感覚に触れることができたと思う。

2日間のホームステイで一番話したのは長女のザイ(15)といとこのガーリーだった。フィリピンで大人気のスパゲティ・ダンスをマスターしたかった私は、真剣にザイに弟子入りしてしまった。二人は次の日私たちよりも朝が早いのに寝るまで話しに付き合ってくれたりした。携帯電話でメールを作る姿やプリクラを見てはしゃぐ姿はちょっと大人びた15歳と感じたけれど、夜、ザイが進学について話してくれた時は、私よりずっといろいろなことを考えているのだと感じた。今は安定した暮らしをしているようだけど、私がいらない経験をたくさんしてきたのだろうと感じた。フィリピンにいる間いろんな人から何度も言われたことだったが「いつか日本に行ってみたい。でもお金がないから行けないんだ」と言われた。フィリピンの人からすれば、物価・金銭面などで暮らしにくい日本から来ている私たちは、ザイたちにはどんな風に映っていたのだろう。2日間では分からなかったけれど、これから連絡を取っていくなかで少しずつ見えてくればと思う。そして私が一番気になるのがいとこのガーリーだ。どんな事情でこの家庭にいるのか私は聞くことができなかった。毎回家族の食事の後は食器洗いをしていたし、朝は誰よりも早く起きて家の掃除をしていた。昼間は一人で家にいた。タガログ語で喋っていたので何を言っているか分からなかったが、ザイたち子供と同じ扱いではなかったようにみえた。それでも家族みんなでテレビを見たり、お父さんが近所の人と玄関先で晩酌しているのを見て心が和んだ。日本ではなかなか見ることができない光景になってしまったのを淋しく感じる。

3. フィリピンのワークキャンプに参加するのを決めたとき、私は以前住んでいたという懐かしさとグループで何かをしたいという気持ちが強くあった。普段団体で何かをすることがなく、大勢だからこそ感じられる体験をしたいと思っていた。

ワークキャンプの大事なスケジュールである建築作業は、フィリピンが雨季だったのでほとんど進んでいなく、コンクリートを積み上げたり、ペンキを塗ることを想像していたのとは違ってた。作業中はみんなで歌を歌ったり話しをしながらできたので辛さも忘れることが出来た。休憩やお昼に準備してもらった食べ物はいつも豪華で、私たちが作業をす

ることができたのは支えてくれたたくさんの人のお陰だと心から思った。一緒に作業をした人たちはこれからその家に住む人なのだが、2時間かけて歩いてサイトまで来る人もいと聞いた時は驚いた。それでも私たちにいつも笑顔で声をかけてくれた。そんな姿に私は何度もまた頑張ろうと元気づけられた。笑顔がこんなにも人に力を与えるのだと感じた。最近の私は笑顔でいないことが多かった。もっともっと笑顔で日々を過ごそうと決めた。

私たちは以前スモークマウンテンと呼ばれるゴミ捨て場があったパヤタスと、現在のゴミ捨て場であるモンタルバンに行った。事故が起こり閉鎖されたスモークマウンテンはゴミの上に土がかぶせられ、今は緑の山みたいになっていた。その下には今もゴミがあるのだが、ぱっと見た感じでは山のように見えた。悪臭はまったくなく、トタン屋根の家が何件かあったがひっそりとした印象を受けた。モンタルバンの方は市が仲介しているということで多少の決まりができていたようだったが徹底されているわけではなかった。だがゴミ捨て場に住むことは禁止されているので、前の場所のように寝泊りしている人はいないようだった。ここでの稼ぎは、街での肉体労働の2～3倍の稼ぎがあると聞いて、ゴミ捨て場はなくなることはあるのだろうかと考えてしまった。臭いは確かに臭かった。この日もトラックに山積みされたゴミが次々に運ばれてきていた。雨の日ももっと大変なのだろうと思う。そこで働く人々は遠くからカメラを持った私たちに手を振ったりポーズをとったりした。勝手にイメージばかりふくらませていた私はそれに戸惑ってしまった。

私にとってのワークキャンプは、行く前に体験したいと思っていたのよりもっと原点に近いものを多く感じるものだった。笑顔、自分が置かれている今の生活、人と触れ合うことの温かさだ。人と触れ合うことにどこか冷めた気持ちを持っていて、素直に受け止めることが私はできなくなっていた。人に出会い、知っていくことはもっと素敵なんだと心の中から感じることもできた。私にとってはこれが一番大きな収穫かもしれない。また、“一人では小さな一歩で、大したことはできないかもしれない。でもみんなが集まればそれは大きな力になる。そしてとても大切な一歩であり、大きな一歩である”、これは先生から教わりこのワークキャンプを通じて感じることもできたことだ。

2週間ずっと一緒に行動を共にしてもらったハビタットのスタッフの方やジブニーの運転手さん、ホームパートナーのみんな、フィリピン大学を案内してくれたマーベル、みんなが最後は1つのチームになれたように感じた。みんながお互いを思いあって、心配したり楽しんだり。初めは私たち明学生同士ですら顔見知りではなかった人が2回の合宿と事前研修を経てここまで1つになれるなんて。こんな経験はそうできることではないと思う。このメンバーでワークキャンプに行けたことに感謝します。みんな本当にありがとう！

## 滝川 祐

1 . Eco-Waste Management Project このプロジェクトは、ごみを商品に変えていくことで、雇用・ZKK (ZKK とは Zero Kalat sa Kaunlaran の頭文字を取ったもので、このプロジェクトを担う NGO の団体名)の活動資金の創出等をしていく。ごみをごみとしてではなく、将来に可能性のある、豊かな産物として捉えるという発想の転換が、たとえばきれいな(ごみのない)まちを生むことにつながっていく。アサンバ(ホームステイをした村)では、ココナッツの皮を細かくする作業がされていて、最終的には束にして売っていた。何に使うのかを聞いたところ、'For plant'という答えが返ってきた。おそらく肥料になるのだろうと思う。村は昔、近くの川にごみを捨ててしまうことでごみ問題を処理してきた。ということは、当初は「問題」として浮上してこなかったのだろう。しかし、「問題」として認識されてきた段階からその処理に取り組み始めた。ごみ処理作業に村人を充てることで仕事を作り、さらに製品を作ることで現金収入も生んだ。これを支えたのがZKKである。ちなみに、私のホームステイ先の家族はここで働いていた。

私たちボランティアは小さい作業場で、黙々と単純作業を繰り返したわけだが、いつもはいったい何人でこの作業をこなしているのかは、今になって気になった。ちなみに、私たちが訪れたときは3, 4人の村人しかいなかった。このことが気になるのは、単に作業の大変さを思うからだけではなく、200世帯を超えるアサンバに対して雇用の面ではあまり貢献できていないのではないかと考えるからである。村の外では、工場で製品づくりがされていて、その一端を村のオフィスで披露してもらった。工場ではごみを造花からバック、酢までいろいろなものへ変えていくそうで、実際に目にした製品のいくつかには正直驚いた。ごみに新たな命を吹き込む作業それ自体は魅力的である。ただ、その概念的な魅力とは裏腹に、この作業は衛生の面からは決していいものではなかった。ごみ(特に、生ごみ)を扱うということは、ときに腐りかけ、虫が発生したものを扱うということである。このプロジェクトのキレイごとではすまない一面を経験したことは、別の角度からこのごみ問題を見るきっかけを与えた。

2 . ホームステイ先は母親と20歳の息子の2人暮らしであった。そのため、非常に落ち着いた2日間を送ることができた。逆に言えば、少し物足りない気もした。それは、その家族構成にも依るが、チームメンバーと2人ペアで泊まったことでコミュニケーションにそれほど一生懸命にならなかった自身の問題もある。それでも、近所のおばさんが来たり、母親が日本で働いているという少女が来たりと、訪問客が次々といて賑やかであった。

トイレでバケツに溜められた水をかけて体を洗うという経験は、ワークキャンプで訪れるフィリピンの家庭では一般的なことである。その経験は昨年もできたはずであるが、実を言うと私は昨年のワークキャンプにおいてはそれをしなかった。今年、その経験をできたのは2泊であったということもあり割り切っていたことと、だいぶ自分自身フィリピンに慣れてきたということがある。昼の休憩時間に、ホームステイ先に戻ったときのことで



ある。家にどこかの会社が訪問して母親のシマと話をしていた。その中にはプログラミングを勉強しているという大学生もアルバイトとして来ていた。そのときは少なくとも仕事という仕事はしていなく、もっぱら荷物持ちのようなことしていた。上司が彼に許可を出した後は、ふたりで少しの間話をした。彼は昼間、そうした仕事をして、学校へは夜に通っているという。おそらく自分の学費を稼いでいるのだろう。ただ頭の下がる思いがした。

携帯電話の普及率には驚いた。ホームステイ先の家族は村の中でも決して裕福なほうではないと思われたが、それでも携帯電話を所有していた。去年の経験から私は、携帯電話を所有していることはそれ自体、フィリピンではひとつのステイタスなのではないかと感じていた。しかし、今年は首都マニラの近郊であったということも関係しているのだと思うが、いたるところで携帯電話を目にした。もちろん電話線を引くよりもコストがかからないということもかなり関係しているのだろうと思う。<sup>2</sup> 泊のホームステイではあったが、夜は村のオフィスに飲みに行ったり、コミュニティ・ナイト（交流会）に参加したりと外に出る機会も多く、あっという間に過ぎてしまったというのが正直な感想である。

3. 「家作りのボランティア」。これが、ワークキャンプのキャッチフレーズである。しかし、実際どの程度「家を作る」こと自体に貢献できたのかと言えば、非常に些細なものであった。家の完成を見ることができなかったことは、そのことを意識させた。さらに、今年のワークには、ボランティアが作業をすることの効率の悪さを露骨に感じさせるものもあった。雨季ということもあり足場はよくぬかるんでいた。そのため、土掘りの作業では思うように足に力が入らない。しかも、その一方で土は水分を含み重くなっているため、非常に力が入るのである。このジレンマを解消する手立てなど分かるはずもなく、ただ黙々と作業を続けたがとても貢献というほどのことができたとは思えない。

私はワークでは主に家の土台作りの手伝いをした。土台作りとは要するに前述した土掘りのことで、家の淵をシャベルで掘るという地味な力仕事である。しかし、非常にやりがいはあった。それは、ひとつには、掘っただけ地面は深くなり、仕事の成果や進み具合を感じながら作業ができるからである。もうひとつには、この作業が家作りのすべてのスタートだからである。土台とはそういうものである。私は去年もこのワークキャンプに参加したのだが、そこではこの土台作りはすでに終わっていた。そういう意味では、2年越しで、1軒の家を建てたような気もしている。

作業であまり貢献できない私たちができたことは、ワークキャンプに参加する際に払った献金によって、1軒の建設にかかるコストを下げたことである。このことは実際問題として非常に喜ばれることである。あと、村人ひとりひとりが家の建設のために費やす100時間以上も続く作業の中に、踊り（「ソーラン節」）や歌（「ふるさと」、「クンバイヤ」）を披露することで、楽しいひとときをもたらしたことも私たちの貢献できたことである。

ワークキャンプで出会うフィリピンの人たちはとにかく心がオープンである。目が合えば、お互い目で「やあ」と合図を送って、それだけで打ち解けてしまうような、そんな人

たちである。ホームステイをしたアサンバで、聞こえる音楽に誘われるままに足を向ければ、誕生日を祝っている家庭に招待されるということもあった。そうした環境が人を受け入れるオープンな心を育てているのだろう。また、彼らはいつも陽気でそうした生き方をすでに子供のときから心得ている。フィリピンにも遊園地はあるが、そこで遊ぶよりもずっと楽しい時間の過ごし方を彼らは知っているように、私には思えた。彼らにしてみれば、遊園地で遊ぶという選択肢など用意されていなく、自分たちのできる範囲内での遊びをしているだけなのかもしれない。そうであるならば、私は彼らに向かって、「それでも、いい生き方をしているよ」などとは言わないし、言えない。ただ、私自身は彼らと過ごした時間に、素直に人間らしさを感じ、そして居心地のよさを満喫したのである。それは、私の生活の中にそうした時間が不足していることの裏返しなのだと思う。

フィリピンではこのような人の温かさや明るさを感じたが、一方で現実問題としての経済的な格差も感じた。私が主に感じたのは、フィリピンと日本の間にある格差よりも、フィリピン国内における格差についてである。それほど裕福な村ではないアサンバにおいてもはっきり経済的な格差は見られ、それは家の内装に加え、たとえば門のつくりにも反映されていた。つまり、お金を持てば持つほど頑丈で鍵のかかった門が取り付けられていくのである。別にその家の人たちの心が閉じているわけではないのだろうが、物質的な距離が心にも距離を生んでいくことはたしかである。少なくとも、そういう家に見知らぬ日本人がいきなり招待されることはないだろう。アサンバで見られた格差は、その開きを大きくしたかたちで超高層ビルと壊れかけた小屋のような家々が混在するマニラのまちに現れた。人に焦点を当てれば、アメリカ仕込みのショッピングモールで優雅に買い物をする人もいれば、大雨の中はだしで物を売る子供もいた。ただ、貧富の差が見られたこと自体は、事実として受け止めればいいことで、本当はそれほど驚くことではない。むしろ、私にとって驚くべきは、ごみ捨て場でごみを捨てて生計を立てている人たちが、私たちの向けたカメラにポーズをとるだけの余裕を持って生きていたということである。「経済的弱者はかくあるべし」という偏見を見事に打ち砕かれた出来事である。彼らの見せた余裕はどこから来るのだろうか。お金をある程度持つことは、衣食住という生活の基礎を保証する。そのことは結果として、心の余裕につながるかもしれない。しかしながら、「頑丈な門を取り付けること」が、直接心の余裕を保証することはない。そもそも人の温かさや心の余裕と、経済的に豊かであることとは切り離して考えるべき次元のものだったのだと思う。

ワークキャンプの中で、多くの時間を過ごしたハビタットの村に生活している、あるいはいままさに村を作ろうとしている人たちは、仕事を持ち、家を持ち、そしてともに村を作り上げる隣人を持っている。そういう意味で、非常に物持ちのいい、「豊かな」人たちである。出会う前は私にとって村人たちは、助けるべき対象として存在していた。ワーク、ホームステイを通して彼らは「忘れられない」存在として、非常に具体的に私の中にいる。助けるべき対象であることに変わりはないが、それは多くの場合、家の建設にかかるコスト面での話である。ハビタットとの契約が済み、家の建設がスタートすれば、彼らの「豊

かな」生活はいよいよ始まる。私はいつか、この「忘れられない」村人たちの名前や彼らとの交わした言葉を、ふと忘れてしまうかもしれない。それでも、私の中で生き続けるものがあると感じている。それは、手を差し伸べるべき人たちがどこかにまだたくさんいるということである。その人たちはフィリピンで出会った村人たちから思い浮かべることのできる、まだ見ぬ人たちである。彼らもまた、やはり私が出会ったようなすばらしく陽気な人たちであろう。これはワークキャンプに参加する前に抱く想像ほど抽象的なものではなく、もう少しの確信をもって言えることである。私はそうした人たちとの出会いを何度でもしたいと考えている。また、昨年や今年の実験をいろいろな人たちに伝え、私の話に耳を傾けてくれた人たちにも是非このような出会いをしてほしいと考えている。出会うことで彼らの「豊かさ」を分けてもらうのではない。お互いの出会いの中に、オリジナルの「豊かさ」を生み出すのである。「豊かさ」は前向きな出会いの産物であり、ワークキャンプはそうした生産性のある現場であった。

## 伊達 佳奈

1. 私たちのホームステイ先のアサンバでは、ゴミを減らすために独自のプロジェクトを立ち上げていました。ココナッツの殻（ゴミとなるもの）を購入してきてそれを加工したり、紙に留めてあるホッチキスをはずして分別するなどして、新たな資源として売るので。つまり、ゴミを利用してひとつのビジネスを行っているのです。日本と違い、政府がゴミの分別やりサイクルを活発に行わないフィリピンにおいて、アサンバ地域内でのゴミのリサイクル活動は、単にゴミを減らすというだけでなく、雇用の場も提供しているという点で感心しました。ただ、話を聞くと、そこで働く人々の、仕事に対するやる気があまり見られず、ときには仕事をさぼって家に帰ってしまうこともあるそうです。コミュニティ内で運営されるリサイクルビジネスという点では感心したけれど、そこで働く人々の管理という点ではまだまだ改善していかなければならないことが多々あると感じました。たくさん仕事をこなせば、その分さらに仕事は回ってくるし、給料も増えます。そういった良い循環を生み出すまでにはもう少し時間がかかるのかな、と感じました。

2. トイレを借りた時のことです。二匹のゴキブリみたいな大きい虫が目に入り、その時トイレに入ったことを軽く後悔しました。しかし、どうしようもないので、できるだけ虫たちを刺激しないように静かにそしてすばやく用を済ませ、流すために桶から水をくもるとしたとき、私は手酌にとまっている三匹目のヤツを見つけてしまいました…。もちろん水を流すこともできず、虫が手酌から移動するまで10分近くトイレの中にもりつきりでした。無力な自分を感じたひとコマでした。

私のホームステイ先は、母・子ども（15歳、7歳）祖母の4人家族でした。お母さんは当サイトのスタッフの方で、私たちのためにご飯を作ったり、いろいろな面でお世話をしたりしてくれました。家は工具店で、お兄ちゃんも学校から帰ってくると店番をしたりし

ていました。そのお兄ちゃんは音楽が好きで、CD が何十枚も積み上げられていたので、たくさんもってるね、と話しかけると、これは全部お父さんのだ、とおしえてくれました。彼のお父さんは数年前に亡くなってしまったそうで、そのせいか他の家庭に比べると家の内装はあまり手がつけられていませんでした。しかし、CD コンボやテレビなど一見高級そうなものもたくさんあり、思ったより豊かな生活を送っていると感じました。

初日は家に着くのも夜遅く、あまり話もできないまま寝ることになり、ホームステイにかなりの不安を感じていたけれど、翌日、お母さんの弟も遊びに来て、私たちも写真を見せたりしながら、夜12時、1時近くまで話すことができました。話の中で、日本人はタバコの吸殻をちゃんと捨てるけどフィリピン人はマナーがなっていないと言っていました。また私がマニラはすごく発展していると言うと、大きい都市だけどマニラはとても汚い、と自分たちで非難していました。フィリピンの人々も国のゴミや排気ガスなどの環境問題は深刻に受け止めているようでした。国民一人ひとりの問題意識が国を動かしていくと思うので、数年後、フィリピンがそれらの問題に対しどれほど取り組んでいるか楽しみです。

3. 「コミュニケーションの手段は言葉だけじゃないよ。」その事を教えてくれた仲間から感謝しています。想像はしていたけれども、わたしは言葉の壁にぶつかり、フィリピンでの生活3日目くらいから早くもギブアップ気味でした。日本人にとってもフィリピン人にとっても、英語は母国語ではない。同じ立場なのに、むこうからの問いかけに思うように答えられない自分に、もどかしさと劣等感を感じていました。

そんなわたしも、子どもたちといるときは言葉なしで遊ぶことができたため、思いっきりはしゃぐことができました。気分的にも楽だったし、とても楽しかったのですが、現地の状況などを聞いたりすることはできなかったので、その頃のわたしにとって毎日心から満足できるものではありませんでした。でも、わたしは言葉にこだわりすぎていたのかもしれない。笑いかけたり、泣いたり、歌ったり、手をつないだり、抱きしめたり。それら全てがコミュニケーションである。コミュニケーションの手段は言葉だけではない。わたしは旅の終わりになってやっとそのことに気づかされました。それを知ったとき、私の心の中に立ち込めていたどんよりした雲のようなものがスッとなくなったような気がしました。それまで否定的に見ていた自分の行動が肯定的に見られるようになりました。わたしも自分なりにちゃんとコミュニケーションがとれていたのです。友人の言葉で、わたしの<sup>2</sup> 週間の過ごし方は決して無駄なものではなかったのだと思えるようになりました。

わたしはこの旅で、かけがえのない友達に出会うことができました。悩みを一緒に共有してくれた友達。いろんなヒントを与えてくれた友達。一人で解決できないことでも友人の力を借りることで解決することが出来ました。わたしが今回のワークキャンプで学んだことは友達の大切さであり、人との出会いは自分の成長にもつながるということです。わたしは今回の経験から今まで以上に友達とのつながり、人との出会いを大切にしていき、自分も思いやりを持って人と接することを心がけていこうと思いました。

## 丸谷 由理

1. 「Eco-waste Management」では、私は1日目にココナッツを運ぶ作業、2日目に紙を引き裂く作業をした。1日目の仕事は、ただただ必死に仕事の効率を下げないようにと働いてただけで、何を学んだかといえば、「リサイクルというものはとても手間がかかる」ということだけであった。しかし、2日目に「Eco-waste Management」の開発者の人が話をしてくれたのはとても参考になった。例えば、ビニール袋でローブを作ったり、飲み物のパックで鞆を作ったり、新聞紙でかごを作ったりするというリサイクルは、簡単に出来そうなので、日本でも取り入れられたらよいのではないかと思う。その後、昨日と同じような作業を行ったのだが、そこで、私達は裂いてはいけない新聞紙を裂いてしまうというミスをしてしまった。裂いてしまうと高く買い取ってもらえなくなるそうで、自分達のリサイクルに対する知識の無さを改めて思い知らされた。日本でも、今、リサイクルやゴミの減量などの話がいたるところでできてはいるが、それを実行している人は数少ない。しかし、フィリピンではこのようなリサイクルをしている人がたくさんいるらしい(その割にはゴミの分別がされているようには見えないのだが)。リサイクルはみんなで作らないと意味がないと思う。そのやり方を広めていくのも大切な活動なのだなと「Eco-waste Management」で学んだ。リサーチプロジェクトに対して思うことは、結構受身になってしまったので、もっと自分自身で研究してから、説明とかを聞いていけば、もっと意欲的に参加できたのではないのかと思う。

2. ホームステイをしてまず驚いたことは、家が二階建てだったこと!!!想像していた以上に設備や家具(カラオケができるテレビがあった!!!)が整っていて、全くと言ったらうそにはなるけど、それほど抵抗も無くそこで生活できたような気がします。次に驚いたのは、お風呂でした。もちろん予想通り、シャワーなんてものはありません。見たところ、体を洗う場所が見当たらないので、「どこで体を洗うの?」かと聞いてみたら、...それはトイレの中でした。日本のトイレの個室を想像して下さい。その大きさのトイレに、水の入った樽が二つ置いてあって、それをすくって体や頭を洗います。こんな体験日本にいたら絶対できない!!!とっても貴重な体験でした。

ホームステイで楽しかったことは...正直言うと、私はあまり家族と話す機会がもてなくて、家族とそれほど交流をしていません。今になってすごく後悔しているのですが...。ホームステイ初日は夜遅い時間だったこともあり、家の人心配して「早く寝なさい」と言ってくれるので、30分ほど話をして寝てしまいました。2日目は夜までメンバーと一緒にいて、帰ったら、家の人全然いなく(私のホームステイ先は夜になっても家族全員がそろわなかった)、誰とも話すことも無く、寝るしかありませんでした。それでも別れ際には、皆「手紙ちょうだいね」とか「また来てね」とか言ってくれるので、本当に、もっと話す機会を持てばよかったなあと申し訳なく思いました。その分は手紙で取り返していこうと思います。これはちょっと笑い話ではあるんですけど、私のホームステイ先には女の

子が4人いて、その内の3人がすごく私達のメンバーのカズが大好きで、最後のお別れの時、その3人は皆カズのところについてしまいました…。ちょっとカズに嫉妬したり、しなかったり。そんな感じのホームステイでした。チャンチャン。

3. もうフィリピンから帰ってきて2週間が経とうとしている。私がフィリピンに行こうと決心したのは7月に入ってからだ。それからの2ヶ月というのは、なんともあっという間であった。今フィリピンでの生活のことを振り返って考えてみると、いろんな事をたくさん見て感じて、それについていろいろ考える、という毎日だったような気がする。今までの人生で(たった18年しか生きてないが)、こんなにたくさんの事を真剣に考えたことがあっただろうか。それくらいフィリピンでの生活は私にとって、人生の転機と言ったら大げさではあるが、とても大きく貴重なものとなった。

フィリピンはひとつの景色に「豊か」と「貧しい」が混在している国であった。新宿のような高層ビルが建っていると思えば、その横に簡素な家(住宅といえるのか)がある。その景色を見た瞬間に、「ここは日本ではない。フィリピンなんだ。」と実感することが出来た。その時から、フィリピンは私にいろんな事を学ばせてくれた。例えば、バスの中からの景色やスラム、ゴミ捨て場など。特に私が一番いろいろな思いをめぐらしたのは、やはりワークの時間だった。「家」を建てることによるサイトの人々の、夢・将来に対する期待...そういう彼らの前向きな姿勢が、ワークを一緒にしている間、毎日感じる事ができた。私はそんな彼らの夢や希望の実現に、「家造り」という形で一瞬でもかかわることができて本当にうれしく思う。夢や希望をもっている彼らは、本当に素敵で、世界中の誰よりも「生きて」いる。「家」は彼らに将来の夢や希望を与えている。私はワークをしてそう思った。彼らと出会えてほんとうに良かった。彼らの笑顔が本当に素敵で、人ってこんなに素敵な笑顔ができるんだ...そう思った。彼らは私にいろんなものを与えてくれた。彼らは私に「生きる」ということをみせてくれた。そう思うと、私は彼らに与えてもらってばかりだ。私は彼らに何を与えることができたのだろうか...それはわからない。それは物質的なものじゃないはずだから...でもこれだけは自信を持って言うことができる。私たちは彼らの夢を実現するために助け合う「仲間」なんだ、ということ。

日本に帰ってきて、「何か変わったね。」と言われることが多くなった。自分ではあまりわからないものだが...。ただ、私はフィリピンにいる彼らに負けないように「生きて」いこうと思う。そして、あのサイトの「家」が完成したら、必ずまた彼らに会いに行く。そこで自信を持って、私も「生きて」いるんだ!!ということをお話したい。というか、私が彼らを見て思ったことを、今度は彼らに見せてあげたい。「生きるってこんなに素敵なんだよ!!!」「皆もこんなに素敵なんだよ!!!!」サラマッポ!!!

## 吉村 悠

1. ココナッツを砕いて繊維を取り出してクッション材にする工場で働いた。恐ろしく屈辱な単純作業か、気持ち悪い幼虫や虫のいるところに手を突っ込む仕事しかなかった。それで労働者は一日働いて200円ほどしかもらえない日もあるらしい。日本では「経済的に差がある」と簡単に言ってしまうようなことだけど、現実を見るととても申し訳ないような、悲しい気持ちになった。その工場で働いている人に親切にしてもらったけど、何もしてあげられることが思い浮かばなくて悔しかった。お金を渡せば一人はしばらく助かるかもしれないけど、足りてない人は他にも数え切れないほどいる。そんなレベルの問題じゃないことはわかる。また、機械を提供することで働き手が必要となるような、先を見据えた支援は良いと思ったが、やはり賃金が低いのではないかと思わざるを得なかった。

2. 僕はルディさんという比較的生活水準の高い人の家でのホームステイだったので、その内装の豪華さと清潔さは想像していたものと大きく違っていた。しかし、便器のそばでバケツの水を汲んで体を洗うことは僕にとっては初めての経験で、唯一抵抗のあることだった。ルディさんは52歳で結婚したが、奥さんが香港に働きに出ているので、ホームステイ時には一人暮らしだった。そんなこともあり、僕らが来たことをとても喜んでくれていた。朝は朝飯の世話から、夜は遅くなったら集会所まで迎えに来てくれる、というほどの世話好きで、少なからずホームステイに不安を感じていた僕らには大きな救いだった。

日本に帰ってきてからルディさんから手紙が届いた。英語があんまり話せない人なのに一生懸命英語で書いてくれたと思うととてもうれしい。「Dear my son」と書いてあったが、本当に向こうでは息子のように大切にしてくれてとてもうれしかったのを覚えている。

3. 『このワークキャンプに参加して本当に良かったです!!!』この一言に尽きてしまってもいいと思うけど、それでは報告書にならないのできちんと僕の見てきたフィリピンについて報告しようと思います。この感想ができるだけ多くの大学生の目にとまって、何か感じてもらえれば幸いです。

フィリピンに行く前、僕はスカベンジャー（ゴミ拾いで生計を立てている人）の生活を描いたドキュメンタリー映画を二本見ました。そこにはその地域に住む人たちの生活の過酷さが描かれていました。本物の死体やゴミ拾いをする幼い子どもなど、あまりに僕らの現実からかけ離れ過ぎていて、僕は現実感なくその映像を見ていました。もっと言ってしまえば「作り物の恐怖映画のほうが怖いな」と感じてしまうほどの現実感のなさでした。外国に、特に日本とはかけ離れて悪辣な生活環境の国に行くとき、この「現実感」というものは大切だと思います。日本にいても、話で聞いたり、映像で見たりする機会はあると思います。しかし、それでは実際行った人と圧倒的な現実感の差があるでしょう。今回行ったことで、少なくとも僕はフィリピンの現実を五感で感じ、誰の解釈も加えられていないリアルフィリピンを見ることができました。

話を戻すと、リアルフィリピンは映画ほどショックな世界には感じられませんでした。予想以上にひどかったといえば、街全体がゴミ箱のようで、そこら中がゴミであふれ、車で通るだけでとても臭かったこと、上下水道がきちんと整備されていなかったこと、道路がでこぼこで交通量が多く、排気ガスがひどかったこと、とまあそのぐらいのものでした。ボランティアという立場も関係しているのかもしれませんが、多くの人が陽気に話しかけてくれて、親切にしてくれるので、僕としては全体的に過ごしにくいこともなく、良い印象のほうが強いです。けれども、僕らはたった2週間だけしか滞在せず、そんな短期間ではお客さんとして扱われたらろうし、現実を見たといっても表面の部分しか見ることが出来なかったのかもしれない、ということは忘れてはいけないと思います。

ワークについて、まず、このキャンプはワークキャンプであり、「ハビタット・フォー・ヒューマニティ」というNGOを通して行われているので、ワークが本来の趣旨です。僕はきっかけとしては、どちらかというフィリピンに行きたくてこのキャンプに参加したので、メインのワークがどのような趣旨で、何をするのか、といったことは知りませんでした。六月頃の研修会でフィリピンに家を建てに行くと言ったとき、行くのをやめようかと悩みました。なぜなら、家を建てることに関してド素人の日本人がフィリピンに行って建設作業の何の役に立つのだろうか、と思ったからです。さらに、僕はいくつか、いわゆるボランティアというヤツをやっていたのですが、そのころ友達から「ボランティアなんて偽善じゃん。」と言われたことがあって考えるとこもあり、やはり家を建てに行くって貢献するところは少ないから行く必要はないのではないか、と思いました。

ボランティアは日本では1995年の阪神大震災以降、その勢いに火がついたと聞きますが、そのボランティアブームのようなもののために、より幅広く、一般的に身近に認知されるものとなったと思います。その発生については詳しくは知りませんが、VOLUNTEERという英単語の訳語から、「自発的」、「奉仕的」といった言葉が連想されます。「奉仕」という言葉は日ごろ「無料奉仕」、「社会奉仕」などという使われ方をしますが、「献身的」や、「見返りを求めない」といった意味を持つ言葉だと思います。そのため、「ボランティア」の発生には「キリスト教的愛」が関係しているだろうと考えられます。しかし、その「誰かのために」という気持ちが、今の日本で「ボランティア」という言葉に直結しているかと言えば、おそらくそうではないでしょう。前置きが長くなってしまいましたが、僕にとってのボランティアも「誰かのために尽くしたい」という気持ちに因るところは少なく、「自分の経験になるだろう」と思って漠然と始めたのがきっかけで、実際その経験から得るものは多く、ハマってしまったという感じです。僕の場合だけでなく、ある本に載っている調査によると、ボランティアをやっている人間の考える「ボランティアの定義」として、「得られるものがある」とか、「関係性の形成」などといった自分にプラスに作用するものと捉える意見は少なくありません。僕もやっぱりそういった、自分の能力を社会に活かす場であると同時に、生涯学習的な学びの場である、という捉え方をしています。そのような考えもあり、僕はフィリピンという、日本とは生活環境の大きく異なる



場所を直接見ているいる感じる事が、フィリピン行きの最大の理由と考えました。たぶん、他のメンバーでもワーク以外」外のところに重点を置いている人はいたと思います。そして、それはまったく悪いことではないと思います。

今、漠然とボランティアをしてみたいという人は少なくないと思いますが、その人たちの多くは、ボランティアによる自分の成長に期待しているのだと思います。僕にとって、海外でのボランティアは予想以上に得るものの多い経験でした。ですから、「何かボランティアをしたい」という人で、ヒマとお金がある人は、旅行とは違う、こういったワークキャンプに参加することをお勧めします。ちなみに本当にワークに重きを置いている人もちゃんといました。某4年生男子は周りの人が本気で感動するほどワークに熱心でした。労働するだけで人の心をあんなに揺さぶる人は、僕は他に知りません。

そして、これが僕にとって一番大切なこと、それは、2週間同じメンバーと一緒に暮らした、ということです。行く前に研修会は何度かありますが、都合が合わず、全員が集まることは一度もなく出発日を迎えた僕たちは、ほとんど「顔知ってるけど名前がね〜・・・」というような関係でした。そんなメンバーが1日中一緒にいるので、最初の2・3日は気を遣いあってぎこちなく過ごしました。ワークが始まると、みんな必死になって、落ち込んだり、泣いたり、超笑ったりしながら過ごして、互いに自然と心の垣根を壊していきました。そのうち、体調を崩す人や入院する人が出だして、何の下心もなくその人たちを心配してる自分がいたりして、それには自分のことながら感動しました。私ごとだけど、僕はフィリピン行く前はほんとに自分のことしか考えられず、それでいいやと思っている人間だったと思います。でも人を好きになると自然とその人を心配できるんだってことがわかり、日本でももう少し人を理解しようと努めれば、もっと好きな人が増えて、さらに自分を変えていけるだろう、と考えられるようになりました。そして帰る頃にはみんなが大好きになってしまい、その後、日本に帰って2週間ぶりに一人になったときは、めちゃ寂しくて涙が出そうでした。出なかったけども。 という感じでおそらく伝わったでしょう。始めにも言ったのですが、やっぱり僕の感想は『このワークキャンプに参加して本当に良かったです!!!』ということなのです。

## フィリピンワークキャンプに参加して

### 学院牧師 金井 創

今年二回目となったフィリピンでのワークキャンプ。今年はリサーチプログラムも加わって2週間という長さになりました。メインの家作りについては様子が昨年とはずいぶん異なっています。昨年は建築途中の一軒を担当して完成までこぎつけ、ハウスデディケーション（祝福と引渡し式）も経験できましたが、今年の現場は野原に作業小屋が出来たばかりで、家はまだ一軒も建っていません。そこで私たちが行った作業は基礎となる穴掘りから。平行して鉄筋加工、セメントブロック作り、砂運びといったようなものです。

宿舎となったフィリピン大学ホテルからジブニに揺られて50分。遠さもさることながら、途中の排気ガスのひどさで、鼻の中が真っ黒になります。日本でとくに車検が切れた車などが輸出されてフィリピンでは現役で走っている場合もまだあるので、環境汚染はひどいものだと思います。

私たちが作業した現場は、ルソン島ケソン市郊外のロドリゲス市に属する地域で、市の支援もなされて家作りが始められたところ。すぐ近くにはゴミの集積場もあって日に数百台のダンプカーが行き交います。

そこで私たちはやがて出来上がった家に住むことになる人たちと共に5日間各種の作業を行ったのです。おぼつかない手つき、腰つきで働く私たちは地元の人からすれば助力よりむしろ足手まといにしかならなかったのかもしれない。彼らだけで作業したほうがよほどはかどるでしょうに、私たちの面倒を見、技術を指導し、忍耐強く待っていてくれた彼らに頭が下がります。特に私は新記録達成。それはブロック作りです。鉄枠に原料となる砂・セメント・水が混ぜ合わされたものを詰め、よく押し固めて最後に枠を外すのですが、うまくいかないとその段階で形がくずれます。失敗につぐ失敗で、やっとうまくいったのは9個目でした。この才能はないと思い知らされた作業です。

地元の人から純粋に戦力として期待されていたのは、最後まで穴掘り現場から離れなかった唐澤君ぐらいでしょうか。フィリピンの9月は雨期ですから、連日雨が降ります。すると穴掘り現場は膝や時には腰まで水と泥に浸かっての作業となります。それを嬉々として（まわりからはそうとしか見えなかった）やり通したのが彼です。体力のない私はもっぱら記録のために写真を撮りまわっていました。

ただ、私たちの存在がこの地域に与えた影響が二つあることを教えられました。一つは私たちのような国際ボランティアが働く姿を見て、地元の人たちが勤労意欲を持つようになったということ。彼らもまた意欲をもって働けば生活の向上と、将来の夢を描けるのだということこそそうした出会いから彼らが自覚したのです。もう一点は、私たちが入った地域は観光地でもなく日本人はまず行かないところです。そこに住む年配の人たちにとって私たちは2回目に見る日本人でした。1回目とは第二次大戦中の日本軍です。日本軍はフィリピンでも民衆に対して過酷な仕打ちをしました。ですから日本人に対する印象はあま

りよくありません。しかし、私たちの存在によって彼らの見方が変わったのです。「かつて日本人は悪いことをしにここに来た。でも今度は良いことをしに来てくれた」ということで、実際の役にはあまり立たなかった私たちですが、ボランティアとしてそこにいることが人々の日本人観を変えるほどの出来事だったという事実には打たれました。

このワークキャンプにチャプレンとして参加した私の勤めの一つは、日々の祈りと何回かのディボーション（短い礼拝）でした。学生たちは食事のたびに祈りを聞き、また礼拝を共にしたのです。祈りのある生活はいいなと言ってくれた学生もいて、それは嬉しいことでした。私にとっては現地で共に過ごした2週間だけでなく、その後も彼ら一人一人のことが祈りの課題となりました。短い間でしたが彼らの人生や、将来の夢、今の不安や様々な思いに触れた者にとっては、全員がかけがえのない友であり仲間です。参加者お互いにとってもそうでしょう。ボランティア経験と貢献を果たしただけでなく、異文化体験とさらに多くの友を与えられた2週間だったのではないのでしょうか。

## 「東南アジア青年の船」の青年との交流会でのスピーチ

2003年10月15日 鷹津 絵名

My name is Ena Shimazu. I am a senior student of the English Department of this Meiji Gakuin University. I am so glad to have a speech here and share my experience with all of you. At first, let me explain briefly about our members and activities again. We had 21 members that joined the Work Camp in Philippine, Prof.. Kaji who is the team leader and Rev.Kanai who is the chaplain of the University, and 19 students. We have stayed in the Metro Manila area for two weeks. We spent five days in building houses as volunteer work.. In the rest of day, we had city tours, school visit, short trip to a lake resort, home stay, and other work at the eco-waste management facility.

There were two questions that I was always asking myself during the work camp. What is volunteer work? What is poor or rich? I also often discussed those topics with some members, but we could not find right answers. About three weeks have passed since I came back from the Philippines now, and I think I could get my own answers for the questions.

What is volunteer work? I thought the volunteers should help somebody, work hard and bear fruit. In fact, I could not do anything and I felt I was so powerless and worthless. For five days, we were working at a Habitat Village, BANAI, with future householders, whom we called “home partners. “ It was my first time to see the construction and to do physical labor. On the first day at the site, a home partner gave me a big shovel and he said, “You dig the ground like this.” I could only scoop some soil out, however the home partners were always smiling and teaching me how to dig again and again. It was obvious that it is much easier and faster to do all by themselves. And I doubted, “Don’t I bother them? Do they really enjoy working with us?” One day, a local Habitat staff gave me the great answer; he said, “It is not important how much you work for them. The home partners know that you came here to help them and you try to understand them. They

can have their hopes and dreams, because you are here.” I was so impressed by his words, and realized that the most important thing for the volunteer work is to understand each other. After that, I tried to enjoy not only working but also talking with them. Then, little by little, I could find what they want us to do. Now I think getting close and trying to understand the others are the keys for volunteer work, as well as international cooperation.

The next question is that what is poor and what is rich. I still remember the big smiles of children, and the hospitality of adults in the Philippines. They looked so happy and pure comparing to Japanese people. Sometimes they said to me; “You must be rich because you are Japanese.” or “We are poor and we don’t have enough money.” I was so confused and I did not know how I should answer them at all. I used to think if I do not have enough money, I could not enjoy my life nor I would not smile. But I know I was completely wrong. In the Philippines, I met the people living in a slum and working as scavengers. They also welcomed us with smiling, and they did not look so poor because they seemed to really enjoy their work at the landfill. When I had a home stay in another habitat village in AAMBA, I envied their warm community. The entire neighborhood was like one big family, and helped each other to make their community better. In the present Japanese society, it is not so rare that you do not know who is living next door. In terms of money, yes, Japan may be richer than other countries. However, in terms of relationship between people, the Philippines is much richer than Japan. One thing that made me really happy is that the longer I stayed in the Philippines, the fewer people said to me I was rich. What is poor and what is rich? It’ is not decided by whether you have enough money or not. Now I believe that the people should be judged by their own personality.

To tell the truth, I did not have exact reason or purpose to join this work camp. I happened to find the announcement of the work camp at the hallway, and I decided to join it right after the first meeting. I had never thought that I could have such a great experience. Only for two weeks, such

a short time that we spent in the Philippines, but I will never forget about this experience.

Finally, I would like to give you my favorite word. I do not remember the source of these words, but this is my motto. "If you lose your wealth, you lose nothing. If you lose your health, you lose something. If you lose your character, you lose everything." Because I have joined the Work Camp, I can understand what the word is saying about. I am going to graduate next March, and I would like to work world widely without losing myself. Thank you very much for your kind attention. .

## チャペルアワーの奨励

「ワークキャンプを終えて」

篠崎知子

10月17日金曜日 横浜チャペル

はじめに、「約二週間に渡ったフィリピンでのワークキャンプは、私にとって一生忘れられないものになった」と言う事を断言しておきたいと思います。フィリピンでの生活は、様々な人々の優しさ、笑顔に触れることができ、日本で普通に生活しては絶対にできないと言っているものばかりでした。フィリピンの人々は本当に気さくな方が多く、親切に私達に接してくださいました。

しかし私はそんな人たちの想いに応える事が満足にできず、せっかく与えて下さった貴重な機会を十二分に活かすことができませんでした。私は、もともと人付き合いが得意なほうではなく、どっちかという人見知りをしがちで人と打ち解けるのに時間がかかる性格だったのですが、フィリピンではその短所が丸々現れてしまい、現地スタッフやホームパートナー、そして仲間にもなんとなく壁を作ってしまう最後まで完全に心を打ち解けることができませんでした。自分でもそんな現実がとても嫌で何とかしなければと気ばかり焦ってしまって結局は何にも出来ずに終わるといふもどかしい日々を過ごしてしまいました。今振り返って思うとそんな私がこの旅に1人で参加しようと思立った事自体、かなり突拍子もない事だったのではと思います。しかし私はずっとボランティアとして海外に行きたいとずっと思っていたので、今回の旅は念願で出発する前は不安よりも期待のほうが勝っていました。なので、自分の性格を考慮して、そこでうまくやっていけとかいうことは全くといっていいほど考えていませんでした。

この旅で私は自分がこんなにも弱い人間だったのかと思い知らされました。こんなにも自分は何にもできない人間だったのかと正直自分自身に驚きそして失望しました。しかし同時に色々な事に気づき学ぶことができました。日本での暮らしの中でいかにうわべだけの人間関係を作っていたのか、瞬間瞬間をいかに真剣に過ごしていなかったのかということを実感しました。「自分の心を開くこと」がこんなにも大切なのだと心から感じました。自分から行動を起こさなければ、何も始まらないし、前進しない。何もせずにとどまっても他人は何もしてくれないし、そんな人の事のことを他人は受け入れても、認めても、好きになってもくれない。自分が行動しただけ、努力しただけ結果がはね返ってくるのだということをおこの歳になってようやく身をもって実感させられました。今までの私は自分の行動で他人から批判を受けられることが怖くて積極的に動くことを拒んできました。結局のところ、私は心のどこかでいつも自分に「甘え」をもっていたのです。その甘えのおかげで、せっかくできた人との繋がり繋ぐことができませんでした。もしもっと早くその事に気づき、人との出会いを本当に大切にコミュニケーションをとっていれば、このワークキャンプを通してもっと新しい考え方や感じ方、知識を吸収して、もっと自分の中でいるんな成長を遂げられていたかもしれません。これからは一度しかない限られた人生で出

会うひとつひとつの人との繋がりを大切にしていこう。不安はあるけれど真正面から向き合って行こうとこの旅を終えて決意しました。「言うは易く、行うは難し」という言葉にもあるように今までを苦手としていた物をそう簡単にはできるとは思いませんが、後悔のない精一杯のいき方をして行きたいです。

そんな決意を固められたのはワークキャンプでの、衝撃的な「自分の将来の夢」との出会いができたからなのではないかと思います。その出会いの始まりは、私が人々とコミュニケーションが取れずに悩んでいたときに、会ったフィリピンの子供達でした。子供たちと接していく内に、私は子供達に不思議と自然に心を許していき、ありのままの自分をさらけ出すことができていました。塞ぎこんでいた自分が嘘のように、子供達といるときは素の自分、いやそれ以上のものを生かした気がします。どうしてか自分でも戸惑ってしまうくらい心から楽しいと思えたり、心からの笑顔を振り撒くことができました。しかも子供達は私が自分をさらけ出せば出すほどに私を笑顔で受け入れてくれてくれました。私はその笑顔に救われた思いをしました。このとき以上に「笑顔が価なき宝」だと思った瞬間はありませんでした。その笑顔を見るとますますうれしくなってしまう言葉での意思疎通がうまくはかないなど障害はありましたが、あらゆる手段を使ってもっと子供達に接したいという思いが強くなりました。私にとっては衝撃的な出来事でした。そしてこの子供達が大人になってもこの笑顔は決して忘れ欲しくないと思うようになり、この笑顔のために何かしたいという気持ちが日に日に私の中で大きくなっていきました。そのうちに私はなんとく「子供」と携わる事が、私に合っていて、私の輝ける場所なのではないだろうかと思い、そして日本に戻って、将来、「子供達に携わる仕事」をしたと思うようになりました。それは私には今まで考えてもいない世界だったし、今まで私が2年間この明治学院大学で勉強してきたものとはまるで違っていた方向のものだったので、正直戸惑いました。しかし将来に漠然とした不安を抱えてながら生きてきた私がこの旅で「将来の夢」というかけがえのないものを得る事ができました。それは本当に幸せな事だと思います。ですから私はせっかくできた「夢」をあきらめたくはありません。何がなんでも絶対に叶えるつもりです。そのための一歩を今踏み出そうとしているところです。

私はこのワークキャンプに参加して本当によかったと思っています。ワークキャンプを終え、改めて振り返ってみて私は、自分が本当に弱い存在だと言うこと、自分で自分の事を全く分かっていなかったのだということ、また自分の本当のやりたいことを見つけられた事を発見できました。また今日お話しできなかったこと以外でも私は様々な発見をこのワークキャンプで、できました。未来のことは私にはわからないけれど、私にとって今回のワークキャンプは、私のこれからの人生に少なからず影響を与えるものになったと思います。そんな旅に導いてくれ、支えてくださった方々、そしてこんな私と共に過ごしてくれた仲間達に本当に感謝しています。この場を借りて御礼をしたいと思います。ありがとうございました。



## 「丁寧に生きる」

佐藤 なつこ

10月27日月曜日 白金チャペル

私は9月8日から2週間、フィリピンでのワークキャンプに参加してきました。これまでの生活の中で、この2週間ほど思い切り笑い、オンチなのに大声で歌い、人前でわんわん泣き、そして心穏やかに祈ったことはなかったように思います。毎日常に何かを感じ考え、その思いをシェアできる仲間と共にフィリピンで2週間生きてきました。

大学3年生の夏、就職に向けてインターンを始めようと思っていた私は、ある友人の一言がきっかけでフィリピンでのワークキャンプに参加することを決めました。貧困問題には関心があり、何か自分にできることをしたいと思ってはいましたが、前々から海外ボランティアに興味があったわけでも、ワークキャンプに行きたいと積極的に探していたわけでもありません。ただ何か自分が変わるきっかけを求めていました。これまで「学生」という立場にあり、与えられたものの中で過ごしてきた自分が、卒業後は自ら何かを生み出すことによって生きていくということをリアルに感じられずにいたのです。ただただ焦り、周りの流れに乗るかのように無理に自分の背中を押していました。フィリピンに行く前の生活を否定するつもりはありませんが、このワークキャンプを境に私の毎日が大きく変わったのは事実です。変わったと思うことはいろいろあるのですが、ここではその中で特に大きかった変化について述べたいと思います。

まず過去や現在の自分には自信を、未来には希望を、もてるようになったことです。フィリピンには主に、貧困な人々の家を造りにいったわけですが、自分が彼らの役に立てる自信など全くといっていいほどありませんでした。実際、ろくに穴を掘ることもできない私たちが彼らの力になっているとはとても思えず、むしろ足手まといで、最初は情けない気持ちや申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし彼らと共に働いているうちに、彼らが私たちを日本から来た一ボランティアではなく「仲間」として受け入れてくれている態度やいろいろな会話から、思いもしなかったことで私たちが彼らの力になれていることに気がつきました。家を造るための労働力や資金面での貢献だけが必要なのではなかったのです。「あなたたちは共に働くことで夢や希望、そして愛を与えてくれている。」という現地の人言葉に、私は、何もできないと思っていた自分が少しでも彼らの力になっているという喜び、そして自分の存在意義を感じる事ができました。

また、フィリピンでの2週間は私に、私がとても苦手だった自分との付き合い方を教えてくれました。これまで私はいつも「頑張れ！頑張れ！」と自分に言い聞かせてきました。忙しい時も辛い時も、とにかく頑張らなくちゃいけない、頑張れない時は自己嫌悪に陥ってしまうのです。もちろん「頑張る」ことが必要な時もありますが、この2週間を通して私の中に、これまでなかった「丁寧に生きる」という概念が生まれました。元気な時も体調が悪い時も、うれしい時も落ち込んでいる時も、たとえ言葉が通じなくても、いつでも現地の人々やメンバーのみんなは私に「丁寧に」接してくれたからです。うまく表現できないのですが、「頑張って」ではなく「丁寧に」接してくれたのです。

それを最初に感じたのは2日目のお昼の後でした。ダムに向かう途中、お昼を食べた小屋のそばを流れる川に下りた時、その川で洗濯をしていたおばあさんとの出会いがきっかけとなりました。フィリピンに着いてからそれまでの1日半、私はいろいろなものを見たり学んだりすること以上に現地の人々やメンバーと接することに必死でした。その時も、汚れてしまったタオルを川で洗おうとしていた私は、そのおばあさんを見て、「勇気を出して話し掛けよう。自分を変えるんだ！」と自分の背中を押していました。みんなの輪から離れひとり、おばあさんのところに向かっている間も一生懸命英語のセリフを考えたり、日本人である私が行ったら、特におばあさんぐらいの世代の人には嫌な思いをさせてしまうのではないかと不安になったりしました。でも勇気を出して「タオルが汚れてしまったのだけど、一緒に洗わせてもらえませんか？」と話し掛けました。しかしおばあさんには英語が通じませんでした。私はタガログ語を話すことができないので、どうしよう...とパニックに陥ってしまったのですが、唯一知っていた覚えたてのタガログ語で「はじめまして。私はなつこです。日本から来ました。」と言い、あとはジェスチャーで言いたいことを伝えようとすると、おばあさんは最初こそ戸惑ったものの、本当に丁寧に私に接してくれました。共通言語のない私たちは洗濯をしている間、終始無言でしたが、おばあさんはとてもすてきな笑顔で私に洗濯の仕方を教えてくれたのです。そして汚れが落ちていないのを見ると、彼女の家の外観やせっけんで服を洗っていることから想像するときっと貴重であろう洗剤や、柔軟剤のようなものを袋から出してきて、タオルにかけてくれた上、自分が使っていた桶まで私に貸してくれたのです。これらのことを、おばあさんはごく自然にやってくれました。そのあまりにも自然な対応に私は驚き、自分の中で何かが変わったような気がしました。そして心の底から「サラマッポ」 ありがとう と言った私の手をぎゅっと握りしめてくれたおばあさんのぬくもりが、その後のワークキャンプ中、何度となく私に勇気を与え、「頑張る」のとは少し違う「丁寧に」人に接するということを教えてくれました。その結果、私は驚くほど自分と付き合いやすくなったのです。もちろん、これまでの人との付き合い方をそう簡単に変えることはできませんが、頑張れない日があってもいい、でも丁寧に人や自分と向き合い、丁寧に生きていこう。そういう感覚になったことは帰国後の私にとっても、とても大きな変化をもたらしてくれました。

また、このワークキャンプは私にとって、初めて「親友」といえる友人の存在を感じる旅にもなりました。これまで私は「親友はいますか？」と聞かれても自信を持って「はい。」と答えることができませんでした。相手のことを理解しようと頑張るだけで、自分から心を開き、自分を理解してもらおう努力をしなかったからです。しなかった、というより、できませんでした。しかし、その友人は私に、自分の心を開いて人と付き合うきっかけと勇気をくれました。彼女がいなかったら私は、フィリピンでの2週間を共に過ごしたメンバーたちと、こんなにステキなかけがえのない仲間になることはできなかったと思うし、現地の人々とも、彼らと同じように心を開き、本物の笑顔で付き合うことはできなかったと思います。ワークキャンプ中、朝のお祈りの後に金井先生が、ある歌を私たちに教えてく

れました。「友達になるために人は出会うんだよ。どこのどんな人ともきっとわかり合えるさ。同じような優しさ、求め合っているのさ。今まで出会ったたくさんの君と、これから出会うたくさんの君と友達。」これはその歌詞ですが、私はこの歌を聞いた瞬間、涙が溢れて止まりませんでした。私がずっと求めていて、でもこれまで築くことのできなかつたものを、得ることができた、このワークキャンプを通して感じられたからです。人は皆まったく違う、ひとりひとりで、違うからこそ求め合い、助け合い、与え合う。人間っていいもんだ！と実感することができました。

私はこれまでも、「人」というのは好きで、いろいろな人と関わりを持ってきましたが、様々な理由で無理をすることがほとんどでした。しかし、親友から「自分の心を開く勇氣」を、共にワークをした人々からは「自信と希望、可能性」を、そして洗濯のおばあさんを始めたたくさんの人からは「丁寧に生きるという概念」を与えられた今、無理することなく心から、人と接することが楽しい、うれしいと感じています。これが今回のワークキャンプで自分が一番大きく変わったと思うことです。たった2週間でこんなにも私を変え、成長させてくれたワークキャンプを様々な面で支えて下さった皆さん、現地の人々、大好きなチームメンバー、今日ここで話を聞いて下さっている皆さん、ひとりひとりに、そしてこれら全ての人に出会うきっかけをくれた私の親友に、心から感謝しています。

### 「新たな発見」

鈴木 奈々江

10月28日火曜日 白金チャペル

「フィリピン」と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？私の中で「フィリピン」はバナナが有名で、日本が占領していたという過去があり、そして貧しい=暗い雰囲気のある国だろうという3つのイメージがありました。今回、決して治安のよくないフィリピンに行くにあたり、不安がつきまとったことはいなめません。しかし、実際フィリピンに到着し、見ての感想は、なんて都会的なところだろう。そして、私たちはここに本当にボランティアに来たのだろうか。というものでした。空港は全面ガラス張り、都市部には近代的な高層ビルが立ち並び、街を歩く人々に貧しさはまったく感じませんでした。しかし、バスに乗り、都市郊外に進むにつれて窓から見える風景が徐々に変化してゆきました。破れた服で道を歩く子供たち、足で物売りをしている子供たち。これは人のすむ家なのか廃屋なのか、思わず疑ってしまうような建物。フィリピンの貧富の格差を感じました。このとき、私の中で不安がよぎったのです。貧しさも何も知らない、ただの日本人大学生である私が、彼らと共に家を作ることが出来るのか、そして彼らは心から私たちを受け入れてくれるのだろうか、ということにです。今となっては、これはただの勝手な先入観で、フィリピン人に対する間違っただけの思い込みからきている、ということがわかるのですが、このときはかなり不安に思いました。自分がこのワークキャンプに参加した理由が面白そう。という好奇心からきていたこと、そしてボランティア活動という言葉を重ねて捉えすぎていたこ

とも関係していたのかもしれませんが。しかし、サイトの人たちは見事にその思いを打ち砕いてくれました。

とにかく底抜けに明るくて、陽気で笑顔が本当に素晴らしいのです。人の笑顔がこんなにも他人の心を打つものなのかと、とてもおどろきました。少なくとも最近日本にいて彼らのような笑顔を見た覚えがありません。それくらい素晴らしかったのです。今ある自分たちの状況に対してとても前向きで、後ろめたさを微塵も感じさせない笑顔。素直に来てくれてありがとう。という気持ちが伝わってくるのです。貧しい=暗いというイメージはみごとに崩れ去りました。みなさんには是非報告書の最後に綴じてある付録を見て頂けたらとおもいます。そして、心からの笑顔を感じていただければ幸いです。また、ここで同時に、私は自分の中に裕福=明るい、そしてその先に=幸せという思い込みもあることに気づきました。そして一概にそうは言えないということを感じました。ものやお金に困らないことが必ずしも幸せではないと彼らを見て思ったからです。

私が打ち砕かれた先入観がもう一つあります。私たちはこのワークキャンプに行く前に2つのドキュメンタリーを見ました。それは、「忘れられた子供たち」と「神の子たち」というものです。そこで私たちはゴミ捨て場でごみを拾う大人、そして子供たちの姿を見ました。スカベンジャーと呼ばれる彼らの、家はゴミ捨て場の中にあり、板をはっただけの今にも崩れそうなものでした。そしてその周りには、人の死体が流れてきていたり、動物の死骸、そして人間の足の膝から下が落ちている光景が映し出されていたりしました。他にも、自然発火により煙があがっている場所や、ごみをめぐってケンカをしている者もいたり、とても悲惨な光景を見たのを覚えています。子供たちにとって、まさに劣悪な環境だと思いました。私はこれを見てとてもゴミを拾う人々にマイナスイメージをもちました。しかし、実際ゴミ捨て場を訪れ、ごみを拾う人たちを見て、暗さや後ろめたさ、疲労といったような私がビデオを見たときに持ったマイナスな感じは受けなかったのです。むしろゴミを拾うことに誇りをもち一つの「仕事」「職業」としてまっとうしているようにも見えました。日本での、家がない人、例えばホームレスの人や、貧しい人とは、印象も出ているオーラも全く違うものを感じました。この違いをメンバーの何人かと考え出した答えは、結局、ものであったり、金銭的な豊かさを知ってしまった後か、知る前かの差だろうという結果になりました。もちろんごみを拾い、それに対する対価が大きいということも、科関係していると思います。しかし一度豊かさや、便利なものを知ると、そこから落ちたときの感情は敗北感に近いものがあるのではないのでしょうか。そこからくる暗さや後ろめたさが日本のホームレスの人たちにあるのではないかと考えたのです。

最後に私はこの旅で自分の内面にも大きな発見と変化がありました。これからそのことについて話そうと思います。それは大きく分けて3つありました。1つに今まで思っていた自分と、本当の自分とのギャップの発見でした。今まで自分にコミュニケーション能力が足りないなんて考えさせられるような機会はありませんでした。英語が話せないことを差し引いても、自分にはガッカリしました。いつのまにか周りが見えない壁を張り巡らして、

自分の殻の中に閉じこもっていたのです。一緒に作業をしている人が笑顔で話し掛けてくれても、うまく応えられないのです。その対処法をどうしたらいいか分からなくなり、ミーティングの時間にメンバーに打ち明けました。メンバーはしっかりと受け止めてくれ、アドバイスをくれました。自分から心を開かなくては始まらないということをすっかり忘れてしまっていたのです。このとき初めてこのワークに参加して本当によかった。自分が確実に一歩前に進んだ感覚を覚えました。

2つ目の発見、それは宗教の見方が変わったことだろうと思います。もともと宗教にあまりよいイメージはありませんでした。最近おこった様々な事件がそうさせたのかもかもしれません。しかし、共にワークキャンプを過ごした金井先生のおかげで牧師の見方、しいては宗教の見方までが 180 度変わりました。それだけ金井先生との出会いは衝撃的な出来事だったのです。こんなにも陽気な牧師がいるのか、想像とかけ離れすぎていました。

次に3つめの発見と変化。それは、自分の将来の方向性が変わったことです。これまでは給料のとれる資格をとにかく取り安定な生活を、と考えていました。しかし、フィリピン人の笑顔、そして、貧しくてもとても幸せそうな姿を見て、考え直さざる終えなくなりました。私はもっと人の笑顔を近くに見ることのできる仕事につきたいんだ。もっと生きることを楽しまなくては。と気づかされたのです。そして人の幸せと豊かさの本当の意味も気づかされたのです。

このように、わたしにとってこのワークキャンプは見失いかけていた本当の自分を振り返るよい機会となりました。たった 2 週間ではありましたが、私なりにアンテナを張り巡らし、日本では考えないようなことを考え感じないようなことを感じた、有意義な 2 週間でした。これから先ここで感じた自分に足りないところをどのようにして改善し、いかにこの経験を生かしていけるかが課題だと思っています。そして最後にワークキャンプのメンバー、お世話になった鍛冶先生、金井先生、本当にありがとうございました。

### 「自分のこと以外も考える」

吉村 悠

10月29日水曜日 白金チャペル夕拝

僕は9月の8日から2週間フィリピンに行ってきました。2週間いろんなことがあって、知らなかったことや見たことないものなど、学べるだけ学んできたつもりです。ほとんどが初めての経験で、喜びも、楽しさも、辛さだって今まで生きてきた中でこんなに感情豊かに暮らした時間はない、というほどの濃い2週間だったと思います。しかし、帰ってきて1ヶ月以上経ち、今思うのは、「2週間って一生の中ではとても短い期間なんだなあ」ということです。2週間は、時に人生を変えるのに十分な時間であると思います。現実には、フィリピンに行ったメンバーは、僕も含めほとんどの人が自分を見つめなおし、自分の人生にかかわる大きなきっかけを見つけたと思います。そして、チームのメンバー同士や現地の人たちとの人間関係も急速に大きく変化しました。フィリピンに行くまでは顔見知り

程度だった仲間と、苦労や喜びをともにして朝から晩まで一緒に過ごし、また、人なつっこいフィリピン人たちとの友情関係が日を追うごとに深くなっていくことに、僕はめまぐるしさと同時に喜びを感じていました。

しかし、僕らの帰国が近づいたある日、向こうでずっと僕らのツアーのお世話をしてくれていた Jay-R というフィリピン人の青年が、「どうせ日本に帰ったら俺たちのことは忘れてしまうだろ」というようなことを言いました。僕は「そんなことないよ」と彼をなだめながらも「そうなるのかもしれない」という不安を感じていました。あの2週間で、僕たちは色々な感情を共有し、話し合い、確実に非日常的な生活を送っていました。それは生活が常に発見に満ちていて、四六時中未知の情報が周りから飛び込んで来たからで、その時日本には身近に感じない問題がリアルに実感できて、そこにある問題に対してきちんと問題意識を持っていたと思います。しかし、日本に帰っていき自分の周りから、『フィリピンにいて感じる衝撃や問題』というものが消えてしまうと、やはり、関心が遠のいていっていると感じずにはいられません。Jay-R が言っていたのはおそらくそういう意味も含めてのことだったのでしょうか。僕もそういう意味で2週間が短かったと思うのです。

僕は、日ごろから「自分のことしか考えない男」と多くの人に言われます。それは正確に言うと「今、自分の身の回りにあることしか考えられない人」だと僕は理解しています。しかし、これは僕に限らず、多くの人がそうではないでしょうか？そして、それは言い方を変えれば「自分が良ければ、人のことはどうでもいい」とも取れてしまいます。言い過ぎと思う人がいるかも知れませんが、マザー・テレサが「愛の反対は無関心だ」と言っていることを考えると、僕たちは、意図せず様々な問題に対して無関心になってしまいがちなのではないのでしょうか？例えば、今、地球環境などを考えるとき、もはや国のレベルではおさまらず、「地球」という大きな共同体レベルでの問題が多く、その解決にも地球規模で運動していかなければなりません。しかし、そうやって鳥瞰的に外ヅラを見ていると、自分には手の届かない大きすぎる問題と捉えてしまいがちですが、その共同体を形成しているのは僕たち一人ひとりであり、そのような問題は、自分たちの問題だと認識する必要があります。また、もしかしたらその問題が深刻な地域とそうでない地域に分かれることもあるでしょう。そんな時でも、僕は「もっと一人ひとりが自分以外のことも考えられるようになれば素晴らしいなあ」と思います。

そのような問題はフィリピンと日本の間にもありました。「ジャパ行きさん」というのを聞いたことがある人もいると思いますが、フィリピン人でも経済格差のために日本に来て水商売をしている人がいます。また、向こうの人は「ママキ」と呼んでいましたが、フィリピン人の女性との売春目的でフィリピンを訪れる日本人も少なくないようです。これは両者の合意のもとに行われていることだと説明できるかもしれませんが、経済格差による性差の構造的暴力の構図が作られてしまっていると考えられます。僕たちも実際に向こうで仕事を体験させてもらったのですが、虫のわいた腐りかけのココナッツの実の外皮を機械で粉碎して繊維を取り出し、再利用するという、胸が悪くなるような仕事をして、向こ

うでは一日数百円程度しか稼げないと聞き、虚しくて涙が出そうになりました。

僕らは、フィリピンに行くことでそれぞれ様々な問題を発見し、帰って来ました。しかし、その2週間は自分の中で、とてつもなく大事なものであるにもかかわらず、今向こうで感じた問題意識が薄れつつあり、同じ世界で一緒な時間をと共に過ごしている他人（ひと）のことを考えられなくなっていると思うと申し訳なくなります。しかし、これはきっと僕だけの問題ではありません。日本でも、最近耳にするニュースには、なぜそんなことをしてしまったのだろうという衝動的な事件が多い気がします。そんなとき、犯人になってしまった人がもう少し他人のことを考えれば、事件は起こらなかつたらうな、と思えてなりません。また、今、多くの人がボランティアに関心を持っていることでしょうか、ボランティアをするということの基本にある精神は、同じ共同体に生きる人間について、つまり「自分のこと以外」も考えるということ、それによってボランティアをする人、受ける人、その両者のより深い社会参加、社会作りへとつながっていく、ということです。他人のためにすることは社会のため、ひいては自分に帰ってくることとなるのです。少し遠回りなやり方ですが、「急がば回れ」と自分に言い聞かせて、回り道で「自分のため」になることをして欲しいです。

世の中の問題は、ほんとに身近な問題から、知っている人があまりいないような問題まで色々だと思います。まずは、そんな問題を知る必要があるでしょう。ですから、今日や、またこの2週間、こうやって僕たちフィリピンワークキャンプメンバーが見てきた問題を話せる機会をもらえたことをうれしく思います。みなさんもこの機会にここにいたことで知った問題について考えて、他人について今よりいっそう考える人間になってくれるとうれしいです。

このメッセージは、この報告書に書かれている僕のレポートとは異なるところがあります。それはおもにボランティアに関しての記述で、動機は「外国に行きたい」とか「自分のためになる」とかそういうことでもいい、という風に書きましたが、やっぱりここに書いたように、社会と自分との関係を意識しながら、また、単純なことですが『人を思いやりながら』やる仕事はその効果も自分に帰ってくるものも大きく変わってくるのです。メンバーの日記のページが同報告書にあります。ワークの最終日に僕は「涙を流せなかった」と書いていました。今考えると、「もっと家作りの役に立ちたい」と悔しがっていたメンバーほど涙を流せていたと思います。僕が涙を流せなかったのは、自分自身に納得がいかなかったのは、「これは自分のためだ」と考えることで無理をせず、甘えがあったからなのかもしれません。そう考えると、残念ながら僕はフィリピンでは本当の意味でのボランティアをすることができなかつたと思います。しかし、こうやって今度こそ本当に大切なことを学びました。『失敗から成功が生まれる』、昔の人は言いましたが本当に正しいことです。多くの人が「自分のためにボランティアをやる」時代に、回り道をする「自分のため」という見方を知って欲しいです。そうすれば、今より数倍ボランティアが楽しくなって、数倍感動し、成長し、数倍住みよい社会になる、と思います。

## 「ワークキャンプから学んだこと」

多井 裕子

10月30日木曜日 白金チャペル

私は9月8日～21日までの2週間、フィリピンのワークキャンプに参加しました。今日はその中で私が感じたり、気づいたことをお話しさせていただきます。私がワークキャンプに参加したのは、以前フィリピンに住んでいたことがあり、今はどうなっているのだろうかという懐かしい気持ちと、サークルを辞めてから味わうことのできなかつた団体で何かをしたいという思いがあったからです。フィリピンに行ったのは10年ぶりでしたが、行くまで私はどこかで「私はフィリピンをみんなより知っている」と思い込んでいました。しかし、行ってみてやっと気づきました。私が住んでいた頃経験していたことは上流階級の暮らしであり、遊んでいたのは同レベルのフィリピン人だったのです。確かにストリートチルドレンや周りに家が立ち並ぶでこぼこ道を通りはしました。けれど、窓がしっかり閉まった車の中から見ただけでした。排気ガスを全身に浴びながら過ごすことは今回が初めてでした。私はこのことを節々で感じました。

ワークキャンプで私たちは、大きな目的である家をつくるという作業を経験しました。それは私には初めてのことで、そばで見ているのと実際にやってみるのがこれほど違うのかと愕然とするくらい、何も出来ない自分が情けなく感じました。建設現場に来るまでは、作業の面でもっと役に立てるとどこかで思っていたのだと思います。「難しいー。できない！」と笑って言いながら作業をしていましたが、内心は焦っていたように思います。ワークの始めのうちは早く家を建てたい・家を建てる作業の中で役に立たなくてはという気持ちが高く、これから家に住むホームパートナーの人と会話をしながらも心の中ではもくもくと、そして淡々とこなしていました。正直なところワークの始めは、単純な砂運びリレーや、その最中に地元の中・高生が歌っていた“ビールのビンが100本～99本～”と1本になるまで続く歌を心の底から楽しいと思っていませんでした。「単純な流れ作業や歌なのに、本当に楽しそうにしているなあ」と感心すらしていました。私には“楽しく仕事をする”という概念が浮かばなかったのです。そんなふうに傍観する冷めた自分に気がついたのは、夜に行われたチームミーティングの時でした。みんなでワーク中に感じたこと、こんな事があったなどと話しているときに、私の周りで起こっていた出来事や話が自分にはまったく感じ取れていなかった、きこえていなかったことに気づきました。「そんなことがあったんだ...。」と輪の外からみんなを見ているような感覚に襲われました。このことがあり、家を建てる作業だけがワークなのではないし、もっと周りのことに目を向けて話しかけて、質問して、自分から求めていく姿勢が大切だと改めて思い直しました。そう考えるようにしてからは、家をつくる作業自体への自分の無力感は気にならなくなりました。そして単純で誰にでもできると思っていた砂運びリレーにも意味を見出しました。それはフィリピンに来る前に行った研修合宿で聞いた「小さな力でも、みんなが集まれば大きな力になる。小さな一歩でも大きな一歩になる」ということです。1日目にあった砂の山はみんなで力を合わせて運んだことで、セメントのブロックをつくることに繋がりました。



した。そしてまた、新たな砂の山がつくられそれをみんなで運んでいくのです。砂を運んだ私の小さな力が家をつくる大きな力の一つになったと体で実感できた瞬間でした。研修合宿で聞いて、いい言葉だなあと思ったことを私たちは今実際にやっているんだと感ずることができました。ただ言葉だけで理解していたままでは、砂運びの単純な作業を私はつまらないと感じ、他の作業に比べて軽視していたと思います。あの言葉を体験できたことはワークキャンプから学んだ大きなことの一つです。

もう一つ私が学んだことは人との関係の距離のとり方です。人間関係は私が考えているよりももっとも温かいものなんだと心から感じました。今までの私は人と接することは好きでしたが、どこか一定の距離を保って接していました。当り障りなく周りと接していたのです。今思えば、人に騙されて自分が傷つかないようにバリアを張りながらきたのだと思います。この人の言葉の裏にはこういう気持ちがあるのではないかと、本当は心ではこんな風に思っているのではないかとすぐに人の裏に隠れている気持ちを探してしまうクセがありました。それによって人との距離を縮めたり遠ざけたりして、自分の気持ちではなく他人の行動によって関係が左右されていたように思います。だから私はなかなか本心を見せられずにいました。そんな私がワークキャンプの仲間やフィリピンの人々に出会って動揺したのは言うまでもありません。毎日温かい人たちに囲まれて素直な感情を正面から受けたので、私の心は毎日びっくりしていたと思います。

現地の大学であるフィリピン大学（UP）に通うマベルという女の子が滞在中私たちにUPを案内してくれました。初めは案内するだけだったのですが、私たちにとても親しみを感じてくれ、それ以降共に行動する仲間となりました。マベルは感情を素直に表現していました。嬉しいときは抱きしめたり手を握ったり全身で表していたし、悲しいときはその悲しい気持ちを言葉でも表現していました。私はマベルが怒った時のことが一番印象に残っています。私は文化交流係を担当していたので、その準備に追われている時でした。マベルは私と話しをしようと何度も私の名前を呼んでいました。でも私はちょっと待つと言うことしかできず、ほとんど話しをすることができませんでした。マベルは「あなたなんて嫌い」とすねていました。私はどうしていいのかわからなくてお手上げという感じでした。本当はあまりにストレートな感情にどう対応していいのかわからなかったのです。私ならきっと不満に思っても「仕方ない、忙しいんだから」と気持ちを押し込めてしまうでしょう。そんなマベルが羨ましくもありました。また、メンバー同士で感じたことをお互い真剣に耳を傾け、自分の意見も伝えていく時にも私は戸惑っていました。私はどうやって自分を伝えていけばいいのかわかりませんでした。普段なら感じないような感覚に戸惑いながらの2週間でした。心をたくさん使ったと感じたのもそのせいかもしれません。人間関係は人の心の裏をかいた方が勝つわけでも、得をするわけでもありません。人は敵ではないし怖いものでもないのだから、喜怒哀楽が激しいという意味ではなくて、傷ついたり、ぶつかってもいいから、もっと素直に自分を表現しながら人と向き合っていきたいと強く思えるようになりました。

大学生活最後の4年の夏にこのような経験ができたことを私は本当に誇りに思っています。もっと早くみんなに出会っていろいろな活動に参加できたらもっとよかったと思います。4年の今、同じ学年の友達は学校に来ることが少なくなり寂しく感じていましたが、ワークキャンプに参加して自分とは違う学科や学年の友達ができ、学校で「おはよう」と言えることがこんなに嬉しかったことはありません。今そこから更に友達の輪が広がっています。ワークキャンプに参加したことで私の環境が変化してきています。それを楽しみつつもっと充実した日々を過ごしていきたいと思います。

## 「2度目のワークキャンプ」

鈴木 まりえ

11月5日水曜日 白金チャペル夕拝

昨年、私にとって「1度目のワークキャンプ」はフィリピンを訪れることが始めてだったので、見るもの、聞くもの全てが新鮮であり刺激的でした。昨年書いた報告書には「大学1年生でこんな素晴らしい経験ができて私はなんて幸せなの！！」で始まっています。フィリピンから帰国し、興奮冷めやらぬまま書いた自分を今でもよく思い出します。

1度目のワークキャンプは私にとって「発見」でした。特にフィリピンを訪れて得た大きな「発見」は自分でも思いもよらなかった「宗教」でした。私はフィリピンで、世界的にみれば私のような無宗教の人の方が珍しいこと信仰をもっている人からみればもっていない人は何を自分の信念として生きていっているのか、中身が空虚なのかと疑問に思われているということを、昨年のワークキャンプで知り、宗教とは縁遠い生活を日本で送っていた私にとってはものすごく衝撃的な発見でした。1度目のワークキャンプで「宗教」という新しい価値観・新しい発見が自分の中から生まれました。それは私に気づいていなかったことに目を向けることから全ては始まっていくのだということを教えてくれるワークキャンプでした。

それでは今年2度目のワークキャンプは自分にとってどのようなものだったのでしょうか。1度目のワークキャンプではフィリピン人の笑顔、そして生き生きとした表情に私はとても感動しました。なんて良い表情を彼らはするのだろうか、と。そして今年、昨年と行った先は全く違いましたが、笑顔が絶えず本当に陽気なフィリピン人に会い、更に今年も村でホームステイをし、そこでフィリピン人の温かい人付き合いをまた見ることができました。私達がホームステイをしたアサンバという村はものすごくしっかりとしたコミュニティが形成されており、家々が建てられ始めてから5年の月日しか経っていないとのことでしたが、人々が一丸となってコミュニティを作っているという感じを受けました。そこでは大人達が自分の子供と同じように他の子を叱ったり、気兼ねなく周りの人々と付き合ったりしている姿は、色々なことに気をつかいながら都会に住んでいる私達にはあまり見られなくなった光景だなと思いました。

1度目はフィリピン人の笑顔・明るさ・温かな人間関係は私を終始和ませるものであり、

彼らのバイタリティーに刺激を受け、生き生きしている姿を見て素敵だなという気持ちがとても強いものでした。2度目、またフィリピンを訪れて思ったことは、場所は違うけれども昨年と全く変わらない笑顔・明るさ、変わることのない温かい人と人との関係を直にみて、このままずっと変わらないでいて欲しいと願い、変わってはいけないものもあるのだということを感じました。「変わらないことの素晴らしさ」を私はフィリピン人から教わりました。一方、「変わっていくことの素晴らしさ」は、一緒に行ったチームメンバーから教わりました。

私は今年ワークキャンプで学生リーダーとして訪れました。これは1度目と2度目のワークキャンプで最も違う点でした。「変わっていくことの素晴らしさ」を感じることができたのも自分の置かれている立場が変わったからではないかと思います。なぜなら立場が変わったことにより物事を見る視点が変わり、そしてなによりも「喜び」が変わったからです。フィリピンへ旅発つ前、私は自分が置かれている立場が変わればおのずと昨年とは違う視点から物事を見るようになるだろうということは予想がついていましたが「喜び」までもが変わるとは全く予想していませんでした。去年は家を完成させるという建設作業を通して、チームメンバーが楽しみ、無我夢中になっている姿を見てももちろん感ずるものはたくさんあったし、共有するものもたくさんあったけれどもそれが自分の「喜び」とは結びつきませんでした。人付き合いが苦手だと言っていたメンバーが子供の前で自分を出ることができたといって溢れる笑顔で無邪気にダンスしたり遊んだりしている姿を見て嬉しく思い、コミュニケーションがとれないと悩んでいたメンバーがみんなのアドバイスを聞いてなんとか意思疎通をはかろうとしている姿に心を打たれました。英語が苦手だったメンバーはフィリピン滞在最終日に、グループで話し合ったことを代表して英語で発表するというのを自ら挑戦し、また何かに取りつかれたかのように黙々と土を掘り1つのことに取り組んでいる姿からは真剣になることをその姿勢から教わりました。そして明るくチームを盛り上げ、雰囲気を作ってくれたことはすごく心強く、建設作業最後の日に催されるフェアウェル・パーティのために現地の人に喜んでもらえるよう、何度も何度も案を練って練習している姿には心の底からこみ上げてくるものがありました。ワークキャンプを通して何かに没頭し、何かが変わって、成長していているチームメンバーを見たことが私にとっての「喜び」となり、そしてチームメンバーから「変わっていくことの素晴らしさ」を教えてもらいました。

2度フィリピンを訪れたことにより変わらぬフィリピン人の笑顔・明るさ・温かい人間関係を再び見たことから、「変わらないことの素晴らしさ」を。今年、学生リーダーとして参加したことにより、チームメンバーの変わっていく姿から喜びをもらい、そこから「変わっていくことの素晴らしさ」を2度目のワークキャンプで学びました。1度目は「発見」。2度目は「変わらないことと、変わっていくこと」の両方の素晴らしさを。これらを2回のワークキャンプを通して見つけ、知ることができたことは私にとってこの上のない幸せだと、今感じています。

## 「出会い」

柏木美穂

11月6日木曜日 白金チャペル

フィリピン・ワークキャンプから帰ってきて、一ヶ月以上が過ぎてしまいました。鮮明だった記憶もだんだんと薄れてきて、私の中ではすっかり思い出になってしまいました。フィリピン生活、たった2週間の間にたくさんのことが起こりすぎて、まだ消化しきれてないこともたくさんあると思います。一瞬一瞬にたくさんのことごとを感じ考えていました。今となっては、はっきりと思い出すのは難しいけど、一つだけ絶対に言えることがあります。それは「ワークキャンプに参加してよかった！！」ということです。たくさんの素晴らしい人々に出会い、たくさんの発見がありました。

このワークキャンプは今までしてきた旅とは全く質が違うものでした。今までの旅は仲良しの友達と、自分たちが楽しむためだけのものでした。しかし、今回の旅はフィリピンの人はもちろん一緒に行くメンバーにさえ知っている人はいませんでした。そして、楽しむためではなくボランティアという目的があったことです。この旅で、私は大きく分けて3つのステキなものに出会いました。

まずは、鍛冶先生、金井先生を始めとする21人のワークキャンプのメンバーです。フィリピンに行く前の研修会で何回かしか会ったこともなく、知り合ったばかりでした。そのメンバーに、こんなに大きな影響や刺激を与えられるとは思ってもみませんでした。初めてフィリピンという国に来て、周りもあまり知らない人ばかりの状況で、誰にも頼れず、自分で考え、行動するしかありませんでした。すると、自分に足りないところが気になり始めました。人とコミュニケーションをとることや、自分の意見を言うのが下手なこと。考えれば考えるほど、どうしたらいいか分からなくなってしまいました。そんなとき周りを見てみたらいろんな人がいました。すぐに誰とでも仲良くなれる人、いつもニコニコ笑顔で元気な人、しっかりと自分を持っている人、マイペースな人、変わろうと努力している人。みんな自分の生き方で生きていて、とてもかっこよく見えました。そんな仲間たちを見ていると悩みの解決のヒントがそこにあることに気がつきました。決まった方法なんてあるはずもありません。いろんな人がいて当たり前なのだから。自分の思った通りに、自分のペースで、そして足りないところは他人から学べばいいのではないかと思いました。また、人のいいところを発見すると、相手を尊敬できるようになり、メンバーという時間がとても安心でき楽しい時間となりました。

次に、フィリピンの人々です。ボランティア活動ということもあり、現地の方々と深く関わる機会がありました。私は勝手にホームパートナーのことを、貧しくてかわいそうと思っていました。しかし、実際に会ってみると、かわいそうという言葉は全然当てはまりませんでした。キラキラとした本物の笑顔を持っていたからです。そして、その笑顔からも分かるようにとても温かい心を持っていました。笑顔だステキなのは、今という時間を大切にしているからではないでしょうか？彼らは楽しく時間を過ごす方法を知っています。一日中働いているのに、働きながらも楽しそうでした。同じ時間を過ごすなら楽しく過ご

した方がいい、と改めて教えられました。しかし、フィリピン人も彼らのような人々だけではありません。ショッピングモールで出会うような比較的にリッチな人々は、あの笑顔を持っているようには見えませんでした。そして、お金とは何だろう？と思いました。今までは困らない程度にお金を持っていて、何不自由なく暮らしていくことが幸せだと思っていました。しかし、そうではないことに気がつきました。貧しくても、楽しく幸せに暮らしている人々はたくさんいるのです。きっと、お金を多く持たないことによって、見えているものがあるのではないかと思います。本当の幸せを、彼らは知っているのだと感じました。そうホームパートナーの笑顔が教えてくれました。

そして最後の一つは、金井先生に教えていただいた『友達になるために人は出会うんだよ』という歌です。この歌は家造りのボランティアが終わった後に教わりました。ちょうどそのとき、私は優しく接して下さったホームパートナーの方々と、そんなに仲良くならないまま別れてしまい、これで良かったのか考えていました。この歌を聞いたとき間違っていたことが分かりました。せっかく出会ったのに、友達になろうとしていませんでした。いろんな人の考え方、思っていることを知るチャンスを逃していました。その後のホームステイでは、家族といる時間は短かったけど、なるべく話してみるよう努力しました。一步踏み込んでみると、今までとは違った景色が見えてきました。上手く表現はできないけど、ワクワクするものでした。

今までどれだけの人と出会ったか分かりません。その中で仲良くなるのは、一握りに過ぎませんでした。どれくらいの出会いを無駄にしてきたのだろう？その分、これからはこの歌を忘れずに、人との出会いを大切に、意義のあるものにしていこうと思います。今、フィリピンの写真を見ると、とても不思議な気持ちになります。少し前までは同じ学校にいたにも関わらず、全く知らなかった人々と楽しげに写っているからです。ワークキャンプに参加しなかったら出会うことのなかった仲間と。「ワークキャンプに参加して本当によかった！！」です。

## 明治学院教会における報告会（2003年10月19日）でのスピーチ

### 「家を建てるという事」

丸谷 由理

私はこの大学一年生の夏にひとつの大きな経験をしました。それは、ある理由で劣悪な住環境の中で暮らしている人々の「家」を新たに建てに行く、という海外ボランティアに参加したという経験です。当初、私は「家」を建てるというボランティアの内容は誰でもよくて、ただ海外ボランティアということそのものに漠然と興味を持っていたという単純な理由だけでこのワークキャンプに参加することを決めました。こうして私のフィリピンでの2週間は始まったのです。そんな私に、「家」を建てに行く必要性を感じさせてくれたのは、フィリピンについてすぐのことでした。バスで移動中の景色は、日本ではありえない光景でした。その光景というのは、一瞬、新宿で見られるような高層ビルがたくさんあり、決して貧困という感じを漂わせていないのですが、しかしまた違うところでは、住宅といえないような板一枚の壁の「家」がたくさん建っているというものです。極端に言ってしまうと、今皆さんが住んでいる「家」の横に、ホームレスが住んでいるようなダンボールの「家」が建っている、そんな感じです。その景色を見た瞬間、「家」を建てるということに対して真剣に考えていかなければいけない、そう感じたのです。その時から、「なんで「家」を建てるんだろう？」これが私のキャンプのテーマとなりました。

そして、「家」を建てる作業、ワークが始まりました。そこは何もないただの地面で、そこにあるのは、作業する小屋と、私たちの休憩所、トイレ、そのくらいでした。作業はホームパートナーと呼ばれる、将来そこに住む人たち、つまり、今は私たちがバスの中で見ている、住宅とは呼べないような「家」で暮らしている人たちと一緒に行われます。作業の内容は、水路を作るために土を掘ったり、セメントを運んだり、そのセメントでブロックを作ったりと、なかなか力のいる作業で、はっきりいって、私たちの力は全く役に立っていませんでした。むしろ、効率を下げていないかと、思うほどで、かなり自分の非力さや無力さに憤りを感じ、私は「家」を建てられているんだろうかと、とても不安でした。今だから言えることだけでも、正直自分の非力さが悔しくて、作業が嫌になってしまうこともありました。「私は一体ここに何しにきているんだろう？」「私は作業の効率を下げているだけじゃないの？」と……。しかし、そんな私の不安や心配を取り払ってくれたのは、現地の人々、そうホームパートナーの人たちの私たちに対する接し方や態度でした。どんなに私が、不器用で力がなくても、ホームパートナーの人たちは、わざわざ固い土をやわらかくして、私が掘りやすいようにしてくれたり、つきっきりでブロックの作り方を教えてくれたり...また、作業中も仕事を楽しくしようと歌を歌ってくれたり、タガログ語を教えてくれたりと、私たちに対してとても親切に接してくれました。なかには、「疲れてない？」「休んだほうがいいよ？」など私たちの体調まで気にしてくれている人さえいました。私は、彼らのこの優しい心遣いや笑顔に助けられたのと同時に、なぜこんなにまでして、私たちのことを気にかけてくれるのだろうかと思議に思うようになりました。でもそ

の答えはすぐに出ました。それもそのはず。それはホームパートナーの私たちに対する態度そのものに答えがあったからです。つまり、彼らは私たちを大切な「仲間」として受け入れてくれているから、私たちのことをすごく気にしてくれているのです。もし、大切な友人や仲間が悩んでいたたり、困っていたりしたら、もちろん助けてあげたいと思いますよね？もし、大切な友人や仲間の体調が悪そうに見えたりしたら、もちろん心配しますよね？彼らもそれと同じことを私たちにしてくれているというわけなのです。そう私が思った瞬間、それまでの不安や心配は一気になりました。「こんな私でも彼らは「仲間」と思ってくれている」「こんな私でも彼らは必要としてくれている」と思ったら、「家」を建てるのって、とても楽しいことだと思えるようになりました。

そのようにして、彼らと親しくなるにつれて、ホームパートナーの人たちは自分自身のことをたくさん話してくれるようになりました。それは、自分の家族のことだったり、仕事のことだったり、そして、将来の夢だったり...彼らはとてもたくさん話をしてくれました。彼らは「家」を建てることにより、夢や将来への期待を抱くようになったのです。今まで「家」とは呼べない「家」で生活してきた彼らは初め、そんな夢や希望を抱いていなかったそうです。しかし、きちんとした住環境の「家」を建てることによって、その「家」が彼らに夢や希望を与えたのです。そんなことを考えていたり、話してくれている彼らの表情は本当に生き生きとしていて、世界中の誰よりも輝いていて、かっこいい...彼らは誰よりも「生きている」のです。私はそんな彼らを見て、「家」を建てる意味ってこういうことなんだ。」と思いました。それはどういう意味かというと、「家」は彼らを「生き」させているということ。それはつまり、ただ生とか死とかという問題ではなく、彼らを、人間として、誰よりも輝ける人間として、「生き」ようとするきっかけと「家」がなっているのです。私は彼らのその「生きる」姿にとっても感動しました。私は彼らのように今「生きている」のだろうか？...きっと今の私では彼らにかなうことは出来ないと思います。だからこそ、彼らの「生きる」が私の中で輝いてみえるのです。

これが、私がフィリピンで出した「家」を建てることの意味の答えです。私はフィリピンに行って「家」を建てるという作業が出来て幸せ者だと思っています。それは、少しでも、大切な「仲間」であるホームパートナーの夢や希望の実現のための手伝いできたから。彼らの「生きる」という姿を見ることができたから。私はまたあの村に、彼らの村にもう一度必ず行こうと考えています。それは、彼らの「家」が建て終わった後の、彼らの「生きる」姿を見てみたいし、それよりも、私自身が彼らに負けにくい「生きている」ということを見せたいというのが一番の理由です。

フィリピンワークキャンプから1ヶ月。私は「生きて」います。それは、明らかにフィリピンに行く前の「生きる」とは違うものです。もっと多くの経験をして、学び、考え、そして成長していく...私はこれからそうやって「生きて」いきます。フィリピンにいる彼らに負けにくい「生き」ようと思います。そして、このフィリピンでの2週間を決して「思い出」になんかにせず、私の中で「生き」続けさせて、私は生きていきたいです。

## 河端 奈歩

フィリピン人の心の豊かさについて話そうと思います。フィリピンへ行って、やはり印象的だったのは、フィリピンの人達の「笑顔」です。フィリピンの人達の笑顔は本当に素晴らしいです。私達は行く先々で沢山の素晴らしい笑顔に出会いました。

彼らは決して作り物ではない本物の、心の底からの笑顔で私達に接してくれました。日本ではどちらかというと外国などから来た人達や知らない人に対して、どこか閉鎖的な感じで接してしまうところがありますよね？しかし彼らは本当に心から心を開いて外国からきた私達を受け入れ、笑顔に向けてくれるのです。笑顔の大切さに気づかされた瞬間でもあります。彼らは本当に心から接してくれました。

スモークマウンテンに行った時もそれは変わりませんでした。ここではスカベンジャーというゴミを拾って生活する人達がいるのですが、フィリピンへ行くまで、私は彼らのことを日本のホームレスのようなものなのかな？と思っていたので、見学へ行った時も、もっと「何みてるんだよ」という目で見られてしまうのかな？と心のどこかで思っていました。しかし実際に行ってみると、自分達は仕事をしているんだぞ、という意識があるからかもしれませんが、彼らはカメラやビデオを持った私達にも笑顔で接してくれました。日本のホームレスはどちらかというと白い目で見られがちで、後ろめたい感じで生きているという感じですが、フィリピンでみたのはゴミ拾いを立派な「仕事」として生きている彼らの「笑顔」でした。ワークの時もそうです。笑顔で楽しくしているのを良しとしている感じがしました。日本では仕事は仕事として一生懸命黙々と作業するのを良しとする傾向にあると思うのですが、フィリピンでは一生懸命仕事をしつつ、楽しくしようという精神があります。日本のように黙々と真面目に仕事をするだけが決して良いわけではないのです。そういう精神はやはり素晴らしいです。

フィリピンで出会った人達の顔を思い出しても目に浮かぶのは笑顔ばかりです。私がフィリピンで出会い、気づかされたのは日本人が忘れてしまった心の豊かさだと思います。今や、経済大国となった日本、経済的にはフィリピンに比べると本当に豊かです。しかし心の豊かさを考えたとき、どうでしょうか？心の豊かさはフィリピンに比べると遥かに貧しいのではないのでしょうか？心の豊かさで言ったらフィリピンの方が遥かに勝っていると私は感じました。勿論、日本人全てがそういう訳ではないでしょうが、やはりフィリピンの人達のように、心から接するというのは難しいのではないかと思います。現代の日本人が忘れてしまった心の豊かさがフィリピンにはあります。近い未来、遠い未来か分かりませんが、もしフィリピンが日本のように経済的に豊かな国になったとしても、この心の豊かさ、笑顔というものを忘れて欲しくないな、と思っています。



## 「ワークキャンプを終えて」

大西 由佳理

フィリピンにいる間、本当に良く泣いて、それ以上によく笑って、よく食べて、メンバーや、フィリピンの人達とたくさん話した。とにかく精一杯生きた2週間だった。このワークキャンプでの、作業、全体の活動を通して心揺れ動かされ、さまざまなことを感じ、考えた。今日は特に私がみなさんにお伝えしたいこと4つをお話したいと思います。

まず、一つ目、ワークについての感想をお話したいと思います。この作業を通して私の自分の「仕事」に対する考え方が日本にいた時とは一変しました。今まで日本にいた時は、どんな仕事でも、それをするのは厳しく、苦しく、大変で、何の楽しみも無い、ということを感じもなく信じきっていました。しかし、作業現場のコミュニティの人達は本当に楽しそうに仕事をされます。そんなサイトの人達の顔を実際に見ながら作業ができたことは、私にとっても大きな喜びでしたし、土木作業だったのですが、本当にワークは楽しいものでした。彼らは笑顔で、時には歌を歌いながら、本当に家ができることに期待や大きな夢をもって作業に望んでいました。仕事に対して希望や、わくわくする気持ちを抱く、ということは私にとって、大変新鮮な感覚で、「仕事」というイメージそのものを変化させました。仕事をするのはこんなに楽しいことなんだ！ということを知ることができました。

次にこのワークキャンプ全体を通しての感想を3つ、順番にお話したいと思います。まず、私がワークキャンプを終えて、強烈に感じたことは、自分に与えられているものの大きさです。例えば、私は勉強できる環境がある、家がある、生きていくに必要なお金がある、友達がいる、手を伸ばして、努力をすれば手に入れられるものがたくさんあります。自分の周りにあるすべてのものが、大きな恵みであることを強く実感しました。さらに、私に与えられているものはそれだけではありません。ワークキャンプのフェアウェル・パーティーでサイトの人が私に「勉強して、世界のために働く人になってね。」とってくれました。自分には物質的な豊かさだけでなく、たくさんの希望も与えられていることに気づいて心の底から涙が出ました。自分に与えられたものを無駄にせず、自分の人生を精一杯生きなきゃいけない！と感じました。

次に、ワークキャンプ中、「戦争」というものも私の中では大きなテーマのひとつでした。言うまでもなく、日本はフィリピンを占領していた時代があります。現地の方と話をしても、この話が出てくるのが度々ありました。私が「日本の兵士が過去にフィリピンで卑劣なことをしたのは確かです。私もそのことは知っています。」というと、「私達は未来に目を向けている。日本は好きよ。」と言ってくれる人がほとんどでした。私は「ありがとうございます」といいながらも、心の中では何か煮え切らないものがありました。本当に日本人としての私と、フィリピン人として彼・彼女達が真のパートナーになれるのかなあ、と。しかし、そんな私の心の靄を晴らしてくれたのがフェアウェル・パーティーでのハビタット代表の方の私達に向けたスピーチでした。彼はこうおっしゃいました。「過去に日本人はフィリピンに戦うためにやってきた、しかし今は愛を分かち合うためにやってきて

いる。」この言葉を聞いて私は本当に救われた思いでした。そして、過去に日本が行った過ちを認めた上で、今、私達がお互いに友達になることができるんだ！という感動で胸がいっぱいになりました。

最後に、フィリピンには日本からの観光客がたくさんきています。その中には、フィリピンの女性と遊ぶために来ている人もいます。今回も観光地のレストランに行った時、そのような光景を目にした私は、不覚にも涙がぼろぼろ出てきてその場から逃げ出していました。もちろんそれは1つのビジネスで、それで食べている人もいるのだから、いい、悪いの問題ではないのですが。それが、日本人、フィリピン人がお互いに友達になるための障害になると思うと、悲しくて、悔しくてしょうがありませんでした。このような状況も戦争の問題もそうですが、私はこういう事実があるんだ、ということを見据えていこう、と思いました。

ワークキャンプを通して、たくさんの貴重な経験をさせていただいて、素敵なメンバーや、フィリピンの方と友達になることができ、自分自身の考えを深めるいい機会になりました。引率して下さった先生方や、出会った人々、ハビタットのスタッフの方、それから、長い間お話を聞いてくださったみなさんにも、に本当に感謝します。ありがとうございました。

# WE ARE WORK CAMP Survivors!!

## あなたにとってフィリピンワークキャンプとは

- 「喜びも悲しみも共に」 金井 創
- 「出会い系、癒し系、現在進行系!？」 滝川 祐
- 「これからの自分をつくっていくもの」 佐藤 なつこ
- 「みんな愛してます」 吉村 悠
- 「自分を進化させる場所」 丸谷 由理
- 「心のカラーゲン」 遠藤 真由美
- 「新しい自分発見の場」 鈴木 奈々江
- 「人生最大の出会い」 大西 由佳理
- 「フィリピンを知るとともに自分を知る旅」 伊達 佳奈
- 「発見」 篠崎 知子
- 「いろんな体験を通して新しいことが学べるキャンプ」 唐澤 俊雄
- 「素晴らしき出会いの日々！」 白川 和亨
- 「扉」 鈴木 まりえ
- 「19年目のめっけ物！」 河端 奈歩
- 「心フル活用の日々！」 多井 裕子
- 「ワークキャンプ=経験」 岸 英明
- 「……。一言では言い尽くせません!!」 河村 愛
- 「学生生活最後の『青春』」 鳶津 絵名
- 「貴重な経験」 柏木 美穂
- 「衝撃」 佐久間 知香
- 「発見、経験、貢献、そして家一軒」 鍛冶 智也